

蠻舟を毀たざるべからざる如く、又蠻人をも滅せざるべからず、若し否らずんば、己等は皆悉く蠻人の爲めに滅さるべしと、之を要するに、彼はいと明白に、此事の必要を説示しければ、彼等は皆遂に彼の説に同意するに至れり。斯く評議一決しければ、彼等は直に蠻舟を破壊せんと、枯木の枝を集め、火を數艘の舟に掛んとせしが、いたく水に濡れ居ければ、容易に燃えざりしも、辛うして其上部を燒きて、航海に適せぬやうなしぬ。蠻人等は此體を見て、大に驚きけん、或る者は森より走り出て、成るべく我が島人に近寄り、跪づきて、

「オー、オー、ワラモマア」

と呼び、其他解すべからざる言語を發せしが、その動作の惘然にして、發聲の奇怪なるより察すれば、蠻人等はその舟を助けんとを願ひ、且つ幸に故國に歸りなば、決して再び來るまじとの意なりしと容易に知らるべし。されども島人等は、蠻人の本國に歸るを防ぐの外には、己等を保護し、此殖民所を維持する方法、他にあるべしと思はれず、若し蠻人の一人たりとも、その故郷に歸りて、事の始末を語らば、輒ち此殖民所は破壊せらるべしと信ぜしかば、少しも用捨する所なく、先きに暴風の爲めに破られざりし蠻舟は、一つも餘さず之を打毀ちければ、蠻人等、之を見て、森林中にて大に呼叫び、その聲いと哀れに凄しく、手に取る如く聽へけるが、やがて彼等は狂人の如く島を馳せ回はりければ、我が島人等は暫時手を着くべき様をも知らざりき。適に用

意周到なる西班牙人も、かく蠻人共を失望せしむるからは、それと同時に、當然耕地を守らざるべからずとは、思ひ設けざりしこそ、誠に千慮の一失なりけれ。如何にも、その家畜は、之を他に追やりたり、その重なる隠匿所、即ち丘陵の側なる我が元の城砦や、溪谷なる洞穴や、此等は蠻人等に發見せられざりしかど、かの別荘の耕地も、その生墻も、樹林も、皆悉く打破られ、米麥は皆蹂躪られ、正に殆んど成熟せし葡萄は折損れたり、此は蠻人に取りては、一毫の利益もなかりしかど、我が島人の損害、實に測るべからざりけり。

さて我が島人は、如何なる場合に於ても、蠻人と戦ふの力なきにあらざりしかども、その逃ぐるを追ひ、或はその山谷を走巡るを狩るとは、到底叶はざりけり、何となれば、蠻人はその脚餘りに輕捷なれば、若し單獨にて、彼等に出會んか、到底我の敵にあらず、忽ちその多數の爲めに圍まるべき處ありしかば、島人等は獨りにては外出せざりき。唯、幸に蠻人等は一も武器を携へざりき、弓は持ち居たれど、矢は一本も餘さず射盡したるのみか、之を作るべき材料もなく、又削るべき銳利の器具もなかりき。

蠻人共の窮狀艱苦大方ならず、實に憐むべき状態なりしかど、此れと同時に、我が島人等も、蠻人の爲めに、いと無慘なる境遇に陥りたり、假令その隠匿處は、無難なりしかども、その食料は損はれ、その收穫は傷けられければ、自ら何を爲すべさか、將た如何に處すべさか、彼等は

策の出づる所を知らざりけり。唯その依り頼む處は、溪谷の洞穴に藏せる家畜と、其處に生えたる些少の穀物と、三人の英吉利人、いな今は減じて二人となりし、アトキンス其他一人なる英吉利人の耕地のみなりけり、此三英人の一人は、蠻人の射たる一矢、その頭の側面、正に額の下に中りて、そのまゝ倒れ死したりしが、此英人こそは、嘗て手銃を以てかの可憐なる蠻奴を切り、その後又西班牙人等を殺さんと企てたりし、かの兇暴なる奴なりしとなん、寔に奇異なる事なりけり。

我は熟此當時の状況を觀察し、之を以て我の始め此島に漂着し、やがて米麥の粒若干を發見し、之を貯めて收穫を得、且の家畜を牧養したる、其後の我状態に比するに、一層悲惨なりしと思ふなり、蓋し此當時は、百匹の狼軍此島を徘徊し、眼に觸るるものは、皆之を食盡すも、而も之を捕ふるに至難なりければなり。

ある程は、島人等は此く悲境に陥りければ、如何にしても之を挽回せんと、種々協議の末、まづ第一に若し更に他の蠻人等へは上陸すとも、之をして互に知らざらしむるやう、成るべく今の蠻人等を、島の西南隅に追ひこむこと、次に日々蠻人を狩立て、これを惱し、成るべく多く之を殺戮し、以て竟にその數を減ずること、而して最後に若し終に彼等を懐柔して、幾分たりとも之を用に立たしむるを得るに至らば、之に米麥を支給し、之に耕作の法を教へ、以て自己の勞働

に依りて生活せしむることなど、二三の事項を決議したり。

さても彼等は、此目的を達せんとして、常に蠻人等の後を躡ひ、見出せば輒ち銃を發ちて之を嚇しければ、未だ二三日を経ざるに、其効大に現はれ、假令ひ銃丸中らざるも、其音響に恐れ、忽ち倒れ伏し、竟にいたく慄き怖れて、次第／＼にその姿を見せざるやうなりしが、我が島人等は尙も之を追躡し、幾んど廬日なく、之を殺し、若くは傷つければ、終に彼等は森林、又は山谷に籠り、その結果、食物の缺乏より、いと哀れなる境遇に陥り、傷痍を受けし痕少しもなく、全く飢餓の爲めに仆れたる屍、後に至りて森林の中に、見出されたるもの少からず。

我島人等は、これを見て、坐ろに惻隱の情に堪へず、深くこれを憫れざるはなかりしが、殊に頭領たる西班牙人は、その性最も温厚寛大にして、我が生涯の中、嘗て其匹儔を見ざりし君子なりしかば、同情に得堪へずやありけん、成るべくは、蠻人の一人を生擒り、之をして通譯たるに足るだけ、我が言語を教へ習はせ、之を蠻人の中に遣はし、以て彼等が其行を改め、我等に害を被らしめざるやう、これを矯正するの望あるかを試んとしたり。

されどその後暫らくは、蠻人の一人だも捕ふると叶はざりしが、彼等は半ば飢餓に迫りて、軟弱となり居ければ、竟にその一人は捕へられて、俘虜となりたり。彼は始めは快々として、飲食も取らざりしが、待遇懇切にして、食物も給せられ、毫も殺伐の事あるを見ざりしかば、竟に我

に復りて、從順とはなれり。是に於て、老フライデイを遣はして、先づ數彼と語らしめ、かくて漸く彼に語りて言はしむるは、島人は蠻人等の何れに對するも懇切なる事、彼等にして、若し自己の境界を守り、濫りに之を越えて、他人を傷害するとなからんには、管にその生命を助くるのみならず、之に島の一部を割き與へて、生存するを得さすべき事、又彼等に米麥を與へて、之を播種しめ、之を耕作して麵麩を製らしめ、且つ若干の麵麩を與へて、當分の食料に充しむべき事など、説き示させ、かくて老フライデイは、此捕虜に命じ、その國人の許に行き、これと語りて、その言ふ所を聴かしめ、且つ彼等もし直に同意を表せずば、皆悉く殺戮せらるべしと、言はしめたり。

さる程に、可憐なる蠻人等は、その數已に減じて三十七名程となり、その意氣全く銷沈したれば、右の申出を聴くや、一も二もなくこれに同意し、且つ若干の食物を與へられんとを願ひたり。是に於て、西班牙人十二人と、英吉利人二人は、充分に武装を整へ、三人の蠻奴と、老フライデイとを引連れ、蠻人等の居る處に赴きしが、三人の蠻奴は、多量の麵麩と、米を煮て餅に作り日光に乾したる食物と、生ける山羊三匹とを携へ行きたり。かくて蠻人等は、命令により一の丘陵の側面に行き、そこに坐し、深く謝して、此等の食餌を食ひけるが、爾來善くその約束を守り、少しも之に背くとなく、或は食料を乞ひ、或は命令を請ふ時の外は、決してその境界の外に出づ

るとなく、我が再び島に來りて、彼等を訪問せし時も、猶依然として其所に住ひし居たり。さて島人等は、是れより先き此蠻人共に、穀物の耕作法、麵麩の製法、山羊の牧養法、並にその乳の搾取法を、教へければ、妻女の外には、何物も缺く處のものなかりしかば、思ふに幾くもなく、發達して一國を成すに至るならん、又此蠻人等に割き與へられたる地域を見るに、島の東南隅なる、一の地頭にして、背後は高さ巖石に圍まれ、前は海に面し、眼を遮るもの一物もなし、而して土地廣く、甚だ肥沃にして、幅凡そ一哩半、長さ凡そ三、四哩あり、又之に教ふるに、我が嘗て自ら作りし如き、木製の鋤の造法を以てし、且つ十二挺の手鋏と、三、四挺の小刀を與へしかば、彼等は全く我が島人共に服従し、少しも人に傷害を加へず、いと平和に暮らし居たり。

第二十段

島民の不和を調停して大に之を賑はし  
島治の方法を立て、信教の自由を説く

去る程に、我が、再び島を見舞ひしは、此事のありしより、凡そ二年の後ちにして、それまで蠻人の事に就ては、此殖民所は全く無事平穩に打暮らしたり、只時折例の凱戦祝と稱する、不

自然なる宴會の爲めに、若干の蠻舟が海岸に來りしのみ、されどそれ等は同一の國民にあらず、幾國にも別れ居ければ、多分は前に來りし者共の事は、嘗て之を耳にせしとなかりしならん、そが爲めにや、此等の蠻人は、その國人の事に關して、何等詮索するともなかりき、又假令詮索したればとて、彼等を發見すると、甚だ困難なりしならん。

思ふに、以上語りし所を以て、我が再び島に來りしまでに起りし、重なる事柄を盡したるならんが、爰に尙ほ一言すべきとあり。蠻人等は島人等の指導によりて、大に進歩發達したるも、再び島人等に叛きて、その殖民所の事を、蠻人の本國に密告せんかと恐れしかば、島人等は之を訪問すると數なりしも、蠻人等の殖民所に來るとは、全くこれを禁止したり。島人等が蠻人等を指導教化せしと、數多あれど、特に著しるしきは、柳條を以て籠細工を作るを教へしとなり、蠻人等は天性此技に長じ、籃、篩、鳥籠、茶棚、その他椅子、腰掛、寢臺、臥榻、の類を製作すると、甚巧妙にして、一旦其端緒を教へらるや、幾くもなくその技教師を凌ぐに至れり。

我が再び島に來るや、小刀、鋏、鋤、「シアベル」丁字鋸その他之に類する道具にして、島人等の要すべきもの、數多携帶せしかば、島人等の便利一方ならず、巧に此等の道具を用ひ、遂にいと美麗に家屋を建築し、その周圍を籠細工にて編立たり、一見甚奇異なれど、能く諸種の害蟲を防ぐと共に、又能く炎熱をも遮ぎり、増壁としてその効極めて大なりしかば、島人等は其の造作

に忙はしく、蠻人等にもその工事を助けしめたり。されば我が、かの兩人の英吉利人の殖民所を看んとて來りしとき、遙に之を望めば、その形狀恰も蜂の巢の如くなりき。かのウイル、アトキンスは、今は性質一變して、老實有用の人と化し、善く業を勉め、自ら籠細工の家屋を造りけるが、構造の巧妙にして、美麗なる、未曾て他にその類を見たるとなし。我は歩みてその周圍を測りしに、百二十歩あり、その外郭の壁は三十二個の正方形籠細工の額面にて之を作り、構造頗る堅固にして、高さ約七呎あり、その内郭の壁は、周圍二十二歩に過ぎざれど、構造一層固く、形状八角にて、その八隅に堅固なる支柱八本を立て、その上に堅固なる桁八本を渡し、木柱を以て之を附着し、それより八本の桁を以て合掌を樹立して、金字形の屋根を構造したれば、その外觀頗る美麗なり。鐵釘とはなく、僅に二三の大鐵釘を用たるのみなれど、その結合甚善く整ひたり。此大鐵釘も、我が嘗て遺し置きし古鐵を以て、アトキンスの自ら造りしものなりといふ。實にアトキンスは、己が前に毫も知らざりし事に就き、天才を表はしたると少からず、彼は嘗て木製の風櫃を附着せる鍛冶道具を造り、工所用の木炭を製し、又鐵鉤を以て、鐵砧を作りたり、其他幾多の物を造りしが、特に鉤、肘鈕、大釘、棒頭、蝶番など造りたり。思はず餘談に渡りしが、又々家屋の事を説かん。さてアトキンスは内屋の屋根を葺きたる後、桁の間を籠細工にて堅固に蔽ひ、その上を更に稻藁にて巧に掩ひ、又其上を大なる木葉にて葺きしかば、宛がら瓦か、

石板にて葺きたると同じく、家屋は常に乾燥し居るべし。彼の明言する所に據れば、蠻人等も此  
 籃細工を援助したりといふ。さて此内郭の周圍は、三拾二個の角より、内郭八角形支柱の胴差に  
 合掌を投げかけ、偏屋をもて蔽ひ、その下は凡そ二十呎の幅あり、かくて外部なる籃細工の壁の  
 内と、内屋の外との間は、幅殆んど二十呎の回廊の如き空地を設けたり。

内屋は、一層美麗なる籃細工を以て六室に分割し、各室に出入口を設け、一は通行口若しくは  
 内郭に通じ、一は其周圍なる空地、即ち回廊に通じ、隨て回廊亦分たれて、六室となり、單に休  
 息所たるのみならず、家族の必需品を貯藏する處たり、此六室の外、外部に屬する他の室は、大  
 要左の如くなり。外部の入口を入れば、短かき直線の通路あり、内屋の入口に達す、されど兩側  
 に籃細工の壁あり、それに一の入口を設け、それより先づ一大室、即ち物置に入る、此物置は幅  
 二十呎、長さ凡そ三十呎あり、之を通過すれば、稍短き他の室に到るべし、右の如くなれば、外  
 郭には、美麗なる室十個あり、その中の六室は、内屋の室を通過せざれば入るべからざる構造に  
 て、内郭の各室に屬する休息所なり、又四個の大なる物置あり、通路の兩側に配列して、互に相  
 通じ、出口より内屋に通ず。

思ふに斯る籃細工は、世界廣しと雖も、外にはあらざるべし、又此く巧妙なる考案なかるべし、  
 况んや此考案を以て建築せられたるものをや。此巨大なる蜂巢に三家族、即ちウイル、アトギンス

の家族と其冊輩の二家族住居したり、その中の一家族の主人は、戦死したれど、その時姪娘中な  
 りし妻女は、今は三兒と共にここに住ひけるが、他の二家族は悉に此寡婦を助け、何に不自由な  
 からしめ、常に穀物、乳、葡萄など、支給するのみか、或は仔山羊を殺し、或は海龜を海岸にて  
 捕ふるときは、その肉を分ち與へたり、されば此三家族は、既に記載したる如く、他の二英吉利  
 人程には、勤勉ならねど、何れも相應の生活を營み居たり。

さて茲に省略すべからざる一事あり、宗教の事これなり、彼等の中に此種類の何事ありしか、  
 我は之を知らず、成る程水夫の常として、動もすれば神呼はりを爲して、神の存在を、互の心に  
 認むるが如き趣なきにあらざりしかども、此可憐なる無智の蠻妻は、所謂基督教徒と結婚したり  
 とて、特に幸福にはあらざりき、そは此等の基督教徒は、只その名のみにて、自ら殆んど神を知  
 らざりしかば、苟にも神といふ事に就て、妻女と談話するとも叶はず、又は宗教に關して、何事  
 をも妻女に語ると能はざりしが故なり。

夫の訓導によりて、妻が受けたりと云ふべき、改良進歩の中、最も稱すべきは、英語を可なり  
 に習覚えたるにて、その小兒等郡て二十人程が、母と同様甚變則ながら、多くは初めより  
 英語を語るとを教へられたり。此等の小兒は、我の彼所に往きし時には、いづれも六歳未滿なり  
 しが、こは彼等が蠻女五人を、他境より連れ來りし以來、七年を越すと多からざりし故なれど、

彼等は皆子福者にて、何れも多少小兒を持ざりしはなかりき、殊にかの料理人の妻は、第六子の懐妊中なりしと覺えたり、又此母親達はいつれも沈着、靜穩にして、善く己の職務を勵み、溫和端正にして、互に相援助するの美德を具へ、その主人(夫とは稱すべからず)に善く服従し、且つ深く注意したり、されば只基督教に關する教育なかりしと、正式に結婚せざりしと、此二點の外には、妻女として缺點なかりき、此二點も我の此所に來りたる爲め、その後これを補ふとを得たるは、誠に幸なりき。

以上に於て、此殖民所に關する大體の事と、英吉利人等の事とを語りたれば、今より此島人の重なる團體たる、西班牙人の事に就きて、少しく述べし、その談話中には亦特に注目すべき事柄尠からず。

去る程に、西班牙人等が此島に渡來せし前、異境に於て蠻人等の中に居りたる時の事情に就き、我は彼等より聽きし事柄甚多し、その屢語る所を聽くに、彼等の彼地に居りし時は、自ら勞力に就き、或は才智を働かさんとするも、其機會少しもなく、只憐れはかなき不幸の小數者なりしかば、假令ひその手に相應の仕事を授けられたればとて、孰れもいたく自棄自暴となり、深く不幸の淵に沈淪み、餓死の外には何事も思はざりしといふ。彼等の中、老實にて賢智き一人は、我に語りていふやう、我等がかく失望落膽せるは、これ甚宜しからずと、己は爾く感じたり、

凡そ艱難不幸に際會して、之に屈託するは、智者のなすべき事にあらず、宜しく常に道理の指揮に従ひ、未來の救済の爲にすると同じく、亦現在の支持の爲めに、力を盡し、助を求むべきなり、抑も悲歎は、此世に於て最も無意義にして、卑しむべき感情なり、何となれば悲歎とは、概して恢復し、若くは治療すべからざる、過去の事にのみ關し、毫も將來の事に着意せず、少しも救済といふが如き事に與るとなく、恢復を謀るよりも、寧ろ艱難を増大するものなりと云ひ、かくて彼は西班牙語にて一の諺を反覆したり、今彼が語りし同一の言葉を以て、爰にこれを繰返すとは叶はねど、自ら之を翻案して、英語の諺とすれば、即ち次の如し。

"In trouble to be troubled."

"Is to have your trouble doubled."

苦痛を苦痛として思煩へば

其の苦痛を二倍にすべし

彼は次に、我が往年孤棲獨居したりし頃、種々の事に關して、少しく改良を計りし事、我が専心經營して、少しも倦ざりし事、我が始め、彼等よりも一層悲惨なりし境遇を一變して、今彼等の現に處する境遇よりも、幾千倍も幸福ならしめし事に就き、少しく談論し、さて言を改めて言ふやうは、英吉利人は、艱難に處して、毅然として心を動かさざると、會て出會ひし他の人民に

勝れり、己の國民と葡萄牙人とは、災厄と戦つて、意氣地なさと、世界中他にその比を見ず、その一步危難に陥るや、これを免れんとて、一通り力を致し了れば、輒ち失望して之に屈伏し、終に一敗斃死するに至るのみ、未曾て之を脱せんが爲め、躍然適當の處置を講ずるとなしと言へり。

我は之を聽き、我が境遇と彼等の事情とは、甚しき差異あり、彼等の海岸に漂着せし時は、食料その他必需品なく、自ら之に備へしまでは、眼前生命を保つと叶はざりしなり、如何にも我は單獨なりしかば、萬事に就き不利益にして、且つ不愉快なりしに相違なかりしも、やがて我は神の冥助により、思ひがけなくも破船の海岸に打あげられて、種々無數の物品我が手に入りたり、假令何人たりとも、斯る援助を受けなば、恐らくは憤勵自ら勉むるならんと述べけるに、彼又言ふやう、

「我々西班牙人が貴君の如き境遇に出會つたならば、貴君が取出した半分の物品をも、決して取出すとは出来なかつたてせう、いや、我々は之を運搬すべき、後を造る手段も、決して出来なかつたてせう、況んや若し我々が單身であつたら尙更の事です」

と。是に於て我は、彼が徒に贅辭を陳べて、我を慰むるを止め、彼等が海岸に上りし以來の歴史を語らんと求めければ、彼は詞を繼ぎて語りけるやう、彼等の上陸したる處は、不幸にして食物

の貯藏なき人民の住居せる處なりしが、若し常識ありて、再び海に出て、少しく距れる他の一島に赴きたらんには、そこには人民は居らずとも、食料を見出したるならん、豫て噂に聞さし如く、その方向には一島あり、住民は一人もなかりしかど、多少の食料はありしなり、かのトリニダツト島の西班牙人等は、屢該島に赴き、大に山羊並に豚を牧養したるのみならず、海龜、海鳥も、いと澤山なりしかば、假令麪粉は少しもあらざりしも、肉類に缺乏を告げしとなかりしに、此處には此の食物なく、些少の根類と草類とを喰つて、纔に生命を維きたり、此草類は、何と稱するものか知らざれど、その莖は管狀にして、中に食質なく、その供給も極めて僅少なりしと見え、住民は之を彼等に多く與へざりき、されば彼等は自ら食人族となりて、此國の美味佳肴たる人肉を食はざれば、これ以上に厚遇するの道なかりしなり。

又彼等が、百方を盡して、同居の蠻人等を教化し、これをして尋常の生活を営ましめ、道理ある習俗に従はしめんと勉めしり、竟にその効なかりし事、此實驗に由りて、凡そ他人に援助を求め、衣食を乞ふ者が、之を支給する其人を教化せんと企つるは、正當の事にあらずと悟りたる事、即ち凡そ何人にせよ、他人の力を藉らずして、生活し得る者にあらざれば、他人の教師たるべからずと一真理を悟りたる事など、一條の物語をぞなしける。

又彼等が、進退維谷れる、悲惨の事として語れる談話を聽くに、その上陸したる島には、最も

懶惰なる一蠻族住ひしかば、衣食の必需品とは、供給甚乏しく、同一の位置にある地方として、世界に又と此る處あるべしとも覺ざる程にて、往々數日の間、全く少しの食物をも食せざりしとあり、さるかはりには、此蠻人等は、食物の供給一層饒なる者共に比ぶれば、その性貪婪ならざりき、又因にいふやう、かゝる不幸なる境遇に陥りたれど、神が此世の萬事を攝理し給ふ、その智能と慈仁の廣大なると、如何に稱揚するも過當にはあらず、そは彼等の成行に照らして明なり、蓋し彼等もし己が境涯の艱難に迫られ、その國土の荒蕪に賣められて、更に安樂の住地を求めたらんには、我が嘗て與へたる救助に會ふと叶はざりしならん。

次には、彼等の同居せし蠻人等の希望により、共々戦争に出行さし、その時の有様を語りて曰く、如何にも彼等は火器を所有し居たれば、若し幸に火藥を失はざりしならば、管に味方の爲めに用を爲し、のみならず、味方にも敵にも恐れられしならんに、不幸にして火藥も彈丸もなく、而も勢ひ己が地主の爲に從軍を否むと叶はざりしかば、その戰場に臨むや、蠻人よりも一層不利の状態なりき、蠻人は弓矢を持ちしも、彼等は之を持たず、よしや之を持つも、その用法を知らざりしかば、只空しく列に立ちて、竟に敵矢に疲けらるゝを待つのみにて、何事をも爲す能はざりき。されどその後三本の戟を得しかば、之を揮つて、屢敵の全軍を追ひしとあり、或は木片を尖らし、これを銃口に附着して、敵と戦ひしとあり、されどかくても往々敵の大勢に圍まれ、

その射出す矢の爲めに、大に危険に迫りしとありければ、竟には自ら工夫して、木製の大なる楯を造り、其上に名も知らぬ野獸の皮を蔽ひ、之を以て蠻人の矢を防ぎたれども、猶ほ大に危険を感ぜしと數なり。嘗て其五人の者共が、蠻人の棍棒をもて、同時に撲倒されたるもあり、此はその一人が捕虜とせられし時にして、此捕虜とは、我（ろびんそん）の嘗て救助せし、西班牙人なりじなれ、始めは此捕虜は殺されたりと、彼等は思ひ居りしに、後に俘にせられしと聞き、いづれも悲歎一方ならず、假令己等の生命を危うするも、彼を救はんとしてたりしとぞ。

さて右の五人が、撲倒されし時、その他の味方は救はんとして、これを蔽ひかくし、死したりと思ひし、彼の一人の外は、皆之を擔ひ、戟と銃とを以て、防ぎ戦ひつゝ一條の血路を開き、密集縱隊を作り、一千人餘りもありと見えし、蠻人等の一隊の中を通過し、當るにまかせて之を打作し、遂にその敵に打勝ちしが、圖らずも、味方の一人を失ひしかば、大に悲歎したり、然るにその死せりと思ひし者、生存せるを見て、敵は他の者と共に、之を捕虜として、此島に連れ來りしなり、そは我が前に陳べたる如し。かくて最も兇惡なる野獸、即ち野人に啖はれたらと思ひしその友人が、歸り來りしかば、彼等の驚喜大方ならず、友愛の情言語に溢れしが、彼がもたらせし使命を傳ふるや、彼等は愈益驚き、且つ一人の基督教徒が、程遠らぬ地に居り、その材幹たぐましく、加ふるに仁慈の心餘りありて、切りに彼等を救濟せんと思ひ居れりと聞き、感激



極りなかりしとぞ。

又我の送りし救助の便を、その眼前に看、且つは斯く不幸の地に來りし以來、未曾に見ざりし  
 鎗砲を見て、いたく打駭さし、その模様を就き、彼等は語りて言ひけるは、彼等は此鎗砲を以て  
 天の賜とし、これを祝福し、又之を以て幾度十字形を切りて感謝し、我が贈りし他の物品と  
 同じく、これを味ふは、恰もその精神に、興奮劑を投じたるが如く、歡喜極りなかりき、又最後  
 に一艘の小舟と案針者とを見、併せて此はこの新福音の來りたる、其人と場所とに、彼等を伴  
 行んとて、特に來れるなりと聴くに及びて、その喜悅言語に盡すべからず、喜悅極りて自然に海外  
 となり、その感情を穩健に洩らすの道なく、殆んど狂氣に類せりといふの外、當時の状態を記す  
 るの言葉を知らずと云へり、而して各自の感ずる所一様ならず、甲は驚喜の爲めに潸然として涙  
 を垂れ、乙は全く精神を取亂し、丙は立地に正氣を失ひたり。我は此談話を聴きて、非常に心を  
 動じ、かのフライデイが其父に遭ひし時、若くはかの乗船者が船火事の後、海中より救上げられ  
 たる時、又はかの船の運轉手が、死を覺悟せしに、救助せられたる時、又は我自身が二十八年間  
 此孤島に幽囚せられし後、頓に我を故郷に伴行すべき一艘の船を見出したる時、その歡喜雀躍  
 せしと、此くこそあらめと、坐に思出られしかば、我は此可憐なる人々の談話に對し、一段同情  
 を催はしける。

さて、我が再び此島に來りし際の状態は、大要右に記したれば、今より筆端を改め、爾後  
 此島人の爲めに、我が計りし事柄と、我が再び此島を去りし時の状態とに就きて陳述せざるを得  
 ず。島人等の説にては、最早蠻人等のために惱まるゝとなからんといひしが、我も亦かく思ひた  
 り、假令ひ蠻人等が來りて、その勢前日の二倍あればとて、これを殺戮すると敢て難からざれば、  
 この事に就ては少しも憂慮するに及ばざりき。次に我は彼等の島地在住の事に就き、頭領の西班  
 牙人と、重要な談話を爲しけるが、抑も我の再び島に來りしは、何人をも伴ひ去らんと意には  
 あらず、何となればその員數勢力減じなば、島人の中在住するを欲せざるもの出來らんか、其  
 時、甲は連れ行き、乙は遣し置かんは、これ正當の事にあらざればなり。

之に反し、我は彼等に語りていふやう、我が來りしは、彼等をして島に定住せしめん爲めにし  
 て、此處を去らしめん爲めにはあらず、されば彼等に贈らんとて種々様々なる物品を携帶し來れ  
 り、こは防禦の爲めのみならず、便利の爲め、何れも必要の物品にして、我の苦心一方ならざり  
 き、且つ又島人の數を増加し、その勢力を助長せん爲め、云々此々の人物を伴ひ來りしが、此は  
 一つには、島人等が現に要求する事に關して、援助を與へんと意なれば、この人々は、いづれ  
 も技藝に熟練し、特に有用なる業務に任ずべき者共なりと。

此く語りし時は、島人等悉く集合し居たりしかば、我が携來りし物品を、彼等に分配するに

先ち、我は一人一人彼等に向ひ、從來彼等相互の間に蟻りたる悪感情をば、全く打忘れ、最早誤解、若くは嫉妬の、毫も存せざるやう、互に握手を交換し、以て友誼を密にし、利害を共にせんとを互に誓約すべし、これ我が願なりと言ひたり。

かゝりければ、ウイル、アトキンスは、いと淡泊に、元氣よく發言して云ひけるは、己等は既に幾多の艱難に遭遇たれば、皆眞面目とならざるべからず、又幾多の仇敵と闘争したれば、最早皆親睦せざるべからず、己れ一個としては、他の者共と死生を共にすべし、西班牙人等に對し、毫も意趣を挟むが如きとなきは、更にいふまでもなし、從來彼等が己に對して行ひし所は、己の過誤若くは狂態の然からしめし所のみ、若し彼等と地を換へなば、己も亦此の如くなすならん、いな恐らくは一層酷しかりならん、されば若し我の希望とあらば、己れが既に彼等に對して行ひし、罪業馱爲に就ては、彼等の容赦を請ひ、彼等と全然友誼を結び、同心協力せんとは、偏に願ふ所なり、若しそれ此事を證明せんためには、己が力に適ふ所は、何事たりとも悦んで之を爲すべし、又本國英吉利に歸るや、否やに就ては、己れは最早二十年間歸國せざれば、何れとも敢て意に介せずと、

ウイル、アトキンスの陳説了るや、西班牙人等は、陳べて云ふやう、嘗てウイル、アトキンスとその同國人二名の行爲、宜しからざりしかば、その武器を奪ひ、これを放逐したりしとは、先きに我（ろびんそん）に訴へし如く、全く止むを得ざるに出たれども、爾後ウイル、アトキンスは、かの蠻人等との大戦闘の際、その他幾回か、頗る勇猛に振舞ひしのみならず、己等全般の利害の爲めに、最も誠實に憂慮したれば、己等の過去の事は一切既に忘れ、彼に武器を渡し、必要品を給すると、己等の仲間と同様にすべしとは考へたり、さればこそ彼をば頭領に次げる指揮官に任じて、己等の彼に對する信任を表白したるなれ。されば己等はアトキンスとその同國人全體を深く信任すると同時に、凡そ正直なる人々が、他人より受くべき尊敬、信任を以て、彼等を待遇するも可なりと、心竊に是認せり、而して今此好機を得て、將來決して相互の利害を別にすまじと、我が面前に於て誓約するは、衷心最も喜ぶ所なりと陳述したり。

此く双方が、腹臆なく淡泊に、友誼深き陳述をなしければ、我等はその翌日一同會食するとし、盛大なる宴會の準備を爲し、船の料理人とその同僚に上陸を命じ、午餐の調理をなさしめ、かの英國人にて嘗て船の料理人たりし老人にも、これを助けしめたり。船よりは、牛の良肉六塊と豚肉四塊其他「ボンズ」、盃並にこれに満すべき材料を持來らしめ、又特に我は佛蘭西製の葡萄酒十瓶と、英吉利製の麥酒十瓶とを島人等に饗したり、此品々は西班牙人等も英吉利人等も數年間嘗て味はざりしものなれば、非常に喜びしと、察するに餘りありたり。

此他西班牙人は、仔山羊五頭を加へて、饗宴を賑はしければ、これを焼きて膳に供し、その三

頭は船中の水夫に贈りて、陸上の生肉を賞美せしめ、以て船中よりせる鹽肉の贈物に報いたり。さる程に此餐宴は、互にいと無邪氣に歡を盡し、首尾好く終りければ、我が携來りし物品を持出しけるが、その分配に就て争論なからしめんため、我は物品の數量餘りあることを示し、皆その衣服の料を均一に取らんとを望み、先づ各自の爲めに四枚の「シャツ」を作るに足る程の麻布を分配せしが、後に西班牙人の請求ありければ、これを増して六枚を作るに足る程となせり、久しく「シャツ」を着せざりしかば、彼等はその着用法をも忘れし程にて、その喜悅極りなかりき。

又前にも記載せし如く、英國製の薄布を銘々に分與し、之を以て、此地の炎熱なる氣候に最も適合せりと、我の思ひたる「フロック、コウト」風の輕ろき電襦なる上衣を作らしめ、且つその破れたるときは、更に各自の好みに随つて、製作するやうに命じたり、此他淺靴、半靴、靴下、帽子等をも分配したり。

我が此く深く彼等の爲めに注意し、充分に種々の需用品を贈與しければ、此可憐なる島人等は、喜悅の色滿面に現はれ、その満足せる様筆紙に盡すべからず、彼等は我を父と稱し、我の如き通信者あるを以て、かく萬里の異域に居るも、荒涼たる無人の境に遣されたるをも打忘るゝなりと言ひ、我の認可なくば、決して此地を去るまじと、各自進んで誓約したり。

次に我は、伴ひ來りし職人等を彼等に紹介したり、その中重なるは、裁縫師、鍛冶師、大工兩人にて、何れも皆必要の職人なれど、就中我が所謂萬能男は、彼等に取りて、何物よりも有用ななき。かくて裁縫師は、島人等の爲めに、己が配慮の程を示さばやと思ひしが、直に仕事に着手し、我の許を得て、先づ手初めに、各の爲めに「シャツ」一枚づつを仕立て、その上女子等に縫方、縫方、並に運針法を教へしのみならず、女子をしてその良人、其他の人々の爲め、「シャツ」の仕立を手傳しめたり。

大工の如何程有用なりしかは、我の別段に記すまでもなきが、彼等が我が獨居の際、自ら作りたる、拙劣にして不體裁なる器具類を、悉く解きほごし、その材料を以て、美麗なる便利の卓子、腰掛、臥榻、膳棚、戸棚、棚、その他此類の需用品を造りたり。

然れども、凡そ自然の必要は、素人を化して、技術者たらしむることを示さんため、ウイム、トキンスの建築したる籠家を一見せしめんと、兩人の大工を伴行ししに、兩人はこれを見て、未だ曾て此る自然なる、天才の一例をだも視たるとなし、又かく方正に、かく巧妙に建築せられたる、此類のものは、未だ曾て目に觸れしとなしと言ひ、殊にその一人は、これを觀て暫時黙考し居けるが、我が方を顧みて、

「此んな技術家が居れば、我々の必要は少しもありません、貴下は道具を此人に與へれば、何もするには及びません」

と言ひたり。次に我は道具類を悉皆取出し、各人に「鋤、鋤、シブアブル」一挺づつを與へたり、これ島には肥も鋤もなかりし故なり、又各所に鶴嘴、鐵挺、大斧、鋸を備付け、もし破壊するか、消耗すれば、我が残り置く倉庫より、新しい物を取り出して、惜まらず使用するべしと言置たり。釘、鉤釘、螺釘、鐵槌、鑿、小刀、鋏、その他諸般の道具、鐵具は、その所用にまかせ、無断にてこれを使用せしむるとしたり、如何となれば、此類のものは、誰とてその入用以外に取ることもなかるべし、若し徒らに之を費し、或は破るものあらば、そは馬鹿者なればなり、又鍛冶師の使用に供せんため、未製の鐵塊二噸を遺し置たり。

火藥と火器は、餘りある程に携來りしかば、島人等は大に悦びたり、蓋しこれによりて彼等も、我が嘗て爲せし如く、折々は各銃を擔ひて進行し得らるゝのみならず、千百の蠻人等を相手とし、少しく有利の位置さへ占領すれば、之れと戦ひ、その射撃も亦善く命中するを得べし。さる程に我は、母の飢死たるかの青年と下婢をも伴ひて上陸しけるが、此下婢は相應の教育もあり、宗教心に富む老實の妙齡婦人にして、その動作温順にて、何人にも好遇せられたり、船中には、彼女の外に、女子居らざりしがば、淋しく暮らし居たれど、善くこれを忍び、絶て氣色にも現はざりき。さても此兩人は上陸後、我島の光景を觀しに、諸事善く整頓し、漸次繁榮に赴

の模様あり、且つは己等は東印度に用事とてあるにあらず、又知人あるにもあらぬに、斯く長途の航海をなすは、理由なきとなれば、彼れ此れ考慮したりけん、暫時して兩人共々我が許に來り、島に留りて、我が一族に加はらんと欲する意を陳べて、我が承諾を求めける。

我は頓に此希望に賛意を表し、乃ち一區の地面を兩人に分與しければ、兩人は此所に三張の天幕、即ち三棟の家屋を建て、その周囲は、隣地なるアトキンスの家の如く、籠細工を以て、これを繞らし、中央の天幕は一大倉庫の如く、諸般の物品を納め、此所にて飲食し、兩側の天幕には、各一室ありて、兩人別々にこゝに起臥したり。かくて他の二人の英吉利人も、住居をこゝに移しければ、島は自然三個の殖民所に分れたり、即ち西班牙人等と老フライデー並に最初に歸服したる數名の従者は、かの丘陵の下なる我舊居に住ひしたり、要するに是れ即ち本島の首都なり。是れより先き彼等は、丘陵の外側、並にその下をも、大に擴張しければ、外部より視れば全く蔽はれて、その所在を認め難けれど、内部は寛々として充分の餘地あり。森林にてかく蔽隠されたる、斯る小都市は、世界中如何なる處にも決してこれなからん、假令一十名の人々が、一個月の間島を徘徊したればとて、若し豫じめ此物のあることを知りて、特に搜索するにあらずば、これを見出すと叶はざるべし、何となれば、樹木密生し、枝葉繁茂し、互にしかと纏ひ居るをもて、先づこれを切斷するにあらずれば、決してその場所を發見すべからず、勿論出入口あれ

ど、唯二個處の狹隘なる通路あるのみにて、之を見出すと甚容易にあらず、その一は溪流の水涯にあり、それより六十間を登らざれば、家に達すると叫はず、他の一は、我が前に記載したる如く、二回梯子を昇降して出入すべき構造にて、丘陵の頂は面積廣くして、一大森林帶若としてこれを蔽ひ隠すその中に、二本の樹木の間に僅に一條の狹き徑路あるのみなれば、之を見出して入り來ると容易にあらず。

他の殖民所といふは、ウイル、アトキンスのそれにて、此所に住居するは、英吉利人の四家族、即ち我が先きに島に遣しおきて、既に妻子あるものと、奴隸なる三人の蠻人と、戰爭にて殺されたる英吉利人の寡婦並にその子供等と、かの青年並に下婢と、その他我が携來りし二名の大工並に裁縫師と、島人の武器、殊に鐵砲鍛冶として、最も必要なる鍛冶師と我が「萬能男」と稱する一人の男なり、此男は甚器用なるのみならず、その性いと愉快なりしかば、殆んど二十人前の價值ありたり。

さて此島の事を、かく纏めれば、我は乗船の準備に取掛りし折柄、かの飢餓に苦しみし船の連中より收容せる青年、我が許に來りて言ふやう、我は一人の僧侶を伴へるよし、又先さには英吉利人等に、蠻女を娶はさしめたりと聞きしが、こゝに夫婦となしたる二人の基督教信者あり、我の島を去る前に、此兩人を結婚せしめんと思ふなり、願ふはこの事を拒絶み給ふなといへり。

我はこれを聞き、此島には、此青年の母の下婢たりし、若き女子の外には、基督教を信する女子とは、一人もなければ、それと推察し、青年に對し徐に説出しけるやう、彼は今寂寞しき境涯に居ればとて、かゝる輕卒なる事をば、努々なすべからず、彼の爲めに謀るも、下婢の爲めに考ふるも、世には適良き伴侶數多あり、かの下婢は貧乏しき從者なるのみならず、年齢已に二十六七にして、彼は未だ十七八歳には過ぎざれば、恰好の配遇とは云ふべからず、且つそれ多分我が幫助によりて、此島を去り、再び故郷に歸るの機會も來らん、その時至らば、今の撰擇を悔いんと、千に一も疑なからん、されば現在の淋しさを、憂さと思ふは、兩人に取りて、誠に不利ならんとて、更に言葉を繼んとせしに、青年は莞爾として我が談話を遮り、いと温順に語りて言ふやう、我の推測は、全く誤れり、彼の現在の境遇が、如何に哀れに、悲しければとて、斯る事は毫末も考へず、又彼をして再び故郷の山河を見せしめんと、我の考ふるを聞き、誠は喜悅に堪へず、若しも東印度への航海にして、かく永き日子を要するとなき、途中の危険もなく、又爲めに朋友と全く隔絶するともなくば、決して此島に滞留するの要なけれど、今は詮方なければ、願はくは此島にて、少許の財産を彼に與へ、一二名の從者と、些少の必需品とを得せしめ給はらば、暫らく此地に居て、栽培者と爲り、早晚我が英國に還りて、ある好機會に、彼を呼び戻し給ふ時を待ち居るべし、若し英國に還り着き給はば、己が身上を忘れざらんことを望ましけれ、可

ンドン市に居る友人に宛てて、數通の書面を認め、これを託すべければ、我が彼を厚遇したる事並に彼が何地に居り、如何なる境遇にあるかを、その友人共に傳言せられたしと、縷々陳述し、且つ我が何時彼を呼戻すとも、彼の耕地並に之に加へたる改良工事は、その價格の如何に拘はらず、總て我が所有とすべしとを誓約したりける。

さて此青年の談話は、その歳の若さに比し、甚巧なりしが、結婚の配偶が自身にはあらずと聞き、我は一層快よく耳を傾け、我若し幸に生命ありて、英吉利に安着せば、その書翰を相違なくそれへ渡し、且つ依頼の用事を辨ずべし、又彼が島に遺されたる境遇をば、努めく忘るまじければ、安心することよけれど、百方言葉を盡して、請合ひしかど、彼の結婚せしめんとする人物は、果して誰なりや、そを聴かまほしとて、問ひ促しけるに、此はかの萬能男と、青年の下婢メウサンなりとぞ、語りける。

我はその配耦者の名を聞き、上に記せるその男の人格より、實にいと適應しき同伴なりと思ひければ、殆んど驚喜に堪へざりしが、歸つて下婢の性行を觀るに、彼女はその性正直、温順、沈着にして、善く宗教を信奉し、いと恰憫なり、又その容姿愛らしく、言語動作も優雅にして、端正なるのみならず、苟にも事の要あるときは、憶せずして言はんと欲する所を盡し、事の己に關係なきときは、決して無遠慮に容喙するとなし、己の目前爲すべきとは、何事によらず甲斐

なくしくこれを行ひ、その舉作誠に主婦らしき風あり、事を處理すると常人に卓り、寔に好く島の女頭領たるに適し、又人を觀て適宜之に接待するの才あり、尊卑長幼に應じて、それ善く應接するの道を知れり。

さる程に、此兩人の婚儀につき、かく青年の申出ありしかば、我等は相謀りて、その日結婚式をぞ擧げゝるが、我は教父として、彼女を彼男に授けしも、また彼女に二分の物を與へたり、即ち此新郎新婦の爲めに、いと廣やかなる良地を指定したり、且つ青年も此結婚の事と共に、先きに島内に於て、少しく地面を與へられたしとの請求ありたれば、我は此際島人等の爲めに、地面を分割し、後日その位置に就き紛争なからしめんとぞ決心しける。

さて我は島人等に地面を分配する事は、これをウイル、アトキンスに一任したり、彼は嚮きには兇暴にして、殆んど制御すべからざりしと、既に前に物語りし如くなりしかど、今はその性行全く豹變して、別人の如くなり、最も沈着、嚴肅にして、能く事務を處理し、敬虔の念深く、厚く宗教を奉じたり、今茲にかくいふは如何あらんかと思へど、彼こそは誠に眞實悔改めたる人といふべけれ。

ウイル、アトキンスの分配法、頗る公正にして、大に各人を満足せしめしかば、島人等は全體に對し、單に我の署名せる書附書通を作成せんとを願ひたれば、我は乃ち一通の書附を作成せし

めて、之に署名、蓋印したり、其中には各自に屬する耕地の境界と位地とを定め、之に對する各  
 自の所有權と讓與權とを保障し、その餘の島地は、擧て之を自己の所有とし、十一年の後は、各  
 耕地に對し、一定の地料を徵集するとし、若し我自身、又は私の派遣者、又は我名代人來りて、  
 此書附の寫を示すときは、地料を納付すべきことを規定したり。

次に島内を治むべき、政治と法律に就ては、我は彼等に對し、宜しく自治政を以て、萬事を處  
 理すべし、それに優れる規則を授くと思ふよらずと語り、單に隣保互に相愛することを誓約せし  
 めたり、斯くて彼等と訣別するの準備をぞ調へける。

されど尙一事の記すべきとあり、そは他事にあらず、今や島人等は「共同自治」ともいふべき  
 状態にて、此地に住居し、日常處理すべき事務多端なるに、かの三十七人の印度蠻奴をして、島  
 の一隅に居らしめ、自分等の食物を調ふる外には、處理すべき仕事もなく、産業もなく、空しく  
 月日を徒費せしむるのみか、その食物すら、時に或はこれを得るの困難を感ぜしむるは、實に奇  
 怪の事なれば、我は西班牙人の頭領に向ひ、宜しくフライデーの父を伴ひて、蠻人等の許に到り、  
 彼等に説きて、此方に移住せんとを勧め、彼等自ら耕地に栽培するか、又は他家に雇はれて、從  
 者となるか、何れかその一つを擇ばしむべし、但し之を奴隸と爲して、壓抑するが如きとあるべ  
 からず、何となれば始め彼等が降服せしとき、その自由はこれを束縛すべからずと約したれば、

此約を破るは不當なればなりと、語り出たり。

かくて頭領は、我の忠告に従ひ、此事を蠻人等に説示しけるに、彼等は最も喜んで此申出を歡  
 迎し、欣々として頭領に隨ひ來りしかば、我等は蠻人等に地面、耕地を分割せしに、之を受けし  
 ものは、僅に三四人にして、その他は何れも數家族の從者として召使はれんとを求めたり。さて  
 此の如くなりければ、我が殖民所は、要するに二部落に分たれ、西班牙人等は我が舊居を占領し、  
 即ち本島の首府として、それより我が前に數記載せし溪流に沿ひて、漸次その耕地を擴張し、  
 開拓の進むと共に、常に東の方へと進み出たり、此溪流は、その口入江となりて、我が別荘の處  
 に達せり、又英吉利人等は、ウイム、アトキンスとその仲間とが始めて住居せし、島の東北部に  
 占據し、西班牙人等の背部に向ひ、南の方と南西の方へと、次第にその耕地を延長したり、而し  
 て更に開墾すべき餘地廣かりければ、土地缺乏の爲めに互に衝突するの虞は、毫もこれなかり  
 たり。

島の東端は、毫も住民なかりしかば、他の蠻人等が、例の慘忍なる饑饉の爲めに、往々上陸す  
 るとあるも、彼等は只去來するとありしならんが、毫も島人に損傷を加へざりし故、島人も亦彼  
 等を妨害せざりしならん、爾後栽培者が襲撃せられ、或は妨害せられたるを、我は決して耳に  
 したるとなければ、蠻人等は數上陸せしも、そのまゝ歸り去りしと疑なし。

我は是より先き、我が友なる僧侶に對し、その島を去りし後、蠻奴等改宗の事、恐らく行はれんと豫言しけるが、是に至りて果して都合よく行はるべしと、思ふ仔細を彼に語りたり、その故如何となれば、蠻奴等はかく基督教徒の中に召抱へられたれば、此基督教徒が、各その手に屬せる彼等に對して、それ／＼力を致さんには、その結果甚だ良好なるべければなり。

彼は我が言に同意し、

「成る程彼等基督教信者か、各その力を致せばよろしいが、如何して彼等に盡力させませうか」

と言ひしかば、我は彼に向ひ、然らば彼等を同時に召ひ集めて、此事を彼等に委嘱するか、又は彼等を一人／＼訪問して、此事を委嘱すべしと語りしに、彼は個々に訪問するに若かずと言ひければ、乃ち兩人はて分擔を定め、彼は皆舊教の信者なる西班牙人等に語り、我はいづれも新教の信者なる英吉利人等に語るとし、さて我等兩人は熱心に勧誘し、遂に彼等をして、蠻奴に對し、基督教を信奉すべしと勸むる際、決して舊教と新教との區別をなさず、單に眞の神と、救主耶穌基督との事を、大要教ふべしと誓約せしめしが、又彼等は宗教の事に就き、何等相互に論争し、若くは異見を立つると、決してこれなかるべしと誓約したり。

さて此事を説んとて、我はウイアル、アトキンスの家に來りしに、斯る籠細工の家は、世

界にまたとなかるべしと思はるゝ、此家に來りしに、上に記しし若き婦人は、アトキンスの妻女と已に惡意を結び、これより先きアトキンスの教導により、少しく基督教を知れる此蠻女（アトキンスの妻）をば全く教化し、之れに洗禮を施して、一個の基督教信者となしたりしが、我がこれと語りて、觀察する處にては、彼女の如きは世間稀に聞く處の信者なりき。

又此事に就き、我が島人等を訪問せし前日の朝、風と心に思ひ起しけるやう、我が島人等に遺し置くべき必需品の中、聖書を缺きたるは、寔に失策なりき、嘗て我がブラジル國に滞在せしとき、我が益友なるかの寡婦が、リスボン市より百封度の貨物を、或が許に送り越せし時、三冊の聖書と一冊の祈禱書とを荷物の中に入れおき呉れし、その好意に比ぶれば、我が島人等の爲めに計る處、未だ至らざりけりと、此く思ひて悔みしかども、幸にして寡婦の贈物なる此書籍は、尙ほ存在して、常に彼等を教へ慰むる便となり、先きに我が用ひしよりも、一層便宜を得たれば、彼女の恩恵は初め豫想せしよりも、その及ぶ所一段大なりき。

さて我は、一冊の聖書を衣篋に入れ、アトキンスの家に來りしに、アトキンスは大に悦びて我を迎へつゝ、折しもかの若き婦人とアトキンスの妻女とは、俱に宗教の事を談話し居れりと語り、やがて共に家に入りしに、果して兩女はいと熱心に談論し居たり。アトキンスの言ふや



「神は罪障ある者を己に随従せしめ、異邦人を召し近づけ給はんとするときは、決してその指導者に事を缺き給ふとはありません、私は此様な仕事には不適當でありますから、とても出来ませんとは、いふまでもありませんが、此若い御婦人は、天から此所に遣されたのですから、蠶人の住する全島をも、改宗せしむる力があります」

と。此を聴きて、若き婦人は顔を赤らめ、起ちて彼方に去らんとせしが、我は彼女を押し止めて、坐に着んとを求め、その働さを稱賛し、神の彼女を祝福し給はんとを望む旨を語りたり。

暫時談話し居ける中、我は特に問試みしにあらねど、此家に書物一冊もあらぬやう認めしかば、やをら我手を衣囊に入れ、聖書を引出し、さてアトキンスに向ひ、

「オイ君、恐らくこれまでにない君の援助者を伴れて来たよ」

と言ひしに、彼は霎時言葉も出ざりし程に驚愕せしが、やがて己に復り、隻手を以て聖書を捧げ、その妻女の方に向き、

「コラオイ、神様は、天に居ますけれども、我々の願を聴き給ふといふとを、嘗て私はお前に話さなかつたつけか、私が願つた書物は此所にある、神は私の願を聴かれて、それを送りて下さつたのだ」

と言ひ、その欣喜雀躍一方ならず、一つには聖書を得たる喜びと、一つにはこれに就き神に對す

る感謝との爲め、その双眼より涙の潸然として降りしと、恰も小兒の號泣するが如くなりき。

蠶女は之を見聞して、いたく喫驚し、我々文明國人の、嘗て知らざる誤謬に陥りたるが如く、その良人の祈願により、神が天より此聖書を送り給ひしものと確信したり、神の攝理によりて、此く爲されしなれば、畢竟するに此く解釋せらるゝも可なるべけれども、此る時機に際して、此可憐なる女子をして、天は此一巻の書籍を送らんとて、特に使者を此下界に遣はされたりと信ぜしむるは、決して難事にはあらず、然れども苟くも虚偽と知りつゝ、之を黙過するは、我が忍びざる處なれば、我は若き婦人の方に向き、蠶女が未だ事理を充分に理解せざるに、強めて改宗を促すは、我々の好まざる所なりと語り、且つ彼女に對し、我々が神に一事を祈願したるとき、その攝理によりて、その事の特に成就せらるゝときは、神が我々の祈願を聴き給へりといふも可なれど、さればとて、不思議なる特殊の方法によりて、天よりその應報あるべしとは、我々は期待せず、寧ろかくあらぬこそ幸なれと、蠶女の爲めに説明せんとを請ひたり。

第廿一段

孤島を去て途上忠僕を失ひ  
水夫の暴行を責めて災を醸す

今や島の用事も済みたれば、人々が都合好く暮し、裕かに榮えんそのさまを跡に見て、五月五

日再び船に乗込みしが、島に滞在し日数は二十五日なりき。人々は我が他日迎ひに来るまで、島に滞在せんと決定したれば、我はブラジルに着して、好き機会もあらば、尙ほ多くの物品を島人に送らんとて、特に羊、豚、乳牛の如き家畜類を送り届けんと約したり。牝牛と小牛とを嚮に英國より持來りしが、長途の航海中、乾草の不足せし爲め、止むなく之を海上にて殺したり。

翌日別れに臨み、五發の祝砲を放ちて出帆し、二十二日許りを経てブラジル國のオールセイーン灣に到着しける。航海の途上爲指事もなかりしが、只一の困難に出會ひぬ。我等が出發後三日目に至り、風穩かに、潮流は東北東に強く流れ、陸地に沿うて一灣に流れ入りしかば、船は稍進路を脱したり。水夫は東方に陸地ありと一二回叫びしが、そは果して大陸なりしか、島なりしか、遂に之を知るよしなかりき。

三日目の夕刻ごろ、海上滑かに、天氣穩かなりしが、陸地の方に當り、何物とも知れず、黒く海を掩ふものあり。暫時は何やら知り難かりしが、一人の水夫、索梯子に駆け登り、望遠鏡を以て眺めつゝ、こは軍隊なりと叫びぬ。此邊に軍隊の在らんとは、如何にも心得難き事なれば、我は少し苛立ちて、馬鹿なと叱りしに、水夫は

「否を、お怒りなされるな、あれは軍隊です、艦隊です、千艘ばかりの丸木舟だと思ひます、御覽なさい、彼等は此方に向て漕ぎ來ます」

と云ひたり。

我は之を聞きて、實に少しく驚けり、船長たる我甥も亦驚けり、そは彼は島にて、恐ろしき噂を聞きしもの、此邊の海に來りしことなければ、其何物たるかを語ること能はざりしが、只我等は皆食ひ殺さるべしと、二三度繰返しぬ。實は天氣穩かにして、潮流強く海岸に向ふからに、頗る都合悪しと思ひしが、我は彼に向ひ、恐るゝ勿れ、錨を投ぜよと云ひし間もなく、近づき來たりければ、こは戦はねばならずと思ひたり。

天氣は、依然靜穩にして、彼等は次第に近づき來りしかば、我は錨を卸し、帆を捲き上げよと命じたり。蠻人等は、火を放つ外には、何も恐るべきものなければ、先づ二隻の端艇を下して、一隻を本船の舳に、一隻を舳に結び付けて、之に乗込み、此くて事の成行を待つべしと、水夫に命じぬ、是れ端艇の人々に、水桶を用意せしめ、野蠻人が本船の外側に火を放つとき、之を消させんためなり。

此く待ち構へ居たるに、間もなく蠻兵は近づき來れり、かゝる恐しき有様は、我等は嘗てこれを見しことなし。其數は、先に水夫の算せし如く、二千艘にはあらず、多く見積るも百二十六艘許りなりしが、一艘に、多きは十六七人、少きも六七人乗り居たり。

さて彼等は、此方の船に近寄り、生來未だ會て見ざりし大船の有様に、打ち愕さ、何とも手

を下し兼ねたる様子なりしが、遂に思ひ切て、本船の周囲を漕ぎ廻はらんとしければ、端艇の水夫に命じて、彼等を餘り近づけざるやうせしめたり。

此方は、戦端を開かんとせしに非ざるも、此命令の爲めに、終に戦を開く事とはなりぬ、初め彼等の丸木舟五六隻、近づき来りければ、我端艇の水夫は、手似真もて近づくと示しけるに、彼等は善く合點して退きしが、其退くと共に、五十本餘の矢を射かけ、之が爲め端艇中の一水夫に、重創を被らせたり。

されども我は、水夫に令して發砲せしめず、只厚き板を端艇に送り遣はし、大工をして一種の牆壁を作らしめ、以て蠻兵が再び矢を放つに當り、之を防ぐの用に供しぬ。

半時許りの後、彼等は一同我が船尾に近寄り來にければ、其目的は知らねど、明かに誰彼れを見分け得るに至りぬ、見れば此蠻人等は、我が舊知の者にして、嘗て孤島にありし時、屢戦争せる蠻人と同種族の者なり、かくて間もなく、彼等の舟は、我が船と並ぶに至るや、舟首を一轉して、此方に向て直進し來りければ、彼等の再び矢を放たんとを恐れ、我は一同の水夫をして、船中に身を潜めて、發砲の準備を爲さしめ、かくて聲の聞ゆる程に、蠻舟の近寄りしを見計らひ、フライデイを甲板の上に登らしめ、蠻語を以て、汝等は何を爲さんと欲するかと、大音にて問はしめしに、彼等は直に矢を射んとすと叫びつゝ、不幸なる哉、無慮三百本の矢を飛ばして、我が



忠僕フライデイを斃しぬ、噫我が悲嘆、何を以て之に償ふべき、實にフライデイに中りし矢は、三本を下らず、尙ほその側に三本落ち居たり、蟹人の所爲實に憎むべき哉。

悲しき時にも、寂びしきときにも、常に我に伴ひたる忠僕を、目のあたり失ひたるを見て、我は憤に得堪えず、直に水夫に命じて、五挺の銃に小弾を込め、四挺の銃に大弾を込めて、一齊に發射せしめたり、必定彼等は一生涯の中、未だかゝる發砲を聞きしことなかりしならん。我等の發砲せしとき、彼等の距離、極めて近く、且砲手は皆善く狙ひたれば、一彈をもて三四艘を覆したりと覺ゆ。

初め我は、四五發の空砲を發せば、彼等を驚かすに足るべしと思ひしに、彼等は猛進して矢を射かけ、殊に我が最も愛し、且重く用ひたるフライデイを射殺しければ、今は、蟹舟を悉く覆して、蟹人を皆溺死せしめたりとて、我は神と人との前に立ち、毫も恥づべき事なきのみならず、大に之を喜びしならん。

此一齊射撃の爲めに、殺傷せられしもの、幾何なりしか、そは知るを得ざりしも、彼等の周章狼狽一方ならず、或は被破せられ、又は覆没せられたる丸木舟は、總計十三四艘に及び、海中に陥りし者は、皆泳ぎ惑ひ、その餘は驚き怖れて、爲す所を知らず、舟の破損せるものを救ふ違もなく、跡をも見ざしし逃げ去れり、想ふに溺死者も少からざりしならんが、其後一時間計り經て、

我水夫は、逃げ後れて泳ぎ居たる、一人の蟹奴を捕へたり。

我等の發砲は、必ず多數の死傷者を出したるならんが、其効果の程は知るを得ず、三時間計りの間に、蟹舟は皆逃げ去り、海上に漂ふものとは、只三四隻に過ぎず、其他眼に入るもの一もなかりき。兎角する間に、夕刻の軟風吹き始めたれば、我等は錨を抜き、ブラジル指して出帆したり。

さても捕へたる一人の俘虜は、蟹船に沈みて一切食はず、語らず、自ら餓死せんと欲するもの、如し、依て我は一計を案じ、水夫をして彼を船艇に乗せ、若し何事も語らずば、再び彼を海中に投入れんとする様を示しけるが、之れさへ効力なかりければ、水夫は實際彼を波に投じて歸りしに、彼は木栓の如く泳ぎて追ひ來り、蟹音を揚げて呼はりければ、其意味は解し得ざりしも、終に再び之を救ひ擧げしに、此より彼は稍從順になれり、但し我は決して、水夫をして彼を溺死せしめんと企てしにはあらず。

我船は、今再び帆を揚げしに、我はフライデイを失うて、最も落膽しければ、孤島に戻りて、残れる一人を連れ來らんと欲せしも、そは到底叶はぬ事なれば、思ひ止まりぬ。さて前に述べたる一人の俘虜が、能く諸事を了解し得る迄には、久しき時日を要したり、水夫等は、時々彼に英語を教へしに、彼は稍從順となりしかば、彼に何國より來りしかと尋ねしに、その言ふ所は毫も

解するとを得ざりき、彼の言語は、奇異なる喉音にして、口腔内より響き来るを以て、一語も解すべからず、皆以爲らく、若し口を塞がば、能く言語を成すを得べけれど、聲語は只角笛の鳴る如く、齒、舌、唇、或は顎を用ひざるものによと。されど暫らく彼に英語を教へし後、彼の語る所を聞くに、當時彼等は其會長等と共に、一大戦争に赴く途中なりしといふ、會長は幾人ありやと尋ねしに、彼等五個國連合して、他の二國と戦はんとしたりしなりと答へしかば、然らば何故我等に近きしかと問ひしに、こは單に不思議に見えしたためなりと言ひたり。

我は尚一回この可憐なる忠僕の名を呼びて、最後の別を告げたり。嗚呼憫むべし、正直なるフライデイよ。我等は彼を棺に納め、禮を厚うして海中に投じ、水夫をして十一發の吊砲を放たしめ、此くて最も恩に感じ、忠義、正直にして、最も愛すべき、稀世の僕は、茲に其生涯を終りぬ。さて我等は順風に乗じ、ブラジル指して航海し、十二日許りを経て、南緯五度に於て、陸地を發見したり、是れ南米の、此方面に於ける最北東端の國なり。我等は四日間海岸を望みつゝ、航路を南東に取り、遂にセントオウガスタン岬に達し、三日の後オールセイーンツ灣に入りぬ。此處こそは、我が嘗て一度救ひ上げられ、それより我好運と悪運の生れ出てたる奮闘なれ。此港に入り来る船にて、我船の如く商業上の用務少なきものはなかりしが、我等は上陸を許されず、只僅かに海岸と通信するにも、少からざる困難を経たり。先年我が組員たりし人も、今

尚ほ生存して、人民の中に名を知られ、我が産業の委託人も、二名此に居り、又我が名聲は、該の孤島に轟きしとはいへ、此等の事項は、上陸の恩典を、我に得せしむるに、何の効もなかりき。されど我が舊組人は、我が嘗て五百金、オウガスタン寺院に寄附し、又二百七十二金を貧民に施與したる事を思ひ起しければ、該寺院に行き、其長老に説き、長老をして知事に乞はしめ、辛うじて我と船長と一人の従者、並に八人の水夫の上陸を許可せしめたり。されど貨物は、一切陸揚げすべからず、又認許なくして、何人をも連れ去る可らずとの條件を付せられたり。

貨物の陸上げは、堅く禁ぜられしかば、我が組人に贈らんとて携來れる、羅紗、織物、「リッネル」の如き、英國製貨物三包を陸上に持ち行くにも極めて困難なりき。

我が組人は、我と同じく、貧困の境涯より身を起ししとはいへ、頗る寛大の人なりしかば、我が贈物を爲さんとすることは、露程も知らざりしかど、我船に、葡萄酒、其他美味なる新鮮の食料を贈り越しぬ。其價凡そ三十金以上にして、其内に若干の烟草と三四個の金塊とを含めり我が贈物も、之と同等にて、右に記せる如く、美麗なる羅紗、英國製の織物、組系其他好味の和蘭製酒類などにして、此外に我は凡そ百磅に價する品物を贈りたり。そは前に記せる如く、我が殖民所の用に供せんとて、嚮きに英國より持來りし、小船の組立方を彼に依頼し、之に食料を載せて、殖民所に送らんが爲めなりき。

此に於て我が組合人は、職工を雇ひ、數日にして小船の艦装を竣工せしめたり、此船は既に切組みしものなればなり。かくて我は、島の位置を見誤らぬやう、船長に教示せしが、果してその通り成し遂げしとは、其後我が組合人より聞きたり。斯く豫定の貨物を積み込ましめしに、先におと共の上陸せし一人の水夫が、此船と共に島に到りて、住居せんを願ふよしを申出で、且かの西班牙人の頭領に宛て、添書を認め、充分の耕地を此水夫に分與し、且若干の衣服と、耕作に要する器具とを、彼に與へしむるやう、成し呉れよと願ひたり。此水夫は、嘗て米國メリイラシ州に於て栽培に従事したるもあり、且つ一時海賊たりしこともあれば、能く殖民事業を解せりと語りぬ。我はその所望を一切許して彼を勵まし、其上に先きに捕獲せし蠻人を、彼の奴隷にとて與へ、且彼の要求する品物を分與すべしと、西班牙人の頭領に命じたり。

斯くて愈島地に向け、船を出さんとするに臨み、我が舊組合人は言ふやう、其知れる正直なる一農夫あり、委細の事情は知らざれども、思ふに此者は異教信者にして、宗教裁判を受くるを恐れ、止むを得ず其身を隠し、僅に極刑を免れ居るものなれば、此る機會に乗じ、其妻と二人の娘とを伴うて逃るゝことを得ば、甚だ喜ぶならん、若し我にして、此者の島地に移住するを許し、且相應の耕地を分配せらるゝならば、己は就業に要する資本を少しく彼に與ふべし、蓋し彼の所有物は、宗教裁判所の役員の爲めに、没收せられたれば、今は只二人の奴隷と、少許の家具とを

有するのみ、己は彼の主義をば嫌へども、彼を國教徒の手に陥らしむるを欲せず、若し一朝捕へられなば、火刑に處せらるゝに相違なしと。

我は直ちに其請を許し、其男と其妻と娘とをば、船の出發するまで、我が船中に隠し置き、先づ其所有物をかの船に積み載せ、その灣外に出でし後、此者共を乗り移らしめぬ。されば彼の水夫は此同行者を得て、大に喜べり。共に就業の資産としては、上に配したるものに過ぎざりしもの、その食料諸道具も乏しからずして、其額もよく相似たり。されど此人々は甘蔗の苗と栽培の諸道具をも持ち來りぬ。

我が島民に送りしものの中には、乳牛三頭、小牛五頭、牝豚十二頭、馬三頭ありき。かくて此貨物は、皆無事に該島に到着しければ、讀者もさこそと容易に推せん如く、我が故舊なる住民等は、大に喜び合へり。當時島人等の數は、此回の増員と共に六七十人となり、其他尙ほ數多の小供ありたり、此く島人等の歡迎を得たるとは、我が後に英國に歸りて、先にリスボン便に依りて倫敦に達し居たる、書狀を披見して知り得たる所なり。

さて我島に關する用事も既に済み、且之に關する諸種の物語も既に終りぬ。何人にもあれ、我が肥録の殘部を讀む者は、これより全く思を他方面に轉じ、一老人が、自己の傷痕にも懲りず、況てや他人の傷害を見て、自ら注意するともなく、又殆んど四十年間の艱難、失望に依りて、冷

却することもなく、案外の繁榮によりて、満足することもなく、又比類なき苦痛をも意とせざる、  
恐なる所業を知らんと望まるとならん。

我は全く自由の人にして、毫も犯罪の覺えなければ、ニユーグーットの監獄に行き、その牢番に  
求めて其身を囚人の中に投じ、飢餓に苦しむの要なきと同しく、求めて東印度に到るべし。用務少  
じもあるにあらず、我若し英國より一小船に乗りて、我島に直航し、之に耕作の爲め、且は住民  
の爲めに必要な貨物を積み載せ、英國政府の管轄の下に立ち、政府より特許を得て、我が資産  
を安固にし、銃砲、彈藥を携へ、從僕を伴ひ行き、英國の名を以て土地を占領し、城砦を築きて、  
防禦を嚴にし、人民の繁殖を計り、且我身も彼處に定住し、船は良米を載せて本國に返し、再び  
必需品を送らんことを友人に乞ひ、此くして孤島に滞在したらんには、少くも常識ある人の如き、  
生涯を送るを得たりしならん。然るに我は相易はらず漂遊の志あり、利益は一切之を輕んじ、唯  
彼處に遣れる、人々の保護者たることを悦び、恰も往昔の族長政治の首長の如く、一種の偉大な  
る風を以て之に對し、其身を以て殖民地並びに家族全體の父として、彼等を保護し、而して何れ  
の政府、或は國民の名を以て、殖民するが如き風を裝ひしこと決してこれなく、何なる主君をも認  
めしことなく、我が住民をして、何なる國にも隸屬せしめしことなく、又我は該島に名稱を附せ  
しことなく、只發見したる儘にて、何人にも屬せしめず、住民は只我が配下に在るのみにして、

如何なる規律にも束縛せらるゝとなし、我は、父とし、恩人として、其上に勢力あれど、彼等は  
任意の行動によりて、我に従ふのみ、我は毫も命令すべき權力を有するに非ず。此の如き状態に  
ても、若し己れが滞在したらんには、必ず能く彼等を制取せしならん、然るに我は彼等に別れて  
漫遊し、最早該島に行かざりしかば、彼等の消息を知りたるは、後に我組合人より送り來りし書  
翰に依るのみ、蓋し此書翰は我組合人が、更に小船を該島に送り、其消息を得て、發信せしもの  
なるが、發信後五年を経てこれを受取りたり。其言ふ所に據れば、島の住人等は憫れなる生涯を  
送り、長さ年月の滞留に不平を懷き居れり。又ウイアル、アトキンスは死去し、五人の西班牙人が新  
に島に來れり、又蠻人の爲めに大に苦められしことはなかりしも、之と小戦を爲し、こと、數回な  
りしと云ふ、又彼等は我が約束を忘れず、此世を去る前に、今一度故國を見んとて、伴ひ歸らん  
ことを、切に我に求め與れよと認めありたり。

されど我は、實に野雁を逐ふもの、如く、行きて復歸らず、我に求むる所ある者は、更に種々な  
る失策、困難、冒險に出合ふの覺悟なからざる可らず、蓋し天は容易に我等の願望を飽かしめ、  
我等の最も強き願望をして、我等の苦痛たらしめ、以て最も嚴しく我等を罰し給ふべし。されど  
此の處罰こそは、我等に取りて極めて幸福ならんと思ふなり。神明の攝理の公正なると、決して  
疑ふに難からず。

如何に賢人なりとて、自己の判断の正確なるを誇り、自から特に己の境遇を擇び得べしと思ふ勿れ。人は性來近視眼にして、その洞見する所は、僅に寸前に過ぎず。その憤怒の良友に弄ぶるが如く、その愛情も亦概ね最悪の顧問なり。

かく言ふは、我が少壯の時より抱きし、世界漫遊の願望に關してなり。今に至りて思へば、此主義が我身に爵を來さしめしこと明なり。其爵の如何にして來りしか、其方法、事情並に結局を、順序を追ひ、詳細に讀者に語るに容易なれども、此の如く自己の望望の河流を、急ぎ下ること、我等に許し給ふ神力の奧秘は、天來の聲に耳を傾け、神の公正と自己の過失とより、宗教上の結果を悟る者に非ずんば、之を了解すること叶ふまじ。

我は用事の有無に拘はらず、兎に角出發したり、今は我が處爲の當否を更に論ずべき時機にあらず。いざ前より引續きたる物語に立戻らんか、我は乗船して航海の途に上りたり。

只此に附言すべきは、夫の正直にて眞に信仰の念深き僧侶が、此處にて我と別れし事なり。會リスボン行の船ありしかば、彼は我が許を請ひて、之に乗り込みたり。若し我も彼と共に行さしならば、我が爲めに甚だ幸福なりしならん、今更悔ゆるも詮なき業なり。

されど今や時期既に晚し、夫れ天の指示する所のものは皆善なり。我若し彼と共に行きたらんに、かく多くの感謝すべき事に遭遇せざりしならん。讀者も亦ロビンソン、クルソウの冒險的旅

行談の第二段を聞くことなかりしならん。故に我は無益なる愚痴を棄て、我航海と共に談話を進めんとすべし。

我等はブラジルより大西洋を越えて、直に喜望峯に向ひたり。此航海は先づ平穩なりしが、進路を東南に執り、時々暴風、或は逆風に遇ひしも、海上の不幸は既に終りを告げ、此よりは我に落ち来る艱難は、陸上に移りたり、蓋し天は海と等しく、陸をもて我等を鞭撻するの具に供し給ひしと見ゆ。

我等の船は、貿易の爲めとして航海するものなれば、一人の荷物掛を乗り組ましめ、喜望峯に到着後、船の進退は、一切その指揮に一任せしが、備船證書に依り、若干の日數を限りて、所々の港灣に滞在する等なりき。こは我に用なき事なれば、我は毫も之に干渉せず、萬事船長たる我甥と此荷物掛とが、適宜に處理したり。

我等は、飲料水を酌み取るに必要な日數の外は、此處に滞在せず、直に東印度なるコロマンデルの海岸に向ひけるが、折柄砲五十門を備へたる、佛國軍艦一隻と、大商船二隻が、印度に向て航行したりと聞きぬ、我は英佛戰端を開き居る由を知りたれば、多少恐怖を抱きしも、此佛國船は何處へ行きしか、更に聞く所なかりき。(註、第三號地圖參照)

我は航海談を述ぶるに當り、位置の模様、航海日誌、羅針盤の變位、經緯度、貿易風、港灣の



位置などを記載して、讀者を煩はせざるべし、長途の航海史は、昔かゝる記事をもて充され、徒に讀者を倦ましむるのみ、自から其處に行く者を除き、一般の人々には、何の利益もなければならぬ。

されば我等は、唯通過せし港灣の名を擧げ、甲所より乙所に行く間に起りし、事件を掲げれば足れりと思ふなり。我等は最初にマダガスカルに立寄れり。此地の住民は、兇暴陰険にして、常に弓槍を携へ、之を使用すると極めて巧妙なりしが、我等は一時彼等と穩に交際し、彼等も亦甚だ鄭重に我等を待遇したれば、我等より小刀、鉄など少許の物を與へしに、その報として、善く肥えたる小牛十一頭を我等に與へぬ。其大さは中等なりしかど、肉の味殊に美なりければ、幾分は現在の食料に充て、殘餘は鹽漬として之を貯へ置きたり。

此く食料を準備せし後、尙ほ暫時此處に滞在せしが、常に好奇心に富める我の事として、何處へ行くも、隅々まで調査せんと欲し、數上陸して處々を探検したり。かくて或夕暮の事なり、島の東岸に上陸せしに、多數の土人集り來り、少しく隔りたる所より、我等を眺め居りしが、既に互に自由に交易し、親切なる待遇を受けたれば、我等は毫も危険の念を抱かず、土人を見るや、一樹より三本の枝を切り取りて、之を地上に突き立てぬ。こは此地に於て、休戦と友誼の符號にして、一方に於ても之を承認するときは、更に三本の棒杭を立て、之に應ずる合圖とはするなり。

されど休戦の條件として、互に此三本の棒杭を越えて進む可らず、故に三本の棒杭の内に居れば、全く安全にして、即ち彼等の棒杭間の地は、自由に談話し、若しくは交易する一種の市場と認められ、其處に入るときは、武器を携帶せざるの例にて、彼等も其場に入り來るときは、其鎗をば棒杭の側に突き立て、全く武器を捨て、來るを常とす。されど若し彼等に暴行を加ふるときは、彼等は直に棒杭の側に走せ行きて、武器を取るを合圖に、休戦は即ち茲に終るものとす。

或夕暮に、偶海岸に上りしに、常よりも多くの土人出て來り、若親切に我等に接し、數種の食料品を持ち來りしかば、玩具など與へて、彼等を悦ばしめぬ。彼等の婦女も亦牛乳、草根、其他我等の意に適する物を、なにくれとなく携へ來りて、我等に贈り、いづれも皆平穩の態度なり。されば我等は小さな天幕を設け、或は樹枝にて小屋を造り、岸上に一夜を明すこととなれり。然るには如何なる事情なりしか、我は岸上に宿泊するを好まず、陸地より少しく隔たりて碇泊せる小舟に、二人の水夫と共に赴き、其一人に命じ、陸上より小枝を持ち來りて、船の上を掩はしめ、我は船底に帆を掲げ、其上に横臥して、こゝに一夜を明さんとしたり。

其朝二時頃と覺しき頃、我水夫の一人が岸上にて恐ろしき聲を揚げ、速く船を着けよ、助けに來れ、一同は將に殺害されんと叫ぶを聴くと同時に、五發の銃聲聞えたり。こは我水夫等が所持せし鐵砲の數にして、而も三度まで、其音を聞きたり、思ふに此地の土人は、亞米利加の蠻族と

異なり、砲聲を聞くも驚かざるもの如し。  
 かくて何事かは知らざれど、我は此騒ぎにて直に眼を醒まし、小船を岸に漕ぎつけ、舟中に在りし三挺の鐵砲を携へて上陸し、人々を助けんとしたり。やがて船を海岸に着けしに、我水夫等は三四百人の土人に追ひ立てられ、急ぎ船に打乗らんとて、誤て水中に落るもあり、混雜一方ならざりき。陸上にありし我が人數は九人なりしが、鐵砲を携帶したるは五人のみにて、其他は短銃と劔とを所持しけるも、爲指益には立たざりき。

かくて七人をば船に載せしが、其中三人は重傷を負ひ居たれば、收容すること容易ならざりき。更に困難なりしは、彼等を小船に乗り移らしめんとせしとき、陸上と等しき危難に遇ひぬ、そは他なし、蠻人等が雨を降らす如くに、矢を射かけければ、我等は腰掛と二三枚の板とをもつて、船の側面に防壁を設けたり、此板は偶然か、天意が、舟中にあり合はせられたれば、大に満足に思ひぬ。

もし晝間ならんには、彼等は熟練の射手なれば、假令我等の數如何に僅少なりとも、隙さず我等に命中すると必定なり。彼等が弓矢を携へて、此方を狙ひ居る姿を、月光にすかし見て、我等は鐵砲を用意し、一齊に打ち放ち、數人に負傷せしめたるは、その叫聲に依りて之を知りぬ。されど彼等はこれにもひるまず、斯くして夜明まで海岸に戰列を整へて立ち居たり。こは更に善く

見ゆる時刻を待ち、我等を狙撃せんとの目的なりと思はれたり。

かゝる有様なれば、鐵を抜き、或は帆を張ると能はざるに苦めり。もし斯く爲さば、是非とも舟中に立ち上らざるを得ず、左すれば恰も樹上の鳥を射る如く、我等を狙ひ外すことなかるべし。因て我等は詮方なく、此所より一里を隔て、碇泊せる本船に向て、遭難の合圖を爲せり。然るに船長たる我甥は、これより先き銃聲を聞きければ、双眼鏡にて我等の有様を視察し、我等が海岸に向て發砲せしを知り、我等の事情を察知しければ、速に拔錨し、全速力にて海岸に近づき來り、一艘の端艇に水夫十人を乗込ませて、我等を助けんとしたれど、我等は事の仔細を告知らせ、餘り接近らざるやう注意したり。然るに彼等は之を意とせず、更に接近り來り、其水夫の一人は、曳網の一端を手に握り、敵に見えざるやう、我船の蔭に身を潜めて泳ぎ來り、網を船に結び付けぬ。此に於て我等は錨索を脱して錨を捨て、矢の達せざる處まで我船を曳き行かしめ、其間我等は、嚮きに設けし防壁の蔭に、その身を潜め居たり。かくて我等は本船と海岸との間に在りて、船側を海岸に向くことを得るに至るや、大小の彈丸を一齊に發射して、敵に大損害を蒙らしめたり。

本船に乗り移りたる後、徐ろに事の起源を尋ねしに、荷物掛の言ふ所に據れば、若し我方より何事か住民を激昂せしめずんば、彼等は休戰を約せし以上、決して我等を攻撃する筈なかりしな

り、然るに、其夜老いたる一婦人が、牛乳を賣らんとて、我人々の宿せし所に來りしが、年若き女を伴ひ、其女も亦野菜を持來りぬ。此老婦は若き女の母なりや否や知り難けれど、老婦が乳を賣り居りし間に、水夫の一人が、其若き女に戯むれ、聊か無禮の動舉を爲しして、老婆は大に怒り、多分走つて此事を土人に告げしに由り、蠻人等は三四時間の内に此大軍を起したれば、衆寡到底敵すべからず、我水夫等は悉く殺戮せられんとしたるなり。

船員の一人は、襲撃の初め、天幕より突出せしとき、蠻人の投鎗にて殺され、その餘の者は皆無難に逃れしが、此騒動を惹起せる本人は如何にしけん、其所に見當らざりき。それより二日を経て、海岸に近寄り、暗號を爲し、或は其近傍を漕ぎ廻はりしが、何の應答もなかりければ、止むなく打捨ておくとはなしぬ。噫若し彼のみ苦痛を受けたらんに、損害も一層少かりしならんものぞ。

されど我は、猶自から満足する能はず、重ねて海岸に行き、何なりとも彼若くは蠻人等の消息を探らんとしたり。戦争後三日目の晩に、我は如何にもして、敵に加へし損害の模様を知らんと欲し、敵の攻撃を避けんため、暗夜に乗じて上陸することせり。

我は已と荷物掛長との外に、強屈なる者二十人を伴ひ、夜半前凡そ二時間に上陸しけるが、此處は前晩に土人の陣取りし所にして、此處に我が上陸せしは、土人等が既に戰場を退きたりや、

又我等の土人等に加へし被害の痕跡ありやを、視察せんとしたればなり。且若し一二の土人を捕獲せば、之を以て、嚮きに失ひし我が水夫と、交換するを得るならんとも思ひたり。

我等は少しも音を立てずして上陸し、人数を二隊に分ち、一隊は水夫長之を指揮し、一隊は我これを指揮せり。我等の上陸せしときは、幸に土人中誰一人立ち騒ぎし者を見ず、又斯る音響をも聞かざりき。我が一隊は他の一隊と或る距離を保ちて進行し、暗夜の事とて何物をも見るを得ざりしが、やがて先發隊の指揮者たる水夫長は、死骸に墮き倒れしかば、暫時此に止まり、こは嚮きに土人が陣取りし處ならんと思ひ、我の到るを待ち居たり。かくて我等は月の登るを待ち居けるが、稍半時間餘にして、月出てければ、我等の土人等に被らしめたる損害の模様をば、容易に認むるを得たり。即ち死骸の地上に横はれるもの三十二個、其中二人は未だ全く死せず、一人は片腕を有し、一人は隻脚を失ひ、其他の負傷者は皆運び去りしと思はる。

兼て希望せし如く、當時の模様を充分に知り得たれば、我は此より船に歸らんと思ひ居たり。然るに水夫長は、其率のたる一隊の者共と、土人の町を見に行かんとて、我にも同行せよと言ひ來りぬ、是れ土人の居る所に行かば、定めて掠奪物もあらん、又先きに行方を失ひしトムジエンのライの所在をも知るを得べしと思ひたればなり。

彼等若し我に認可を求めなば、之に對し如何なる答をなすべしか、我は善くこれを知れり、即

ち我等は船と貨物とを管掌し、多くの人力を要する航海を爲さるべからざれば、斯る危険を冒すべからざると、言ふまでもなければ、直に船に歸るべしと命令したるならん。然るに彼等は、行かんと決心せる旨を告げ、單に我と我隊とに同行を求めたれば、我は斷然之を拒絶し、端艇に行かんとて立ち上がりしに、我隊の一二人は、頻りに我に同行を促しけれど、我は復斷然之を斥けしかば、遂に不平を鳴し始め、我指揮に従はずして行かんとせり。かくて一人は

「オイ、我と一緒に行くか、我は獨りでも行くよ。」

と言へば、甲も乙も之に應じ、終に皆々行かんと言ひ出し、残りしものは、我と我が説諭に従ひし者と、端艇に送りし一人の従僕のみ。依て我は此人々と共に端艇に送りしが、その行かんとする者共に對し、我は尙ほ此所に留りて、残らんとする者を成るべく多く乗らしむべし、陸上を徘徊するは狂氣の沙汰なり、多くはトムジエンライと同じ運命に遭はんと語り聞かせたり。

彼等は、必定再び歸り來らん、且善く注意せん杯と放言して出て行きぬ。我は彼等に向ひ、船と航海との事を考へ見よ、彼等の生命は彼等自身の所有に非ず、幾分か航海といふ任務を受け居れば、若し失敗せんか、人數不足して或は船を遺るべからず、かくては彼等は神と人とに對し、申譯なからんと懇に言ひ聞かせ、尙ほ此事に就き種々陳述したれど、殆ど帆柱に語ると同然、彼等の耳に入るべくもあらず、皆々熱狂し居ることなれば、唯我に温言を陳べ、願はくば怒り給

ふなかれと乞ひ、且彼等は善く意を用ひ、晚くも一時間許りにして歸り來らん、土人の町は、此處より半哩以上を距てざるべしと言ひしが、實は二哩以上なりしといふ。

さて彼等は、かくして皆出て行きけるが、此企は無謀にして、狂人に非ずんば敢てする者なかるべきに、彼等は報酬を得んとて、大膽に振舞ひ、武備勇ましく、各一挺の鐵砲と、銃劍と、拳銃とを携へ、或は彎刀を提ぐるもあり、或は鉤を携ふるもあり、水夫長と其他二人は、斧を執て進めり、此外十三個の手擲爆彈を持ちし者もあり。世に惡事を行ふ者にして、此程大膽にして、善く準備したる者はあらざるべし。

彼等は愈出發せしが、其主なる目的は掠奪にして、黄金を發見せんと欲せしに、案外の事情の爲めに、終に復讐の火を放ち、惡魔の所業を演ずるに至りたり。今その事の次第を述べれば、彼等は行くとい哩に及ばずして、先きに都邑ならんと思ひし所に至りしに、その家屋致軒に過ぎざれば、大に失望し、町は何處にありや、又その大小如何を知るに由なかりき。是に於て、如何にせばやと評議しけるも、議暫時は決せざりき、蓋し若し今敵を襲はば、一人も残さず首を斬らざるべからず、月既に昇りたれど、夜間なれば十中八九は逃るゝならん、若し一人たりとも逃れて、全市を呼び起すならば、全軍を擧げて、逆襲し來るならん、或は之に反し、此所を去り、土人の睡眠し居る儘に棄て置かんか、都邑の所在を知るに由なからんと、評議まら／＼なりき。

然るに遂に後の説を善とし、土人等をそのままに捨置き、成るべく都邑を探らんと決定し、行くに僅にして、路の傍に一頭の牛の一樹に繋がるを見たり。此に於て彼等惟らく、瓦を牛は善く己が家を知ると云ふ、而して此牛は必定前方の都邑、又は後方の都邑に属するものなれば、先づ其綱を断ちて、その行く所を見よ、若し此牛にして前に行かば、前に町ありと知るべく、又若し後に戻らば、最早何の見込もなしとて、乃ち牛の綱を切断せしに、牛は前の方に進み行きければ、さては此先に町あるに相違なしと、皆々牛の後に従ひ行くほどに、果して二百戸許りの町あり、或家には數家族同居するが如く見をたり。

此る敵來るべしとは、露知らざりしかば、此町の住民は皆眠りに就き、夢酣にして、寂として音なし。此に於て、彼等は先づ如何せんかと評議しけるが、要するに、一行を三隊に分ち、町の三個所に放火し、若し出來る者あらば、之を捕縛し、若し抵抗する者あらば、問ふまでもなく、一刀兩断の處置を執るととし、此くして殘餘の家に就き、奪掠物を求むべし、されど先づ静に町を通過し、其廣狹を測り、其計略を施し得るや否やを視察せんとて決議しける。

さても彼等は、此の如く殘忍にも愈々襲撃せんとせしに、兼に先だちて進みし三人の者、頃かに聲を揚げて、トムジエライを見出したると言ひければ、皆々其場に駆け着しに、果して咽喉を切り、一腕を縛りて、樹に吊したるトムの死骸ありたり。其樹の傍に一軒の土人の家あり、

に我等と戦ひたる主要なる土人等と覺しきもの十六、七人ばかり、眠らずして談話し居り、其中負傷者二三人もありしが、其人數は定かならざりき。

トムの死骸が無慘にも寸断されたるを見て、一同勃然として憤怒し、誓て彼の爲めに讐を復し、我手に陥る土人は、毫も容赦せざるべしと決議し、先づ火の着き易き物を求めしかど、當時の後がしる必要なしを知りぬ。此地の家は低くして、茅もて家根を葺きたれば、少許の火薬を擲せ載せて潤し、やがて火を放らしたに、十五分も経る中に、火炎はや四五個所に燃え立ちぬ。殊に土人の眠り居らざりし一家に火を着けしに、火の燃え立つや、土人は喫驚狼狽し、戸外に逃げ出でんとせしに、此に待伏したる人々は、やにはに之を仆し、或は傷け、或は戸内に逐ひ返し、水夫長も、自から斧を揮て、一二人を殺しぬ。此家は廣くして多人數居りければ、水夫長は内に入らず、之に爆彈を投ぜしかば、轟然たる爆發の音に、土人等周章狼狽して、悲鳴を擧げ、その様見るも恐ろしき程なりき。

要するに、此家の表室に在りし土人等は、擲彈の爲めに、或は殺され、或は傷つき、其他戸口に接近して居りし二三人は、其爆彈には觸れざりしも、銃劍に貫かれて仆れたり。又他の一室には、會長なるか、何者なるかは知らざれど、其他數人と共に閉ぢ籠り居り、火焰に蔽はるゝも戸外に出でず、終に家の焼け倒るゝと共に、焼死したり。

かゝる中にも、彼等は住民の目を醒さざらん爲めに、銃をば一發も放たざりしが、火の盛に燃え出るや、人々其音響を聞きつけ、驚き周章で逃出すを、我が人々は、火の進路に伴ひ、その戸口に在つて、これを手當り次第に打殺し、其都度トムの爲めに復讐すとぞ呼はりける。

この間、我は甚だ不安に堪へざりき、殊に火炎の揚るを見るや、夜中なれば、その距離いと近く見えければ、尙更に心を傷めたり。我が甥の船長も、水夫に起され、火炎を見て、何事なるかを知らず、又我が如何なる危難に遭ひしかと、深く心を痛め、殊に砲聲も聞えければ、我と荷物掛との安否如何にと、千々に配慮し、終に無人なるに拘はらず、我等の如何なる災厄に罹りしかも知れざれば、十三人の水夫と共に端艇に打乗り、海岸指して漕ぎ來りぬ。

我と荷物掛とが、僅かに二名の水夫と共に端艇の中に居るを見て、彼は一驚を喫し、我等の無事を喜びしも、音響の絶間なく、火炎の益立昇るを見て、事の仔細を知らんと欲するの切情は、我等と同じかりき。要するに斯る好奇心を抑へ、或は同輩の安否を氣遣ふ念を制するは、何人も難しとする所なり。かくて船長は味方の爲めに應援すべし、事の成行は問ふを要せずと言ひしが、我は先に水夫等に語りし如く、船の安危、航海の危険、持主と商人の利害につき彼と談論し、結局我自から二人の水夫と共に行き、遠くより事の狀態を視察し、歸りて彼に語らんと云ひぬ。されど我甥に語りしは、猶ほ先きに他の人々に語りしと同様にて、何の甲斐もなかりき、若し

援兵なき爲めに、部下の者を失はざり、そは船を失ふよりも、又自己の生命を墜すよりも、一層大事なり、寧ろ船中には、十人を残し置かば足れりと言ひ、直に上陸せんとせしかば、我も今は獨り留まるに得堪へずなりぬ。かくて要するに船長は二名の水夫に端艇を漕ぎ戻し、更に十二人を連れ來らしむるとし、其者共歸り來らば、六人に二艘の舟を監視せしめ、更に六名は我等に續て來らしむるとし、本船には僅に十六人を残せるのみ、蓋し船員は總計六十五人なりしが、其中二人は、先日の戰に於て命を隕しかり。

さて我等は、半狂亂して足の踏む所を知らず、唯火炎を案内に、一直線に走りしに、先には銃聲に驚きしも、今は土人の泣き叫ぶ聲、却て凄まじかりき。我は今まで都市の奪掠に關はりしことなし、オリヴァー、クロムウェルがアイルランドのドロヘダを奪ふや、老幼男女を殺戮したりとは、嘗てこれを知り、テイリー伯がマグデブルグ市(獨逸)を掠するや、二萬二千の男女の首を刎ねしとは、嘗て一讀したることあり、されど今之を目撃せしに、其光景の怖るべきと、紙筆に寫すべからず。

さて我等は、遂に町に來りしに、火勢盛にして、街路に入るべからざりしが、先づ目に觸れるは、一家屋の灰燼と化せるものにて、火光にすかし見れば、其前に四人の男と三人の女の死骸横はり、尙ほ火中に一二の屍折重なり居たるが如し。要するにその殘忍なる暴行は、殆ど人

間の所爲に非ず、我味方の人々が、いかて斯る暴行を恣にする事あらんや、若し之を爲したりとせば、悉く極刑に處すべきものなりと思ひぬ。但し此のみに非ず、我等は進むに従ひ、火勢は益盛にして、火の燃ゆるに従ひ、叫喚の聲益烈しく、我等の當惑殆んど其極に達したる。更に少しく進みしに、驚くべし、三人の女が凄まじき聲を揚げて、飛ぶが如くに駆來り、其後より十六七人の土人が、怖震きて走來り、三名の英國の屠殺者（之を屠殺者と呼ぶも不可なし）之に續き、其の追及び難さを見るや、轟然一發彈丸を飛ばしければ、土人の一名は我が目前にて仆れぬ、殘餘の者は、我等をも亦敵なりと信じ、追ひ掛る者と等しく、彼等を殺戮するならんと思ひけん、絶望の餘り、號叫し、其中の二人は恐怖の爲めに倒れて絶息したり。

此慘状を見るや、我が心は慄き、我血は脈管の中に凍るばかりに思ひぬ。若し三名の水夫が、彼等に追及せば、悉く彼等を屠るならんと思ひしかば、我等に害意なきことを示しけるに、彼等は直に馳せ來り、跪きて兩手を舉げ、泣叫びて助命を乞ひければ、之を承諾したる意を示せるに、皆我等の背後に隠れて、這いつくばひたり。

我は水夫等に、何人をも害すべからずと命じ置き、他の人々が如何なる惡魔に憑かれしか、何を爲さんと欲するか、其模様をも視察し、且つは天明に至れば、多數の敵に圍まるべければ、速かに引擧ぐべき様命令せんとて、只二名の水夫を伴ひ、他の者共と別れて進行せしに、その光景實に眼も當てられず、或は手を燒きて泣き叫ぶ者あり、或は足を焦し逃げんとして、叶はざる者あり、一人の女は火中に到れ、再び逃げ出る間に、大に火傷せり、二三人は我水夫に逐はれて、背と股とを斬られ、或者は彈丸に貫ぬかれて立地に死したり。

何故かゝる大事に至りしか、我は其事情を知らんと欲せしかども、彼等の言ふ所は、一語も解する能はず、されど其身振より察するに、彼等自身とても、事の趣きを知らざるものと認めたり。我は此暴行に痛く驚き恐れて、其處に止まると能はず、我が部下の人々の許に退き、途中の困難は如何なるにもせよ、火炎の中を通りて、町の中央に到り、是非とも暴行を止めんと欲しければ、部下の者共に決心の程を告げ、我に従ひ來れと命ぜしに、此時恰も水夫長を首領として、四名の水夫等、全身血と塵とに塗れ、その屠殺せし死骸を踏み越えつゝ、此處に來り、更に多く屠殺せんと欲するが如くなりしかば、我水夫の一人大音を揚げて呼はりしに、其聲漸く達せしと見え、我等の何人なるかを知りて、此方に向つて來りたり。

水夫長は我等を見るや、勝鬨の如き聲を張揚げ、更に援兵が來りしと思ひしか、我が言ふ事も聽かずして、

「船長、船長、好く來て下すつた、私等は未だ兇犬共を半分も退治しません、私はトムの毛髮の數だけ、彼等を殺します、私共は彼等を一人も助けまいと誓ひました。此土人の國を地上

より根絶します」

と、先刻よりの働さに氣息を切らしつゝ述べたて、我等に一語をも發する餘裕を與へざりし。我は彼を少しく沈黙せしめんとて、終に大音を揚げて

「山犬奴、何を爲て居るのか、最早一人でも殺すとはならぬ、斷じて止める、此處から動くな、さうでなければ汝の生命はないぞ」

と言ひしに、彼は

「貴下は知らないのだ、彼等の爲た事を御存じてすか、私等が此な事をした理由を知らう、思はれるなら、此方に御出なさい」

と言ひながら、咽喉を斬られて、樹に吊され居るトムの死骸を我に示したり。

我の心臓は鼓動し、他の場合ならんには、激昂せざるを得ざりしならん、されど船員等の憤激其度に過ぎたりと思ひ、又ヤコブが其子シメオン及びレビに對し、

「彼等の忿怒は呪ふべき哉、そは猛烈なればなり。彼等の復讐は呪ふべき哉、そは殘忍なればなり」

と言ひし詞を思ひ出しぬ。されど我が伴ひ來りし人々が、此光景を一見せば、之を制し難きこと、恰も他の水夫と一樣ならんと思ひ、竊に一層の難事なりと感じたり。加之、我が甥も水夫等に同

意し、その聽き居る所にて、

「私は只味方が負はせぬかと心配して居ます、土人などは一人たりとも、生命を助けるには及びません、彼等は憫むべきトムを殺害しましたから、其報復を受けるのは當然です」

と我に語りぬ。此語を聞きし我が水夫の八人は、水夫長と其部下の者と共に、慘殺を恣にせんとて馳せ去れり。我は到底彼等を制止し難きを察し、悄然として歸途に就きぬ。蓋し我は此光景を見るに忍びず、况や彼等の手中に陥りたる者の悲鳴を聽くをや。

荷物掛と二名の水夫の外には、一人も我と共に歸らざりければ、此人々と共に端艇に歸らんとせり。されど此小人數にて歸らんとせしは、我の恐なりき、何となれば、はや夜も明けかゝり、警報四方に傳はりければ、前に述べたる十二三戸の小村には、四十人許りの土人、弓箭を携へて警護し居たり。然るに幸に彼等の眼を免れ、直に海岸に來りしが、此時は早や夜も全く明けて白晝となりしかば、直に端艇に打乗りて、本船に行きたり。かくて此端艇を更に他の帆々の用に供せんとて、これを海岸に送り返したり。

さて是より先き、我が端艇に達せし頃に、火は殆んど消滅し、騒動も略ぼ鎮まりしが、本船に達せし後、半時間許りを経て、我水夫の發砲を聞き、尋て黒烟の揚るを見たり。後に聞きし所に據れば、こは水夫等が、かの途中の小村を警護し居たる土人を攻撃して、十六七人を殺し、そ



の家屋に放火したるなりとぞ、但し婦女と小兒とは何等の危害をも加へざりき。  
 船艇を再び漕ぎ行きし者共が、海岸に達せし頃、陸上の水夫等も追々歸り來りて、三三五五端  
 艇に入り來りしが、その状態は先きに行きし時と異なり、二隊を成さざりしは勿論、皆々いた  
 く疲れ、此處彼所に困憊しければ、若し小數の一隊あり、意を決して之を撃たば、容易に殺戮せ  
 られたるならん。

されど恐怖の念四方に傳播し、人々驚恐れければ、二百の士人は、數名の水夫を見るも逃げ去り  
 ならん。此りければ、特に防禦せんとする者一人もなく、火事の恐怖と、暗黒中の突然の攻撃  
 とに驚き、殆んど爲すべし所を知らざりき。右に逃れば一隊に出合ひ、左に回ればまた他の一隊  
 に出合ひ、到る所に於て撲殺せられぬ、然るに我水夫は足を挫きし者と、其手を焼かれし者とを  
 除き、毫も負傷せざりき。

我は船長たる我明に對して、一方ならず怒を抱きたり、諸人に對しても心中穏ならずしが、  
 我が甥に對しては殊に甚だしかりき、蓋し彼の行爲は船長たる義務を外れ、航海の責任を負ひな  
 がら、水夫の殘忍なる暴行を取り憚めんとはせず、却て之を勵まじたればなり。我明は慙慙に我  
 に對し、夫の不幸なる水夫の虐殺せられし死骸を見しときは、忿怒の情勃然として禁するを得ず、  
 船長としては此く爲すべしに非ざれど、己も人間なれば、自然に心を動かさるゝときは、勢之を

抑止すると能はざりしと言ひぬ。他の水夫等は、全く我に従屬せざるとを熟知し居ければ、我が  
 不快に關しては、毫もこれを意に介せざりき。

### 第二十二段

直言衆耳に逆うて異境に捨られ  
 前途漸く開けて又奇難に遭遇す

我等は翌日出帆したれば、後は如何になりしかこれを知らず。水夫等が殺しし人數に就ては、  
 諸説區々なりしかども、之を綜合し見るに、最も精確と覺しきものは、老幼男女百五十人にして、  
 其町の家屋は一軒も殘さず焼き拂ひたりとぞ。

憐むべし、トムジエンライは喉を切られ、首は半ば落ちかゝり、既に全く死したれば、之を携  
 へ來るも、何の益なき故、そのまゝ、其場に棄置くとし、只その片手を縛りて吊されたる樹より、  
 死體を取下し置きたり。

水夫共は、今回の所業を正當の事と考へしが、我は之に反對し、其後常に彼等に向ひ、神は此  
 航海を罰し給ふべしと語りぬ。蓋し此度の暴行は、土人がトムジエンライを屠りしに起因すとは  
 いへ、先づ罪を犯せるはトムにして、自から和親を破りたればなり。

その後、水夫長は此争鬭を辯護していふやう、卒然之を見れば、此方より和親を破りし如く見

ゆるも、實は然らず、戦争は前夜土人より仕掛けしなり、怒るべき理由なきに、我等に向て矢を放ち、水夫の一人を殺したればこそ、これと戦はざるを得ざりしなれ、只正當なる事を爲せるのみ、神の法律に於て、殺人者に對して爲すことを許せる所を行ひしに外ならずと。人或は、此度の事を見て、凡そ異教徒、若しくは蠻人等の住する地には、上陸すべからずとの訓誨となすに足らんと、思ふ者あるべけれども、凡そ人間は、自から高價なる代價を拂ふに非ずば、覺醒するものにあらず、而して其經驗は、最も高く購ひ得たる時に、最も功能あるを常とするに似たり。

是に於て我等は、航路をヘルシア灣に向け、それより只印度の西岸スラットに立寄り、コロマンデルの海岸に到らん豫定なりしが、荷物掛の計畫は、主としてベンゴール灣に赴き、商業の都合により、支那に行き、其より歸路に、コロマンデルの海岸に復らんとの希望なりと。さて此航海中、先づ遭遇せし不幸は、ヘルシア灣に碇泊せる時にして、一日水夫等五人、偶アラビア岸に上陸せしに、突然アラビア人に圍まれ、結局皆殺されしか、又は奴隸に賣られしか、そは知らねども、他の水夫等は之を救ふと叶はず、辛うじて端艇にて逃げ復りたり。我はこれをして、こは往日の虐殺に對し、天の罰し給ふなりとて、人々を戒めしに、水夫長は大に激し、我の非難は、聖書に示せるものに過ぎたりとて、路加傳第十三章四節の「シロアムの塔たふれて壓

死されし十八人は、エルサレムに住める凡ての人々よりも益りて罪ある者と思ふや」と云ふ一節を引用して、我が所説の當らざるを論じたり。我は是に於て沈黙せしが、此は蓋し此五人中の一人が、マダガスカルの虐殺の時、(我は常に之を虐殺と稱せしが、水夫等は此語を聞くに堪えざりしといふ)、上陸せし者に非ざりければなり。我が當分沈黙し居たるは、實に此が爲めなり。されども此事件に就き、我は屢説教せしため、遂に意外なる惡結果を醸したり。此擧の首領たりし水夫長は、或時我許に來りて、斷然言ひけるは、我が絶えず此事を以て、談柄とせらるゝ爲め、船員等は宜からざる反感を惹起せり、殊に彼れ自身も、大に不快の感を抱けり。我は只一人の乗客に過ぎざれば、毫も此船を指揮するの權能なく、又航海に關係なければ、船員等は我に對して、義務を負ふことなし。察するに、我は惡意を抱き、此船の英國に歸るや、彼等を法廷に訴へんとの考なるやも知れず、故に我にして、今後決して此る事を爲すまじと決意し、全く彼の事に干渉せざるにあらずば、彼は今此船を去るべし、我と共に航海するを、安全なりと思はずと。我は、彼が語り了るまで、忍んで聽き居りしが、やがて彼に向ひ、我はマダガスカルの虐殺に始終反對したり、我は、如何なる場合にも、我が所思を自由に陳述して憚からず、獨り彼の非難するに非ず。我が本船を指揮するの權なきは、如何にも然り、我は如何なる威權をも行はんとする者に非ず、只公共の利益に關する事件に就き、自由に意見を述べしのみ。我は航海上には

關係なきも、本船の重なる所有主なれば、今後とも尙ほ一層陳述するの権利あり、何人よりも制肘せらるゝ筈なしとて、漸く激論に涉りしが、彼は其時は、何の答もなさざりしかば、此件は最早落着したりと思へり。斯くて船は、ベンゴールの碇泊所に入りけるが、かねて此地を一見せんと思ひければ、儼然かたぐ、荷物掛と共に、端艇に打乗りて上陸し、夕刻に至り、やがて船に歸らんとせしに、一人の水夫來りて、我をば再び船に伴ふ可らずとの命令を受けたれば、此端艇に乗るべからずと言ひたり、此の無禮なる通知を受けし、我が驚愕は、如何許りなりしぞ、何人も容易に察知せらるべし。我は、此通知を發せしは、誰ぞと問ひしに、端艇掛なりと答へたり。我は此水夫に向ひ、他に何事も言はず、單に使命を我に傳へしも、我が何事も答へざりしと、復りて告げよと言ひたり。(以下適宜第三號地圖参照)

我が直に荷物掛に此事を語り、且察するに、船に必ず暴動あるべければ、速に印度人の小舟に乗りて船に行き、船長に此事を告げよと依頼しけるが、此注意は全く無用なりき、そはこれより先き、船中に於て、事件既に起り居ければなり、即ち我が先きに端艇に乗りて、船を離るゝやいなや、水夫長は砲手、大工、其他の下士等は、直ちに後甲板に集合して、船長に會見を求め、水夫長は能辨家の事とて、長々しく演説し、嘗て我に語りし事柄を繰返したり、要するに、我が今幸に上陸したれば、暴力を用ふるを好まざれど、若し上陸せざりしならば、強むて船を立去ら

しめしならん、故に此際船長に語るを適當と思ふなりとて、彼等が其初め船に乗り組みしは、船長の指揮に屬せんとの意なれば、船長に對しは、忠實に働くべきも、若し我が船を去らざるか、或は船長が我を船より去らしめずば、彼等は皆一同船を立去らんと述べ、

「皆一同」

と言ひながら、彼は大槓の方に顔を向けたり、此を約束せし合圖なりけん、水夫等は異口同音に、

「皆一同」

「皆一同」

と叫びぬ。

我明の船長は、此事を聽きて一時は驚きしも、性來元氣あり、且沈着なれば、更に熟考の上之を我に話すまでは、奈何ともし難き旨を、穩かに彼等に諭し、此事の不條理、不法なることを示さんとて、幾分か辯論しけるも、毫もその甲斐なく、我を最早乗船せしめと約するに非ずば、彼等は皆上陸すべしと斷言し、手を振り腕を扼して、その決意の程を示しける。

こは我明に取りて、寔に一難事なりき、そは彼は我に對して責任を感ずると共に、又我が如何に考ふるかを知らざればなり。故に彼は毅然として彼等に向ひ、我が本船の重なる持主なる事を首めとし、義として我を船外に逐出す能はざる事、若しかくせば、そはかの有名なる海賊キント

が、或船中にて一擧を起し、其船長を無人島に上陸せしめ、其船を奪うて逃げ去りたる所業に等しき事、我を逐出さんよりも、寧ろ船を失ひ、航海を中止するに若かざる事、など説き聽かせ、而して彼等若し強ひて之を斷行せんとせば、彼等は思ふまゝに爲すべし、されど兎に角海岸に行きて、我と相談すべければ、宜しく水夫長も共に來るべし、かくせば恐らくは此事を解決するを得べしとの意をぞ附加へける。

然るに、水夫等は皆これを聽かず、船中にもあれ、陸上にもあれ最早我と交渉するを好まず、我若し船に歸り來らば、彼等は一同上陸すべしと斷言せしかば、船長は彼等が皆此く決心したるからは、誠に是非もなけれど、自から上陸して、我と相談すべければ、暫らく待つべしと言ひ、かくて先きに端艇掛よりの通知の、我に達せし後、少時にして船長は我許に來りて、以上の事實を語りたり。

我は甥を見て大に喜びたり、そは彼等が、暴力を用ひて、彼を監禁し、船を奪うて出帆するの虞なきにしもあらず、若し然らんに、我は此遠き異境に無一物のまゝ遺され、如何ともする能はず、嘗て孤島に獨棲せし時よりも、一層悲惨なる境遇に陥りしならん、然るに彼等が、此く爲さざりしは、我の大に満足したる所なり。かくて我甥は水夫等が言ひし事、又彼等が斷然互に誓約せし事、手を振り腕を扼して決意を示しし事、我若し船に行かば、彼等は一同船を立去るな

らんと云ふ事など細に語りたれば、彼に向ひ、我は陸上に留まるべければ、毫も意を勞する勿れ、只我の求むる處は、必要の物品を我に送り、金錢を充分遣も置き呉れんとこれなり、然らば我は成るべく便宜の方法を講じ、英國に歸るの途を求むべしと語りたり。

こは我甥に取りては、極めて痛心の事なれど、何んと爲ん術もなければ、彼は之を承諾し、かくて彼は船に歸り、叔父が彼等の強請に従ひしと、並に船中にある、我が貨物を我に送らんとを求むるとを、彼等に告げれば、彼等も満足し、數時間を出ずして、此事件は落着し、水夫は各其勤務に服したり。

是に於て我は唯一人、世界中最も遠く隔れる處に居れりといふも可ならん、何となれば英國までは、海路殆ど四千里あり、遙かに孤島に在りし時に比べて、其距離更に遠し、或は此より陸路英國に歸るを得べけれど、そは大モガルを経て、印度の西岸スラットに到り、其より海路ヘルシア海を上りて、亞細亞土耳其のボンラに赴き、其より隊商の途を執りて、アラビア沙漠を涉り、アレツポとスカンデルンに到り、夫より又海路伊太利に渡り、次に陸路佛蘭西に入らざるべからず、之を合計すれば、その距離少くも地球の直径に等しかるべし、若し之を測量せば、更にその距離を増すならん。

されど尙ほ別に執るべき徑路あり、そはスマトラ島のアチンよりベンゴールに來る、英國船を

待ち受け、之に便乗して英國に歸るを得べけれど、我は英國の東印度商會と、何等の交渉をな  
さて此處に來りしかば、其免許狀なくしては、此處より乗船すると叶ふまじ、船長、又は該會社  
員の庇護に依らんとするも、其縁故全くこれなきを奈何せん。

さて、夫の船が我を棄て出帆するや、我は言ふべからざる異様の威に打たれたり、我の如き  
境遇に立ちて、此る待遇を受くる者は、世間に殆んど其例なかるべし、是れ海賊が其悪行に同意  
せざる者を上陸させ、其船を奪うて逃げ去るに、さも似たりと謂ふべし。されど我甥は、二人の  
僕を我に殘したり、その一人は寧ろ伴侶にして、他の一人は全く我が僕なりき。かくて我は、或  
英國婦人の家に寄寓せしが、此家には数名の佛國人と、二名の伊太利人と、一名の英國人も居り、  
その待遇も適當にして、都合好くその日を暮しけるが、我はこれより己の執るべき進路と、我身  
を處すべき方法とを考慮しつゝ、思はずもこゝに九個月以上滞在したれど、幸に高價なる貨物と、  
巨額の金とを所有せしのみならず、此外に我甥は更に一通の信用狀を認めて、これを我に與へ、  
如何なる事ありとも、我の困窮せざる様、厚く心を用ひ呉れたり。

さて我は、幾程もなく貨物を賣りて、利益を收め、之を以て初めより企圖せし如く、此地に  
ていと良質なる金剛石を購求しけるが、これは我が當時の境遇には、最も適合したる處置にして、  
之によりて資産の全部を、常に己が身邊に携帯するを得たり。

此く久しく此處に滞留せる間に、我が歸國の方法に付き、種々助言を與へ呉れしもの少からざ  
りしかども、我意に適するものとは、一つもなかりき、然るに我と同宿して、特に懇親となり  
し一英人あり、一朝我が室に來り、

「同國人、君と少し相談したい事がある、その事は善く我輩の意に適して居るが、君も充分熟  
考すれば、必君の意にも適するだらうと思ふ、君は不慮の事件の爲め、我輩は自身の勝手の  
爲めて、共に本國から最も遠く距つた處に滞在して居るが、我輩の如き貿易といふとを熟知  
て居る眼から見ると、此處は巨利の出來る國だよ。君が今一千磅を出すなら、我輩の一千磅  
と合せて、一つの商船を借り受けて、君を船長とし、我輩は商人となつて、一緒に支那に渡  
つて貿易をしやうてはないか、お互に何の爲めに安閑と日を送つて居るのか、馬鹿々々しい  
てはないか、世界はグル／＼と常に廻轉して息まない、天體も地上の万物も、皆忙しく働い  
て居るのに、御同様に何て懶惰で居られやうか。此世には、人間の外には懶惰者はないよ、何  
して此様な連中と肩をならべて居られやうか」

と、いと隔意なく語りたり。

此説は頗る我意に適ひたり、殊にその好意より、懇切に述べたるもの、如く見なければ、我は  
一層之を悦びぬ。蓋し我は今流浪の境遇に在るを以て、貿易にもせよ、その他何事にもせよ、苟

も人の勸告あれば、之を歓迎することを、最も適當なるべけれども、抑々貿易は我が本領にあらざ、されど假令貿易は我が本領に非ずとするも、漂遊は則ち我が本領なれば、何處にもせよ、未見の地を見んとの勸告は、我に取りて、決して不適當にはあらじといふべし。

されど、それより我等兩人の意に適へる船を得るまでには、多少の時日を要したり、かくて愈々一船を得たれども、英人の水夫を見出すと亦容易にあらざりき、即ち航海を司り、且水夫を指揮するに足るべき船員を得ると、甚だ難かりき。されど兎角して、副船長、水夫長其他英人の砲手、和蘭人の大工、三名の葡萄牙人の前橋員を得、更に印度人の水夫を得て缺を補ひたれば、最早航海に差支なきことなれり。

旅行者の中には、海陸の旅行談を記すに當り、其通過せる場所と、その住民の模様など、何人にも興味なき事柄を、長々しく述ぶる者少なからず、此る記事は、續々刊行せらるゝ普通の旅行記に譲り、我は只スマトラ島のアチンに行き、其より暹羅に行き、そこにて若干の貨物を、阿片と亞力酒（燒酎の類）とに換へたり、阿片は支那人の中にその價高く、當時其需要甚だ多かりきと云はゞ足れりと思ふなり、要するに我等は、サスカンまで行き、大航海を爲し、八個月後に、ベンゴールに歸りしが、此冒險的旅行は、大に我を満足せしめたり。因に云ふ、東印度會社より印度に派遣せる役員、並に概して其處に滞在する商人が、現に大資産を造り、時としては一時に

數百萬圓を獲て歸國する者あり、英國人は往々これを賞讃すれど、我は今にして始めて其然る所以を悟りたり。

さて我等の航海は、都合甚だ好くして、第一回到幾多の金錢を得、且つ更に利潤を得べし見込立ちたりしかば、我若し二十歳若かりせば、資産を造らんとため、此地に留まり、更に勤かざりしならんが、已に六十の老境に達したる人には、富を獲んと欲望よりも、世界漫遊てふ嘗て休む時なき願望に従ふこそ、最も適當なりけれ。こゝに休むとならざる願望と言ひしは、大にその理由あり、即ち此願望は、我胸中に於て、常に休止となかりしが故なり。嗚呼我の本國に在るや、外遊を欲するの情常に止むことなかりしが、今外國に在るや、歸國を欲するの情、亦暫らくも止まざりけり。

其後少暫して、和蘭船一艘バタヴィアより入り來れり。此船は歐洲の貿易船には非ず、沿海貿易船にして、積載量二百噸なりき。乗組人の言ふ所に據れば、此船の水夫病氣に罹りしため、船員不足し、出帆すると叶はず、ベンゴールに停留すれど、船長は充分に利益を得たりし爲めか、又は他の理由ありて、歐洲に行かんとしければ、此船を賣却する旨を廣告したり。この事先づ我耳に達したれば、我は之を買はんと思ひ、組合人を訪問して、相談しけるに、彼は輕卒の人に非ざりしかば、暫らく熟考の後、其船は少しく過大なれど、買取らんと答へければ、早速其持主を

尋ねて代金を支拂ひ、愈々我等の所有となりたり。我等は之を買取りしとき、成るべく其船員を  
採用し、之を現在の船員に加へて、使用せんと思ひしに、意外にも、彼等は分配金の外に、賃金  
を受取らざりしため、一人も居らざりければ、種々穿鑿せしに、彼等は皆陸路モガルの大都市ア  
グラに行き、其よりスラットに到り、海路ベルシア灣に赴く由を開きたり。

此くと聞きし我は、此の如き伴侶と、此の如き漫遊を爲さば、一身の保護に便なると共に、心  
をも樂ましめ、大に我が目的に合ひ、未見の地方を見つゝ、故國に近づくを得しならんに、之と  
同行するの機会を失ひ、暫らくは遺憾極まりなかりき。然るに數日の後に至り、彼等が如何なる  
人物なるかを知るに及び、心竊に同行せざりしことを大に悦びたり。聞く所に據れば、彼等が船  
長と稱したる其人は、單に砲手にして指揮官にはあらず、彼等は貿易の爲めに航海中海岸にてマ  
レイ人の爲めに襲はれ、船長と三人の水夫とを殺されしかば、副船長と五人の水夫とを陸上に棄  
て、其他十一人を船にて奪ひて逃げ去り、終にベンゴール灣に來りしなりと。

是に於て我等は、更に數名の英國水夫と和蘭人とを募集し、茲に第二回の航海を企て、東南の  
方フイリツピン群島とマラツカ群島とに丁香等の貿易を試みたり。されど此より先途に向重大の  
事あれば、今は些細の事は省略すべし。さて我は前後六年間此邊の各港を往來し、其成績甚だ良  
好なりしが、終に前に記したる船に乗込みて、支那に行くこととなり、先づ米を買入るゝため暹羅

に航したり。

此航海中は、不幸にして逆風に逢ひ、止むを得ずマラツカ海峡と、此邊の諸島の間に漂泊し、  
漸くにして此險危なる海を出づるやいなや、船に漏を生じけるが、如何に吟味するも、其損所を  
見出すと叶はざりき。因て止むを得ず何れの港へか入らんとせしに、我組合人は此邊の地勢を知  
ること、我に勝りしかば、船長にカムボチア河に船を入れよと命じたり。是より先き、我は自か  
ら船を指揮するを好まざりければ、トムソンと云ふ英人の副長をば、船長とはなしたり。此河は、  
大灣の北側に在り、之を溯れば暹羅に達すべし。

此處に碇泊中、保養の爲め、屢上陸せしが、一日一英人我の側に來れり、此者はカムボチア  
市の附近に於て、此河中に碇泊する英國東印度會社の持船の砲手なりと云ふとなりしが、如何に  
して此處に來りしか知らざれど、彼は我に向ひ英語にて

「君は僕を知らず、僕も君を知らず、双方未知の間柄であるが、君に話したい事がある、その  
事は君の身上に切迫して居る事である」

と。我は暫時彼の顔を凝視て、初めは知人ならんと思ひしが、さにはあらざりき。我は彼に向ひ、  
「我輩の身上に切迫しても、君に關係ない事を、何て我輩に話さうとするのか」

と問ひしに、

「君に切迫した危難であるから、話さうと思ふのです、察するに君はまだそれを知らないらしい。」

「我輩は船に漏口が出来たが、それを見出すとが出来ないといふ外には、毫も危険の迫つて居るのを知らない。明朝は船を陸に上げて、それを見出さうと思つて居るよ。」

「併し君、水が漏つても漏らぬても、それを見出しても見出さぬても、君が我輩の言ふ處を聞けば、明日船を海岸に上げるやうな愚かな事とはなざるまい。君はカムボデア市が、此河の上流十五里許りの所に在るとを知つて居らるか。二艘の大なる英國船が此岸より六里許り上に居ますよ、和蘭船も三艘居ますよ。」

「してそれは我輩に何な關係があるかね。」

「君の様な冒險家が入港するには、先づ如何なる船が其處に居るか、又其船と敵對する事が出来るか否やを調査しないと何事である、察するに君は彼等に對抗するとは出来まい。」

「我は其意を會得せざれば、彼の談話に就て少しも驚かず、却て大に興ある事に思ひ、彼に向て」

「君どうか説明してくれ給へ、我輩は如何なる會社の船も、又は和蘭船も恐るべき理由がない、我輩は横奪者ではない、彼等から何も言はれる筈はな。」

「我輩は横奪者ではない、彼等から何も言はれる筈はな。」

「と言ひぬ。彼は半は怒り、半は喜べる如く、暫らく打案じて微笑ながら言ひけるは、」

「さて君、若し君自から安全だと思つても、事の機会を逸してはならんではないか、我輩は氣の毒でならぬ、君は運命の爲めに目を眩まされて、好意の忠告に背くのではないか、まづとてす、直に海に出なければ、次の満潮には、五艘の長舟の爲めに攻撃せられるぞ、而して若し捕獲せらるゝならば、海賊として絞首せられ、詳細の事柄は後に吟味せられるだらう、我輩は斯様な大切の事を君に知らせたから、もつと好遇せられるだらうと思つたのに。」

「如何なる勤勞に對しても、又如何なる親切に對しても、我輩は決して其恩は忘れない、しかし君の言ふ所は全く合點の行かぬ事だ、何の爲めに彼等は此様な計畫を爲るのか。しかし君が一刻も猶豫が出来ない、危難が目前に迫つて居ると云はれるから、我輩は即刻乗船して、漏口が塞げたにせよ、又は塞げないにせよ、直に出航しやうが、君、此事の理由を知らないで立去るのも遺憾だが、もし判るやうに説明して呉れることは出来ないか。」

「と言ひぬ。彼は曰く」

「我輩は只その一端の外は君に語ることが出来ない、此處に居る和蘭人に聴けば、委細を話すであらうが、今は殆んど其餘裕がない、しかしその大要はかうである。その發端は君も善く知つて居られると思ふが、君等は此船でスマトラに行つて、何處で君等の船長が三名の水夫と」



共にマレイ人に殺されたので、君や君と共に船中に居つた人々は、其船に乗て逃げ去り、爾來海賊になつたといふとだから、君等は何れも海賊として捕獲せられて、用捨なく處刑されるだらう、君も知つて居る通り、商船が海賊を捕へるときは、殆んど法律の手續を履くことはありませぬよ。」

と。我は之に對し、

「君が明白に語つたのを深く感謝するが、我輩等の行爲に就て、君が言つた様な事は、毫も知らない、我輩等は正直に公明に此船で来ただけども、果して君の言ふ様な計畫があるならば、君は正直に語られたと思ふから、我輩は此から防禦に取り掛らう。」

と言ひけるに、彼は

「否々「防禦」なんと言ひ給ふな。若し君が自己の生命と、一同の者の生命とを重んずるならば、第一の防禦は危険を脱るゝのだ、必と満潮に乗じて、海に出たまへ、さうすれば彼等は満潮を待つて下つて来るから、其来るまでには遙か遠くに逃げられるだらう、彼等は二十哩の先から来るのだから潮時の差異で、君等は彼等よりも殆んど二時間早く出發する事が出来る、其上彼等は大船ではない、小舟だから、海上遙に君等を逐ふとはあるまい、殊に風が吹けば尙更の事だ」

と。我はこれを聽き

「さて、君は大層親切な人である、何を以て君に報いやうか。」

と言ひしに、彼は

「君は未だ其事の實否を確かに知らないから、我輩に報酬を與へやうとも思ふまいが、しかし一の要求がある、我輩は英國を出帆してから、十九個月間給料の支拂を受けない、又我輩と共に居る和蘭人も七個月分の給料を受取らない、君が若し此給料の支拂を引受けて呉れ給ふならば、我輩等は君に同行してもよろしい、若し君が何事もないと認め給ふなら、我輩等は最早請求はすまいが、しかし君の生命と船と乗組員一同の生命とを救つた事を、君が信するやうになつたらば、其他は君の意に委せませう。」

と云へり。我は快く之を承諾し、直に此二人を具して船に行きたり。我が船側に近づくと、折節後甲板に居りし、我組合人は大に喜び

「オイ、漏口を塞いだよ、漏口を塞いだよ。」

と、呼はりければ、我は

「然か、それは有難いが、兎に角直に拔錨しやう」と言ひしに、彼は

「拔錨、それは何いふ譯か、何事か。」

と問ひしが、我は

「何も問ひ給ふな、總掛りて拔錨しろ、一分間も猶豫は出来ぬ。」

と言ひければ、彼は愕然たりしが、直に船長を呼びて此くと傳へければ、船長は直に錨を揚ぐべしとの命令を下しぬ。此時未だ全く滿潮とはならずしも、陸上より軟風吹き來りければ、我船は海に出てたり。是に於て我は組合人を船室に招き、大體の事を話して、夫の水夫を呼入れ、其餘の事を聞取れり、然るに此が爲め多分の時間を費しければ、其話の未だ終らざる内に、一人の水夫船室の入口に來り、船長よりの傳言なりとて、我等が追掛らるゝ由を告げれば、我は「誰の爲めに、且つ何て追掛らるゝのか。」と問ひじに、

「人の一杯乗つた五隻の小舟に。」

と答へければ、我は

「さうか、そんなら何事かあるに相違ない。」

と言ひ、直に水夫一同を招集し、此船を押へ、海賊として我等を捕へんとする企圖あることを告げ、且つ彼等は我等を助けんと欲するか如何にと尋ねしに、皆一同我等と死生を共にすべしと愉快に

答へければ、我は飽まで敵に對抗し、最後まで戦はんと決心し、さて船長に向ひ、敵と戦ふに如何なる方策を執るべきかと尋ねしに、彼言ひけるは、其方法たる先づ成し得る限り大砲を以て敵を追ひ拂ひ、次に小銃を發射すべし。されど彈丸盡きたるときは、密閉したる室内に立籠らん、恐らく敵は隔壁を破るべき材料を所持せざるならんと。

かゝる間に砲手は、船尾より二個の大砲を甲板上に持來らしめ、彈丸と古き鐵の小片とを詰め込み、此くして砲闕の準備をぞ爲しける。されどかくする中にも始終帆を張りて、海へ乗り出しけるが、遂に顧みれば、五隻の長舟は帆を張りて、我等を追ひ來れり。

双眼鏡を取てこれを望見せしに、其中の二隻は英國の舟にして、他の舟の先に進むこと殆んど二里、その速力我に勝りたれば、程なく我船に追付かんかと思ひ、空砲を發ち、これを警戒し、砲議の合圖として、休戦旗を掲げたれど、彼等は尙ほも追ひ掛け來り、遂に彈着距離の内に達しければ、我等は白旗を下しけるに、何の應答もなきれば、今は此迄なりと、赤旗を掲げて一彈發しぬ。此にも係はず彼等は尙ほ進み來り、終に談話用の喇叭を以てすれば、問答するを得べき程の距離に近づきければ、彼等に對し近づき來るは危険なり遠く離れよと告げたり。今度も前と同じく、何の効力もなく、我等に追ひすがり、やがて船尾の下に來りて、終に我船に乗り入らんと勉むるが如き模様見なければ、こは後船の力を恃んで、彌我に兇行を加へんと

するなりと察知し、乃ち我船を廻轉して、舷側を敵に向け、直に五彈を發射せしに、其一彈は狙ひ過たず、最後の舟の後部を打飛ばしければ、彼等は帆を下さざるを得ざるに至り、且沈没を防がんとて、皆舟の前部に馳せ寄りぬ。かくて此舟は最早用をなさざりしが、最先の舟は益々我等に迫り來りければ、特に之に向つて發砲の用意をぞなしける。

兎角する間に、背後に在りし三艘の中一艘は、他の一艘に先だちたれば、夫の破損せる舟を救はんとして、之に近づき、やがて水夫を乗り移らしめたる模様なりき。かくて我等は、眞先に進み來りし舟に對し、如何なる用事かを聽かんと、再び休戦の信號をなししも、何の答もなさて、只管我船尾に逼迫するのみなりしかば、我老練なる砲手は、追撃砲を取出して、再び發砲したりしが其彈丸外れて命中せざりしかば、該舟の水夫は大聲を揚げて呼はりつゝ、帽を振つて進み來りぬ。然るに砲手は急に再び準備し、又々發砲しけるに、誤りて船には中らざりしも、乗組人の間に落ちて、多大の損害を與へし有様は、一見して知られたり。然るに此方は之に頓着せず、再び船首を廻して、之に我船側を向けつゝ、更に三發を放ちしに、該舟は殆んど片々に碎けたり。殊に其舵と船尾の一片は遙か彼方に散りければ、彼等は直に帆を捲かんとて、大に狼狽したり。されど砲手は尙ほ之に飽足らず又も二彈を放ちたり、何處に中りしかは知らねども、その小舟の沈没せんとして、乗員の既に水中に陥れるを見たり。此に於て、我船側に繋ぎたる端艇に水夫を乗

せ、成るべく彼等を救ひあげて、直に本船に歸り來れと命じぬ、是れ他の敵舟の尙此方に進來るを認められたればなり、我端艇の水夫はやがて三人を救ひ揚げしが、其中の一人は殆んど溺死し居りやゝ久しくして蘇生したり。かくて此水夫等の歸船するや、成るべく多く帆を張りて、一層沖の方に航進せしかば、三隻の敵舟は、最初の二隻の沈没せし所まで來りしが、終に追跡をぞ止めける。

斯くて其理由は知らねど、意外に恐るべき此危難を脱れたれば、我等は茲に航路を變じ、何人にも我等の進行せし方向を推想せしめざらんものと、遙に東方に乗り出し、歐洲諸國の船が、支那或は其他の國に往來する、航路以外に出でたり。

我等は最早海上遙に出でたれば、漸くかの二名の水夫を呼び、先づ今度の事件の真相を尋ねしに、和蘭人は直に其事の秘密を我等に知らせぬ。其言ふ處に據れば、嚮に我等に船を賣りし者は、是より先き其船を奪うて、逃走したる盜賊に外ならざりしとぞ、それより彼は船長がマラツカ海岸にて、三名の水夫と共に殺されし事を語り、其船長の名をも言ひしが、我は之を記憶せず。此和蘭人と、その他四名の水夫とは、當時森に逃げ込み、暫らく彷徨しが、終に彼は不思議にも逃れ出て、和蘭船に救はれたり。此和蘭船は支那より歸航中其海岸に來り、飲用水を得んとて、端艇を海岸に遣はしければ、彼は夜に乗じて、その端艇に泳ぎ着き、遂に救ひ揚げられしな

それより彼はバダビアに行きしに、先きに本船に属せし二名の水夫が、旅行の途中、其他の者と別れて、偶此地に着し、先きに本船を奪うて逃走したる者共が、ベンゴールに於て其船を海賊の類に賣り渡し、其海賊は之に乗りて、巡洋に出掛け、貨物を満載せる一艘の英國船と、二艘の和蘭船とを奪掠したる由を、彼に物語れりと云ふ。

此談話の後半は、我等に直接の關係あれども全く事實にはあらず、されども我組合人の言へるが如く、我等若し彼等の手中に落ちなば、かゝる先入の偏見を有する事として、我等が如何に辯味すとも、その甲斐なからん、殊に原告は英國の裁判官なれば、怒の發するまゝに命令し、情の激するまゝに處刑すべきをもて、到底容赦の望あるべくもあらず。されば我等は此際何處にも入港せずして、先に出發したるベンゴールに直航するに若かず、彼處に到れば、我等は自から我等の行脚を辯護するを得べし、先に此船の此處に入來りしとき、我等が何處に居りしか、何人より之を贈ひしか、其他之に關し、一々證明するを得べし、是れ本件の適當なる裁判官の前に提出するに當り、何事よりも先づ必要なる事項にして、此くせば必らず正當なる裁判を受くるを得べし、かの先づ首を刎ねて、後に裁判する如き不都合あることなからんと。

我は一時組合人の説を可なりと思ひしが、更に少しく熟慮せし後、彼に語りけるは、我等は合ラツカ海峡の裏面に在るを以て、ベンゴールに歸らんとするは、極めて危険なり、若し警報一たび傳へられなば、バダサイアの和蘭船、或は其他の英國船など、四方八方に待伏するや必定なり、我等が恰も逃走する如き態度にて、捕獲せらるゝときは、必ず罪跡明白なりとて、處刑せらるゝならんと言ひ、且つ夫の英國水夫の意見を問ひしに、彼も我と同説にて、我等は必ず捕獲せらるべしと答へたり。

此る危険ありと聞きて、我組合人と乗組人一同も、少しく驚きぬ。かくて我等は直に東京の海岸に出で、それより支那に行き、最初の計畫に従つて貿易し、その中如何にもして此船を賣却し、他の英國船に乗りて歸らんとの意見に歸着し、いづれもこは安全を計るべき最良の方法として、これを賛成せしかば、普通の航路より東方に五十里以上離れて、北北東に進航したり。

さりながら此が爲めに我等は、幾分か不利の位置に立ちたり、先づ第一我等が海岸を離れしとき、風向は益進路に反し、東方及び東北東より所謂貿易風吹來りければ、航海に長時間を費し、此が爲め食糧の不足を來しぬ。更に尙ほ悪きは、先きに小舟を以て我々を進撃せしめたる英國船と、和蘭船とに出合ふの虞あり、假令此等の船に出會せずとも、支那行の他船が、我等の事を聞き込みて、或は我等を追跡するやも測り難かりければなり。

是に於て我は甚だ不安に堪へずして、自ら思へらく、先に長舟の追跡を脱れたる事をも併せ考

へ、既往の生涯中、此る危険なる境遇に陥りしこと未だ嘗て之なし、從來如何なる逆境に在りても、未だ盜賊として追跡せられしことなし、又不正、若くは詐欺の名目に償すべき事は、我は曾てこれを爲したることなし、况んや盜賊をや。嗚呼我は主として我自身の敵なりき、又正しく言へば、我は我自身の外何人の敵にも非ざりき、然るに今や最も惡しき境遇に陥りたり、假令我は全く無辜なりとは云ひ、其無辜なるを言釋くべき手段なし、若し一たび捕はれんか、最も惡むべき罪名を被らん、少くも、我の交接したる人々の間に於て、此く看做さるるならん。

此くて我は何れに逃れんか、又は何處に、又は何港に赴かんか之を知らざりしかど、これがため只管捕獲を脱れんと痛く心を勞しければ、我組合人も、初めは自ら最も甚だしく心配したれど、我が苦慮の状態を見て、漸く我を勵まし、其海岸なる數港の模様など語り、交趾支那の海岸即ち東京灣に入りて後、支那の澳門に行かんと語れり、澳門は嘗て葡萄牙領たりし一都會にして、今尙ほ多數の歐洲人居住し、殊に宣教師等は支那に赴かんとて常に其處に行きたり。

此に於て我等は彼處に行かんと決し、彼方此方と迂路を執り、爲めに食糧の缺乏に苦しみしも、遂に一日の朝早く、海岸を望見する所に來りしが、過去の事情と危険とを回顧し、先づ一小河に入り、それより端艇によるか、又は陸地に上りて、附近の諸港に如何なる船舶の碇泊せるかを探るとしたりしに、幸に此手段によりて危難を免れたり、何となれば其日は東京灣に歐洲

船を見ざりしが、翌朝に至り、和蘭船二隻入港したり。又二里許りの沖に旗を揚げざる一船を見しが、こは支那海岸に航進する和蘭船なりしが如し。又午後二艘の英船同航路を進行せり、されば我等はいづれにせよ、前後を敵に包圍れたるの感を抱さぬ。さて到着せし所は、野蠻未開の地にして、住民は盜賊を業とせり、我等は少許の食糧を得んとせし外、彼等に多く求むる所なかりしが、種々彼等より侮蔑るゝを忍ぶと容易ならざりき。

さて我等は、此地の北端より數里の内なる一小川の中にあり、端艇によりて北東に向ひ、東京灣に出でたる陸端まで行きしが、前に述べし如く、敵船に圍まれたるを發見せしは、實に此沿岸を航進する際なりき。此地の住民は、此海岸に住する人民中最も野蠻にして、他の國民と毫も交通せず、只魚類、油其他粗大なる貨物を交易するのみ、彼等の最も野蠻なるとは、種々の惡風あるを見て明なるが、就中最も甚だしきは、海岸に破船あれば、直にその乗組人を捕獲して、奴隸とするを常とし、我等に對しても、程なく此手段を施さんとしたり。

さる程の上に記せし如く、我船は先きに漏口を生じ、初めは其損所を發見するを得ざりしが、暹羅灣にて和蘭船と英船とに捕獲せられんとせし刹那に、圖らずも漏口を塞ぎ得たれど、尙ほ未だ意の如く全く堅固なりとは謂ひ難かりしかば、此處に在る間に、船を海岸に揚げ、船中より重き貨物を取出し、船底を掃除し、成るべくその損所を見出さんとぞ爲しける。

此に於て船を軽くし、大砲其他動かし得べき物を一方に取り片付け、其底の見ゆる様に船を傾けしが、再考の結果之を地上にて乾かすことはせざりき、又之に適する場所をも見出さざりき。士人は、今まで嘗てかゝる有様を見ざりしかば、これは何事ならんと怪しみつゝ、海岸に來りしに、船の一方に傾き、乗組人の居らざるを見て、これは乗捨てしに相違なしと考へたりしならん、此時は我が水夫等は端艇に乗り、又は足場に依り、修繕をなし居りしが、裏面の事とて、彼等には見えざりしならん。

此く思ひ定めて、彼等は二三時間の後、十艘若くは十二艘の小舟に、八人乃至十人づゝ乗り込み、本船に近づき來れり、これは疑もなく、船中の貨物を奪ひ取り、且つ若し我等を見出さば、これを捕へて國王の奴隸と爲さんと欲せしならん。茲に王と稱せしも、彼等を支配する者は誰なるか、我等は之を知らざれば、之を國王と稱するも將た何と呼ぶも、固より妨げなし。

さて彼等は本船の側に來り、其周邊を漕ぎ廻はりし後、我等が船底と船側とに在りて、通例航海者の知る如く、船を洗ひ、瀝青を塗り、或は水漏の穴を塞ぎなどして、活動するその様を發見し、暫時これを眺め居りしかば、我等は少しく驚き、その心中をば固りかねたれど、萬一を慮り我は此際數人を船中に入らしめ、又働さ居る者に武器彈藥を渡して、防禦の用意をせざるしめける。かくて彼等は二十五分間程評議し居ける模様なりしが、此船を以て破船と認め、我等

が皆働さ居るは、これ船を修繕せんとするか、或は端艇に依て生命を保たんとなし居るならんと推斷したるが如し、又我等が武器を端艇の人々に渡せるを見て、これは若干の貨物を救ひ出さんとなし居るならんと斷定したり。此に於てはや、我等一同を以て、己等の手中にあるものと思ひけん、恰も戰鬪線を布くが如く、我等に迫來れり。

士人の數の夥しきを見て、我水夫等は漸く恐怖の念を起し、その位置戰鬪に不便なれば、如何にせんかと、聲を放ちて我等の指揮を求めければ、我は直に、足場の上にて働さ居る者は、これを下りて、船側より上り來れ、端艇に乗り居る者は、艇を回して、本船に登れと命じ、又た船中の人々には、全力を盡して、船の位置を直さしめんとしたり。されど足場の者共も、端艇の者共も、未だその命令の如く爲すの邊なき間に、士人等は早や犇々と迫り來り、其中の二艘の士人等は、我長艇に乗り込み、我が船員を捕へんとしたり。

さて士人等が先づ捕へんとせし人は、英國人の水夫にして、その體軀強健なり。手に小銃を持ちたれど、發射せんともせず、恰も恐人の如く、之れを艇中に置きしが、我の訓示を待つまでもなく、事の内容を充分に解し居ければ、忽ち士人を掴み、大力を出して之を己が艇中に拽き入れ、兩耳を執りて、其頭を舷側に打付たれば、其士人は忽ち死したり。此間に傍に立ちたる一人の和蘭人は、鐵砲を執り、其臺尻を以て、艇に飛び込まんせし士人五人を打倒したり。され

と危険を知らずして、大膽に我長艇に飛び込さんとせし、三四十人の土人に對し、艇中に居たる僅五人の者にて、之を防禦するも到底其甲斐なかりしに、茲に偶可笑しき一珍事起りて、我水夫をして全勝を得しめたり、其次第左の如し。

我大工が船の外側を塗り、又先きに漏口を塞がんとて捲架を打込みたる所の間隙を填めんが爲め、その準備を爲さんものと、此時丁度二個の鍋を此端艇に持來らしめしが、其一個には沸騰せる瀝青を盛り、他の一個には松脂、獸脂、油其他大工の使用する材料を入れたり、而して大工の手傳は手に柄杓を持ち、其熟き材料を大工に供給し居りしに、會此手傳の立ち居る所に、敵二人進み來りしかば、彼は直に沸騰せる材料を柄杓に一杯浴せかけしかば、如何て堪るべき、半裸體なる此二人は、焼け爛れて牛の咆ゆるが如く叫び、熱し、熱しと荒れ狂ひつゝ、共に海中に跳び入りたり、之を見て大工は

「旨くやつたぞ、旨くやつたぞ、もつと響應つてやれ。」

と叫び、自身も前に進み出て、其布帛を瀝青の鍋に浸して、群る敵中に投げ掛けられたれば、三艘の小舟に乗りたる土人等は、一人も火傷を受けざるものなく、その有様恐ろしくも、亦憫むべくして、未だ會て聽かざりし一種の咆聲を發しぬ、凡そ人は苦痛に遭へば、自然に叫聲を發すと雖も、各國民に特殊の聲あること、猶ほ其國語の同じからざるが如し。而して此土人の咆聲は、之を咆

聲と稱するの外、他に好名稱あるなし、嘗て佛蘭西のランゲドックの境界なる森林中にて聽さし狼の咆聲こそ、最も善く之に似たりと覺ゆるなれ。

我が一生涯中、此程喜ばしき勝利を得たることなし、是れ全く我を喫驚せしめしに由るに非ず、又我等の危難の切迫せし爲めにもあらず、只我水夫が赤手を以て、一土人を殺せし外には、我が大に惡念したる流血の事なくして、かく勝利を得たればなり、蓋し假令自身を防禦する場合にもせよ、彼等が正當と思ひ、又之に優れる事なしと信じて、其使命を果さん爲め來れりと知るからは、我はかゝる惘然なる殺人を殺すに忍びず、又必要なるが故に、正當なりと云ふも、元來必要なる惡事あるべき善きなければ、吾人が自身保護の爲めに、同胞を殺さざるを得ざるとは、誠に嘆息すべきといふべし、實に我は今猶ほ斯く思ふなり、我は己れを害せんとする人の生命たりとも、之を奪ふことを欲せず、之を奪ふよりも、寧ろ自ら苦痛を忍ぶこそ優ならめ、凡そ人命の價値を知る所の識者は、皆我が説に同意するならん、少くも眞面目に人の生命を思考する者は、斯くこそ思ふならめ。

閑話は之を措き、我物語に立戻らん。かゝる中に我組合人と我とは、船中に居りし水夫を指揮し、極めて巧に本船を殆んど正位に復せり、又砲手も大砲をその位置に復しければ、我に向ひ我端艇を傍に避けしめ、更に發砲せんと言ひしかども、我はそれには及ぶまじ、彼等の待遇は大

工にて充分足るべし、只料理人をして、瀝青の鍋を沸騰せしめよと命じたり、然るに敵は初度の攻撃に辟易しけん、再び近寄らざりき。又遠方に在る敵は、我船が再び直立して動き出したるを見て、自己の誤解を悟り、初めの企圖を打捨たり、此くて此興味ある戦争は終りぬ。さてもこれより二日前に既に若干の米、草根、麵麩その他十六頭の豚を船中に積み載せられたれば、假令前途に何事あらんとも、最早此處に止らず、直に出帆せんと決定したり、そは翌日に至れば、恐らくは瀝青の鍋を以て待遇するを得ざる程、多数の盜賊に包圍せらるゝと、必定なりと思ひたればなり。されば其晩一切の物品を船に積入れ、翌朝出帆すべき準備を爲しけるが、若し敵の來襲あらんも圖りがたければ、一面には戰鬪の準備を爲し、一面には直に出帆するを得べき用意を整へて、碇泊しければ、假令如何なる敵兵現はるゝとも、深く心を勞するに足らざりき。かくて翌日船中の工事も全く終り、且つ漏口も全く塞ぎたれば、終に此地を出帆したり。我等は初め東京灣に入らんとせしが、該港には現に和蘭船數隻碇泊し居ることを知りなれば、敢てこゝに入らず、此より針路を東北に向け、臺灣島に赴くことに決したり、蓋し當時我等が、和蘭船或は英國船の目に觸れんとを恐れし様は、恰も和蘭或は英國の商船が、地中海に於てアルジール國の軍艦を怖るゝが如くなりき。

### 第廿三段

才智ある水先案内を得て纔に危險を脱し  
北京より長城を踰えて西比利亞を横斷す

我等はかくて沖に出づるや、マニラ即ちフィリピン群島に行かんとするもの、如く、針路を北東に向けけるが、そは歐洲船の航路に入らざらん爲めなり。それより北緯二十二度三十分に至るまでは、北方に進航して、一直線に臺灣島に達し、茲に投錨して、飲料水と新鮮なる食品とを得んとせしが、此處の住民は、いと感慙にして、禮儀厚く、喜んで我等に物品を供給し、其約束も取引も、極めて公平正確なりしと、他の人民中に未曾て見ざりし所なり、こは恐らくは會て一人の新教派の和蘭宣教師が、此處に基督教を移植したる、餘澤に由るならん。蓋し基督教の一旦輸入せらるゝや、これがため其地の住民に、救済上如何なる効果を及ぼすや否やは、姑らく之を措き、常に其人民を開明に導き、其風習を改善するの効ありと謂ふべし、これ我の屢説きたる所なり。(以下第三地圖時々參照)

此より、歐洲船の通常出入する、支那の諸港を越ゆるまでは、我が船は支那の海岸より、一様の距離を保ちつゝ、尙ほ北方に航しけるが、こは成るべく歐洲人の手に落ちざらん様努められたり、蓋し此國に於て若し歐洲人に捕へられれば、當時我等の境遇として、到底滅亡を免る可



らずと思ひたるが故なり、我は、彼等の爲めに捕へられんことを特に怖れ、寧ろ西班牙人の宗教、問所の手に陥るかた、遙かに之に優れりと思ひたり。

かくて船は、北緯三十度の地點に來りければ、我等は最先に到着すべき、港に入らんと決定し、海岸を望んで船を停めしに、凡そ二三里の彼方より、一艘の端艇此方を指して漕ぎ來りけるが、其内には年老いたる葡萄牙人の水先案内乗組み居り、我等を歐洲船と察し、雇入れられんとて來りたり。我等も大に之を歡び、彼を船中に迎へ入れけるに、我等の何處へ行くかをも問はずして、己が乗り來りし端艇を、直に漕ぎ歸らしめたり。

是に於て、此老人をして、我等の欲する所に案内せしむるも、意の儘なりと思ひければ、我は支那の海岸の最も北端なる南京灣まで、我等を伴ひ行く様、徐に話し掛けしに、此老人は南京灣をば熟知れる由を語り、その顔に微笑を湛へつゝ、彼所には、何事にて行き給ふかと問ひかへしたり。

我は、積荷を賣りて、支那の陶器、金巾、生糸、茶、絹布、等を買入れ、渡來の時、同じ航路を経て、歸國せんと欲する旨を告げしに、さらば澳門に入港するに若かず、彼所には必ず我阿片を賣るに屈強なる市場あるべし、且種々なる支那の貨物を、南京と同一の廉價にて賺ふとを得べしと語りたり。

かくて老人は、熱心に己の説を固持し、その語頭を轉せしむると叶はざりしかば、我は彼に向ひ、我等は商人なれど、又紳士なれば、北京の大都と、支那皇帝の有名なる宮廷とを、一見せばやと欲する旨を告げしに、老人はさらば寧波に行くに若かず、そこに一の河口あり、これを沂河と云ふ、大運河の十五哩以内に至るを得べし、此大運河は、舟を通ずべき河にして、廣大なる支那帝國の中心を貫通し、諸河を横斷し、水門を濬り、幾多の丘陵を通過して、北京に達す、其延長頗んど八百十哩ありと語り、かくて我は彼と左の如く問答したり。

「どうかね、それは今の問題ではない、目下の大問題は、君が我輩等を南京市に連れて行かれるなら、そこから北京に行かれるかと云ふとだ。」

「それは出来ずとも、一艘の和蘭の大船が、少し前に彼方へ行きましたものだ。」

此くと聽きて我は少しく驚きぬ、和蘭船は當時我等の最も恐れし所なればなり。若し惡魔にもて、餘り恐ろしき形相にて現はるゝに非ざれば、我等は寧ろ惡魔に會合ふこそ、遙に勝なれ、若し和蘭船に遇はば、之と戦ふと叶ふべくもあらず、且此邊の諸港に出入する船舶は、何れも巨大にして、我船よりも遙に有力なれば、我等の滅亡は到底免るゝと叶ふまじ、さて老人は和蘭船の噂をなしけると、我が少しく當惑し、懸念の有様なるを見て、

「貴君、和蘭人は寧ろ恐れるには及びません、和蘭は今貴君の國と戦争中ではありませぬ。」

「如何にもさうだ、しかし凡人は法律の手の達かない所では、如何事を爲るかも知れないよ」  
「貴君は海賊ではあるまいし、何も恐れるには及びません、彼等は必と平和な商人に干渉しな  
すまい。」

此言を聞きて、我身體中の血液は、一時に面上に逆上し來り、我が心中には云ふべからざる大  
混亂を生じ、之を蔽ふこと能はざりしかば、老人は容易に之を覺りぬ。

「貴君、我輩の談話のために、心配をされる様ですが、何處でも貴君が適當と思ふ所に行くの  
がよいです、御安心なさい、私は出来るだけ盡力します。」

「二、君、我輩は此際特に何處に行かうか、少し決定し兼て居るのだ、君が海賊の話をしたので、  
何だか一層不安心なのだ、此邊の海に海賊が居なければいゝが、君の見る通り、武器も乏し  
いし、人数も不足だから、海賊に出會つては、都合が悪いよ。」

「貴君、心配なさるな、十五年來、此邊に海賊の居た事を聞きませんが、只一ヶ月許り前に、遠  
羅灣に一艘の海賊船が居たと聞きましたが、最早南の方に行つてしまひましたから、御安心  
なさい、それも大した有力の船でもなし、又海賊を働くに適當な船でもないのです、固より  
海賊を働かため、築造されたのではありません、只其船長と二三の水夫が、スマトラ島の  
附近で、マレイ人に殺された後に、水夫の中の悪漢がこれを奪つて逃去つたのです。」

我はその事を毫も知らざる風を粧ひ、

「何、水夫等が船長を殺したと。」

「否、彼等が船長を殺したとは承知しませんが、彼等が其後船を奪つて亡逃したので、恐らく  
彼等は船長を欺いて、マレイ人に殺させたのだと、誰でも信じて居ます。」

「そんなら彼等は自から手を下したのと同様に、死刑に處せらるべき價値があるね。」

「さうです、それが相當です。若し英國船が和蘭船に捕へられれば、必さうされませう。若し  
此惡漢に出會つたなら、毫も容赦すまいと、申合せが出来たさうです。」

「君は海賊が此邊の海から、何處かへ逃げたと言つたが、如何して其人達は海賊に出會ふとが  
出来やうか。」

「實にさうです、其人々もさう言ひます、しかし私の話す通り、その海賊が暹羅灣のカムボヂ  
ア河に居たとき、二三の和蘭人の爲めに發見しました、其和蘭人といふのは、元其船に乗つて  
居ましたのが、海賊が船を奪つて逃亡したとき、海岸に取殘された者です。そこで當時英國  
と和蘭の商人で、此河に居つた人々が、幾んど其海賊を捕へる處でした。若し最先の三艘の  
小舟が、他の小舟にさう多く援助されたら、必捕へましたらうが、海賊船に近づいたのは、只  
二艘のみでしたから、海賊は此二艘に向て發砲し、他の小舟が援助に來た前に、此二艘を破

壞して、遠く沖合に逃げ延びましたから、他の小舟は之を追跡するとか出来ませんでした。しかし彼の人達は、此船の形状を精細に知つて居るので、直ぐに判りますから、此船を見付け次第、船長でも水夫でも、少しも用捨なく、帆桁に縛りつけて、絞殺すると言つて居ます。「何、其人達は正邪に拘はらず、乗組人を處刑しやうといふのか、先づ絞つて後に裁判しやうとするのか。」

「さうですとも、此んな悪漢に對しては、正式の手續を踏むには及びません、背合せに縛つて海の中に沈めても、それは相當です。」

我は此老人が船を去らざるべし模様あるを認め、且我に何等の危害を加ふると叶まじと思ひければ、彼に向つて

「そこで君、我輩等がマカオにも戻らず、又何處でも、英國船、或は和蘭船の出入する港に行かないで、南京に連れて行つてくれ給へと、君に頼む理由は、實は此れが爲めなのだよ。君も知つて居る通り、英國船や、和蘭船の船長等は、正義の何たるとも知らないし、又神の法則と自然とが指示する如くに、自から處する道も知らないで、只粗暴で、傲慢、無禮で、加之自己の職務を誇り、自己の權力を了解せず、盜賊を罰せんとして、濫りに殺戮を行ひ、誣告された人を侮辱し、相當の糾問もしないで、有罪の決定を與へやうとして居るよ。恐らく我輩

が或る時機まで存命して居るなら、彼等の中の誰れかを相手とつて、其責任を問ふかも知れない、さうすれば、裁判はどうして行ふべきかといふ事、犯罪の證據の擧る迄は、何人をも罪人として取扱ふものではない事が、彼等に解るであらう。」

斯くて我は、此船こそ、彼等が攻撃したる、其船なれと告げ、彼等の小舟と戦ひたる一部始終と、その擧動の愚昧にして、卑怯なりし模様とを語り、又此船を購ひし願未と、和蘭人が之を我等に供したる方法とを述べ、且つマレイ人の手を假りて、船長を殺したる物語は、眞實なりと信すべし理由あり、又其船に乗りて逃げ去りしとも、亦眞實なれど、其人々が海賊となりしなどは、これ全く自家の捏造に出たり、彼等は突然我等に攻撃を加へ、我等をして止むなく抵抗せしめたり、宜しく其以前に事實を審査すべき筈なりと語り、且我等が正當防禦の爲めに、殺したる人々の血は、之を報復として、彼等に與へんと附言したり。

老人は此話を聞きて、痛く驚き、我等が北方に行かんとするは太だ可し、此船は宜しく支那將で之を買却し、而して他の船を買ふか、又は築造すること可からめ、假令や左程好ま船を得ざる様もせよ、君等と諸貨物とを乗せて、ハンゴール、若くは其他の場處に歸るに足るべき船を得らるべしと語りたり。

是に於て我は、若し此船に代ふべき一艘の船を得らるべき港に到るか、又は此船を買はばよ

る人に出遇はゞ、彼の勸告に従ふべしと言ひしに、彼は南京に到らば、此船を買ふべき買客數多あるべし、又支那の船も能く我が歸航の用に適するならん、而して船を買はんとする者も、又は買らんとする者も、何れも我がために周旋すべしと答へたり。これより我は、彼と左の問答をなしたり。

「さうかね、しかし君、君の言ふ如く、彼の人達は此船を熟知して居るから、若し君の策に従ふとすれば、正直な無罪の人々を、恐ろしい災害に陥れて、恐らくその人達が殘酷に殺害されることになるかも知れない。何故なれば、彼の船長等は此船を見付け次第に、是れが例の船だといつて、其乗組人に罪を負はせるだらう、さうすれば無罪の人が、多分壓制的に殺されるだらう。」

「成る程、それでは、私はさうならんやうにする方法を工夫させよう。私は其船長等は皆熱く知つて居ますから、彼等が此邊を通る時に面會して、必誤解を正して、彼等の過ちを悟らせませう。縱令最初此船に乗つて居た人達が、船を奪つて逃亡したにせよ、それが海賊となつたといふとは事實でない事や、殊に此人達は最初船を奪つた本人ではないのである、唯何も事情を知らないで、商用のために、此船を買つたのみである事を納得させませう、彼等も私を少しは信じて居ると思ひますから、さうすれば、將來はもそつと注意する様になるてせう。」

「それでは我輩の書面を、船長等に渡して呉れますか。」

「承知しました、貴君が直筆で書れるなら、それが私の考から出たのでない、貴君の心から出たといふ事を證明する事が出来ますから、さうして下さい。」

「それは容易いことから、直書の手紙を交付さう。」

斯くて我は筆墨紙を取寄せ、夫の長舟にて我を攻撃せし始末と、其理由の誣妄なると、其方法の不正にして殘酷なりしとを、大體記載し、且彼の船長等の行爲の、常に愧づべきのみならず、他日若し彼等が英國に來らんとし、我が尙ほ生存せば、國法が我が歸國前に廢止せられずんば、彼等は皆嚴罰を免るべからずと論結したり。

老人の水先案内は、再三之を読み、我は何處までも對抗せんと欲するやと、數回尋ねければ、我は此世に一物だもあらん限りは、これを論争せんとすと答へたり、蓋し他日本國に於て、彼等を相手取るの機會あらんかと思ひたればなり、然るに此水先案内は、再び印度地方に歸らざりしかば、此書を彼等に渡すべき時機はなかりけり。

かゝる中にも、南京を指して進航せしかば、凡そ十三日許りを経て、南京灣の西南端に投錨しけるが、此所にて圖らずも、二隻の和蘭船が、我の前に急行したるを知りたれば、今は必然彼等の手中に陥るべしと覺悟したり。此危急をば、如何にして免れんかと、組合員に相談せしむ

る人に出遇はゞ、彼の勸告に従ふべしと言ひしに、彼は南京に到らば、此船を買ふべき買客数多あるべし、又支那の船も能く我が歸航の用に適するならん、而して船を買はんとする者も、又は賣らんとする者も、何れも我がために周旋すべしと答へたり。これより我は、彼と左の問答をなしたり。

「さうかね、しかし君、君の言ふ如く、彼の人達は此船を熟知して居るから、若し君の策に従ふとすれば、正直な無罪の人々を、恐ろしい災害に陥れて、恐らくその人達が残酷に殺害されることになるかも知れない。何故なれば、彼の船長等は此船を見付け次第に、是れが例の船だといつて、其乗組人に罪を負はせるだらう、さうすれば無罪の人が、多分壓制的に殺されるだらう。」

「成る程、それでは、私はさうならんやうにする方法を工夫させよう。私は其船長等は皆熟く知つて居ますから、彼等が此邊を通る時に面會して、必誤解を正して、彼等の過ちを悟らせませう。縦令最初此船に乗つて居た人達が、船を奪つて逃亡したにせよ、それが海賊となつたといふとは事實でない事や、殊に此人達は最初船を奪つた本人ではないのである、唯何も事情を知らないて、商用のために、此船を買つたのみである事を納得させませう、彼等も私を少しは信じて居ると思ひますから、さうすれば、將來はもそつと注意する様になるてせう。」

「それでは我輩の書面を、船長等に渡して呉れますか。」

「承知しました、貴君が直筆で書れるなら、それが私の考から出たのでない、貴君の心から出たといふ事を證明するものが出来ずから、さうして下す。」

「それは容易いとだから、直書の手紙を交付さう。」

斯くて我は筆墨紙を取寄せ、夫の長舟にて我を攻撃せし始末と、其理由の証となること、其方法の不正にして残酷なりしことを、大體記載し、且彼の船長等の行爲の、實に愧づべきのみならず、他日若し彼等が英國に來らんとし、我が尙ほ生存せば、國法が我の歸國前に廢止せられずんば、彼等は皆嚴罰を免るべからずと論結したり。

老人の水先案内は、再三之を讀み、我は何處までも對抗せんと欲するやと、數回尋ねければ、我は此世に一物だもあらん限りは、これを論争せんとすと答へたり、蓋し他日本國に於て、彼等を相手取るの機會あらんかと思ひたればなり、然るに此水先案内は、再び印度地方に歸らざりしかば、此書を彼等に渡すべき時機はなかりけり。

かゝる中にも、南京を指して進航せしかば、凡そ十三日許りを經て、南京灣の西南端に投錨しけるが、此所にて圖らずも、二隻の和蘭船が、我の前に急行したるを知りたれば、今は必然彼等の手中に陥るべしと覺悟したり。此危急をば、如何にして免れんかと、組合員に相談せしむ。

彼も等しく當惑し、何處へなりとも上陸して、無事を計らんと言ひたれど、我は左程には狼狽せず、かの老水先案内に向ひ、支那人と密に取引するを得る所にて、而も敵の危険なき入江、若くは港灣なきかと問ひしに、彼は此所より南方凡そ四十八里を距て、キンチャンと稱する小港あり、基督教の初代宣教師等が、支那人の間に傳道せんとして、澳門よりの途次通例上陸せし所にて、此所は一隻の歐洲船も曾て入港したることなし、されど此所は商港には非ず、只或る時期に市場標のものを開くとあり、其時には日本商人が支那の商品を購はんとて、渡來するのみなりと語りたり。

我等は協議の結果、皆此地に戻らんと決定しけるが、さて彼の稱したる此港の名は、他の地名と共に、小さき手帳に記入し置きしが、不圖水に漬して失ひしかば、特に其名を記憶せず、故に恐らくはその發音誤り居るべしと雖も、我が通信したる支那、又は日本の商人は、夫の水先案内の唱へしとは異なる名稱を用ひ、上の如くキンチャンと呼びたりと記憶す。

我等は此港に行かんと、一同決心して、その翌日投錨せしが、これより先き飲用水を得んとて僅に二回こゝに上陸しけるに、此地の人民はいつも禮儀厚く、食料、野菜、根類、茶、米、鳥などを許多持ち來れり、但し金錢に代へざれば、何物も得られざりき。

風向不順なりしたため、五日の後までは、彼の港に到着すると叫はざりしかども、我等の満足は

一方ならず、我足の安全に海岸に着きしとき、我の喜例ふるに物なかりき、寧ろ感謝したりと謂ふも可なり。言ひ合はさねど、我も我組合員も、如何なる方法なりとも、己が一身の振り方をつけ、貨物を賣却するとだに叶はざり、假令充分の満足を得ずとも、最早此不吉なる船には、決して再び足を入れまじとぞ決心しける、嘗て我が経験せる人生の種々なる境遇の中、絶えず恐怖しつゝあるほど、實に人をして不幸ならしむるものはあらず。宜なる哉、聖典に言へるあり、人を畏るれば器におちいる（聖書の言、箴言二十九章二十五節）と、夫れ恐怖は死の生活なり、精神全く之がために壓迫せられ、これを救ふの道一もあるなし、他の艱難に處しては、能く人を支持せしめ、最大の危難に際して沮喪せざる精力も、元氣も、これがためには銷沈するを常とす。

我等の海上に在りし間は、苦憂心痛いと多大なりしが、その上陸せし時の満足も亦その割合に多大なりき。我組合人は、一夜夢を見たりとて、語りけるやう、彼は重荷を負うて山に登らんとし、殆んど堪へ難かりしとき、葡萄牙人の水先案内來りて、其重荷を下し呉れしが、その山は忽焉として消失せ、その前程全く平坦となれりと、眞に然り、我等は皆重荷を下せるが如き心地をむなしける。

我等が上陸するや、最早我等の朋友となれる、かの老水先案内は、宿舍と貨物を入れるべき倉庫とを具へ呉れたり、倉庫とても、宿舍と大なる相違なく、それに接したる一大家屋にして、悉く

華にて造り、周圍に柵を繞らせり、此地には、小盗少からずと見え、之を防がん爲めなり、されど當地の官吏より番兵を置くことを許し呉れたれば、一種の槍を携へたる兵士を戶外に置き、三四合の米と、一日三片位の割合にて、少許の金を之に與へし故に、我等の貨物は、いと安全に保管せられたり。

此地に常に開かる、市日は、既に過ぎたれど、尙ほ河に三四艘の支那船と、二艘の日本船浮び居れり、此日本船は、支那にて買入れたる貨物を、既に搭載し居りしも、日本商人が上陸中なるため、未だ港を去らざりしなり。

さても葡萄牙人なる老水先案内は、先づ我等を、三人の羅馬教の僧侶に紹介して、懇意を結ばしめたり、此人々は、暫く此地に在りて、布教し居りしが、其事業甚だ不振の有様なりき、されど兎角の批評を加ふるは、我が事には非ず。其中の一人は佛蘭西人にして、長老シモンと呼ばれ、風采快活にして、胸襟を開て善く談じ、他の二人の如く嚴格ならざりき。他の二人の一人は葡萄牙人にして、一はゼノア人なり、長老シモンは鄭重淡泊にして、甚だ愉快の人なりしが、他の二人は寡言嚴肅にして専ら職務に身を委ね、機會ある毎に、住民と談話し、次第に之に接近せんことを努め居れり、我等は此等のの人々と屢飲食を共にしたり。

さる程に、此佛蘭西の僧侶長老シモンは、教會の首長の命を受けしと見え、支那帝國の首都たる北京に行く事となり、澳門より来るべき同行の僧侶を待ち居りしが、彼は我等と會合すると稀なりしも、我に共々旅行の途に上らんことを勧め、此大帝國の宏大なる事物を我に示すべし、歐中北京は世界の最大都會にして、貴國のロンドン、我パリを合するも、未だ之に比するに足らずと云へり、包まず述べれば、此北京は頗る宏大にして、人口稠密なりと雖も、私の觀察は自ら他人と異なるを以て、後に旅行談に移りしとき、特に其事を語り、且我意見をも述べべし。

されど先づ夫の宣教師の許に行きし事より始めん、一日シモンと會食し、甚だ樂しかりしかば、彼と同行の意なきに非ざることを漏しけるに、彼は我と我組台人との迫り、種々に勸告して、同行を承諾せしめんとせり、是に於て彼我の間に種々の談話は交換せられたり。

組台人「シモン君、何故君はそんなに我等の同行を望まれるのか、君の知らるゝ通り、我等は異教徒ですから、君は我等を愛し、我等と愉快に交際することは出来ませぬ」

シモン「嘘、君は恐らく早晩善良な舊教徒となるかも知れない、我が本務は、異教徒を改宗させるのである、君等をも改宗させることが無いとも云へないです。」

「さうですかね、それでは君ほどの道我等に説教するのてせう」  
シモン「我輩は君等を煩はしますまい、我等の宗教は、美風、良俗を奪ふものではない。此處では御同様に同郷人の様であるから、居る場所にもよるので、君等は新教徒で、我輩は舊教徒

だけれども、我等は畢竟皆基督教徒で、少くも我等は皆紳士であるから、互に心措なく談話するとも出来るのです。」

彼の談話の中、此一段はいたく我意に叶ひたり、此に就きブラジルに遣し置きたる、かの僧侶の事を想ひ起しけるが、シモンの人格は遙かに彼には及ばず、シモンは罪とすべき軽卒の風なけれども、彼の僧に見るが如き熱心と、敬虔と、宗教に對する誠實の愛情とに缺くる所あり。

シモンは決して吾等と往來を絶たず、又同行を強ふることもなかりしが、此事は暫らく之を置き、我等は先づ第一他に處置すべき事あり、即ちかの船と商品との處分これなり。されども商業のいと少なき場所なれば、これを如何にすべきか、甚當感したり、一度はキラム河を溯りて、南京市に行かんかとも思ひしかども、不思議や常よりは神の冥助の一層いやちなる如く覺え、此時より心振ひ起ちて、如何にもして此複雑なる境遇を脱し、假令些の見込なしとはいへ、再び我故國に歸らんと思ひ起したり。かくて時々此事を考へしが、如何なる方法によりて、之を成就せんか、そは未だ想像すると叶はざりしが、幸に神の攝理により、此頃より我が前途に、少しく光明を放ち始めぬ。先づ其端緒と認むべきは、かの葡萄牙の老水先案内が、一人の日本商人を伴ひ來れるに在り、其商人は我等が所有する貨物を問ひ、先づ我鴉片を悉く高價に買入れ、金塊と自國の小貨幣と、幾分は目方各十「オンス」乃至十二「オンス」位の小さき貨幣とにて其價を拂

ひたり。斯く阿片を取引しつゝありし間に、彼は恐らく我船をも買ふことやあらんかと思ひ浮びたれば、通辯をして此由を申込せしめしに、彼は初め之を聞きて、肩を縮めけるが、數日の後、彼は一人の宣教師を通辯として伴ひ來りて言ひけるは、船を買はんとは少しも思はざりし前に、既に多額の貨物を買ひたれば、今は船を買ふべき金を剩さず、されど若し今の乗組員をして、此船にて航海せしむるを得ば、此船を雇うて、先づ日本に行き、其處より他の貨物を積みて、彼等をフィリッピン群島に遣はさん、但し日本を出發する以前に、其積荷の運賃を拂ふべし、而して彼等の歸るに及んで、船を購はんと、我はこれを聴くや、漫遊の志望勃然として胸裡に湧き、自ら彼と共に行き、フィリッピン群島より、更に南洋に航せんとの念慮禁ずると能はず、依て此日本商人に向ひ、フィリッピン群島まで我等を雇ひ、同島にて解雇し呉れまじきやと問ひしに、彼言ひけるは、否、斯くては貨物を送還すること叶はざれば、其船の歸るに及び、日本にて我等を解雇すべしと答へたり。

さて此事の始末は長々しければ、之を約めてその局を結ばん、是に於て先づ第一に爲すべきとは、船長と其部下の船員とに相談し、日本に行くことを望むや否やを知るにあれば、我は此手續をなしつゝありし折柄、前に言ひし如く、我甥が旅行の伴侶として、選し置きたる一青年、我許に來り、此航海は甚だ有望にて、大に利益を得べき見込あり、幸に之を思ひ起ち給はと、いと



悦ばしけれど、若しさもなれば、彼に許可を與へ給へ、一個の商人として、彼地に行かんとは欲するなり、貴意如何にぞや、かくて他日英國に歸りしとき、我尚ほ生存し居給はば、其成蹟に關する計算は、誠實に之を爲すべしと申出したる、是れ恰も我成功と等しく、我が甚だ悦ぶ所なりけり。

さても彼と袂を別つことは我の厭ふ所なりしかども、多大なる利益を得べき見込もあり、且彼が有爲の青年なるを思ひて、此願を許さんとせしが、先づ彼に對しては、我が組合人に計り、翌日返答すべしと告げ置き、やがて我は組合人と相談せしに、彼は最も寛大に陳べて言ひけるは、

「君の知つて居る通り、これは不吉な船なので、御同前に、再び之に乗つて、海に行くまいと決心したのだから、若し君の執事が、航海をやつて見やうといふなら、我輩は此船の株を彼に與へて、充分やらせて見やう、而して若し我々も無事に英國に歸り、彼も海外の成功を荷つて歸つたならば、彼は船賃の利益を、半額我等に仕拂ひ、半額は自身の所得とすればよろ

し。

といひたり。我組合人は、此青年と何等の關係なきに、斯く言ひ出たれば、我も勢彼に對して同様の申出をなさざるを得ざりき。かくて又、船員等も皆彼と共に行かんと望みければ、茲に此船の所有權をば、過半彼に渡し、彼より一通の書附を取り、他日計算を爲すべき義務を負はし

めければ、彼は程なく日本に向けて出發したり。然るに夫の日本商人は、いと正直なる人にて、堅く約束を守りしのみか、日本に到着せし後も、よく青年を保護し、當時は概して歐洲人に許さざりし、上陸免狀を彼に得せしめ、其船賃をも、約束通りこれを仕拂ひ、次て又日本と支那の貨物を、船に積みこみ、且自國人なる一人の荷物方を、之に乗組ませて、青年をフィリッピン群島に遣はしけるが、此の荷物方は西班牙人と取引し、再び歐洲の貨物と、外量の香料とを携へて、日本に歸りければ、青年は多額の船賃を貰ひ受けたる。而して其當時、船の賣價高かりしかども、青年は船の賣却を好まざりしかば、日本商人は青年の持歸りし、香料と貨船とに對し、或日本の貨物を彼に供給せしを以て、青年は之を積



みて、マニラに歸航し、その船荷を高價に賣捌きたり。さても又彼は、マニラに於て、好き知己を得たりしかば、遂に其船を自由船と爲しのみならず、會マニラ總督は彼を雇て、米國メキシコ海岸のアカバルコに赴かしむるとし、彼に一通の免狀を與へたれば、其地に上陸し、それよりメキシコに到り、そこより船員等と共に、西班牙船に乗り込みて、歐洲に歸るとを得るとはなれり。

かゝりければ彼は、豫定の如く、アカバルコまで、いと愉快に航海し、其處にて船を賣却し、それより又ベルロ港まで陸行するの許可を受けしかば、兎角して其財貨をば、一切携へて、西印度諸島のジャマイカ島に達し、凡そ八年の後、非常に富裕の身となりて、英國にを歸りける。却て説く、我等は當時船と船員一同とに別るゝに臨み、嚮にカムボチア河に於て、我等に危難の迫れるを、密告し呉れたる、かの二人に對し、如何に報酬せんかとの思考、自然に我等の胸に浮び來りたり。此二人は實に多大の功勞あり、且つ部下として、善くその任に堪へたり。勿論二人の者が、初め我船に乘込みしは、我等を以て、海賊となせし風説を信じ、且船を奪ふて、逃走したりと思ひし故なれば、實に我等の爲めに密告せんとせしのみにはあらず、自己等も海賊として、共に海に行かんと欲したるなれば、此二人も亦兇漢に外ならず、而して其一人の如きは、その初め我が船に投じたるは、全く海賊とならんと希望に外ならずと、後に至りて明言したれど、

その功勞少からざりしかば、我は嚮に約束したる如く、彼等が嚮に乘り居たる船にて受くべき金額を、先づ彼等に仕拂はしめたり、即ち英人に九個月分、和蘭人に七個月分の給料を渡し、其外に、各金貨少許を與へしかば、彼等は頗る満足の意を表したり。かくて又之に次ぎ、此英人とは、船の砲手と爲し、和蘭人をば、水夫長と爲しければ、兩人は大に喜びしが、此兩人は何れも有爲の水夫にして、且つ強健なる壯丁なりければ、爾後その功勞また多大なりしといふ。

我が觀測によれば、當時我が居りし所は、支那の中心にして、凡そ北緯三十度に位せり。我は北京市の事に就ては、既に度々噂を聞き居たれば、之を見んと欲ししのみか、シモンも日々之を我に促せしが、終に彼が出發の時日定まり、又同行すべき宣教師も、澳門より到着せしかば、我等はこれと同行するや否やを決定するの必要に迫れり。されば我は、之を組合人に計り、其取捨を彼に一任しけるに、彼は竟に同行すべしと決定したれば、我等は彌旅行の準備にぞ取掛りける。斯くて我等は或る便宜を求め、一人の大官の一行に加はりて、旅行するを許され、その便利甚大なりき。大官とは總督に類する顯官にて、その地方人民に臨む威儀盛大を極め、其の旅行には、多數の從者を引連れ、沿道の人民より、尊敬を受くること甚だしかりき。

我等は、北京への旅行に、二十五日間を費しけるが、沿道の地方を見るに、無數の住民あるも、土地の耕作見るべきものなし、土地の者共は人民の生業に就て誇りしも、農業も、經濟も、生活

の方法も、皆憫れむべき状態なりき、憫れむべき状態と云ひしは何故ぞ、凡そ他國を知らざる可憐の貧民に取りては、然らざるべしと雖も、我々の如く苟くも生活の方法を了解する者にして、之を本國の状態に比較すれば、斯く言ふも可ならん。

さて我等は、竟に北京に到着しけるが、當時我が伴ひゆきしは、我甥が従僕として我に與へし青年のみにして、彼は甚だ勤勉にして信用ありたり。我組合人は、其親族なる一僕の外には、何人をも伴はざりき。又かの葡萄牙の水先案内も、皇宮を見んとを願ひければ、同行の報酬として、我等に於て其旅費を負担したり、蓋し彼は此國の語を了解し、佛語を巧に話し、英語にも少しく通じ居たれば、之を通辯に使用したり、如何にも此老人は、何處に居るも、我等に取りて、最も有用なる人物なりき。北京に來りて未だ一週間を経ざる頃、一日彼は笑ひながら入り來りて、

「あゝ英人君、貴君に話すとがあります、貴君は悦ぶてせう。」

「我輩の心を喜ばせると、それは何かね、我輩は此國では、我輩を大に喜ばせるものも、或は大に悲ませるものもあるまいと思ふ。」

老人は片言交りの英語にて、

「さうです、さうです、貴君を喜ばせて、私を悲ませる事です。」

と言ひければ、尙更其理由を尋ねんとの念切にて、

「何故君を悲ませるかね。」

と問ひしに、

「何故かといへば、貴君は二十五日の旅程を費して、此處に私を伴て來られたが、私を獨りて歸すのでせう。私は船もなく、馬もなく、又金もなして、如何して我港に行きませうか。」と言ひしが、彼は未熟の羅旬語を交へて、金の事を「ベキニン」と云へり、彼の羅旬語は屢我等を失笑せしめたり。

要するに、彼の語る所に據れば、當市に滞在在中なる、モスコビイ(露西亞)とポトランドとの大隊商あり、四五週内に、陸路モスコビイに向け出立せんと、準備中なれば、我等も必ず此機を逸せず、此隊商等と同行し、彼を跡に残して、只一人歸らしむるならんと云へり、我は此報告を聽きて實に驚き、喜悅密かに満腔に溢へ、その趣き筆紙に盡し得べからず、かゝる感想を起したると、空前絶後と稱すべく、暫しが程は老人に對し、一言も發するの力なかりき、されど終に彼に向ひ、

「君は如何してその事を知つたか、それは確實かね。」

「然です、今朝市街で奮知己のアルメニア人に遇ひましたが、彼は近頃アストラカンから來て、一旦は東京に行かうとしましたが、又方向を轉じて、此隊商と共に、モスコウ府まで行き、

それからヴォルガ河を下つて、アストラカンに行かうと決心したのださうです。」  
と、我は彼に向ひ、

「君心配するな、我輩が此いふ方法で歸國するとすれば、君は澳門に歸るのは、全く間違だ。」  
と言ひ、それより我等は如何せんかと協議し、さて我組合人に、水先案内の報告に就き、如何に思ふかと問ひしに、彼は唯我が欲するまゝになすもよろし、是れより先き彼は、ベンゴールに於て善く業務を整理し、或る好人物に委託し置きたる故、既に此處に來りたる上からは、若し支那の製糸と生糸とを買ふとを得ば、こゝより英國に行き、それより會社の船に乗りて、ベンゴールに歸航するも差支なしと答へたり。

斯く決定したれば、若し葡萄牙の水先案内が、我等と同行せんと言はじ、モスコウまでも、或は英國までも、彼の好むがまゝに、其費用を支拂ふべしと協議一決したり。かゝる待遇を彼に與ふるとも、若し更に報ゆる所あるに非ずんば、過分の處置とは謂ふ可らず、彼が我等に盡したる功勞は、實に之に相當すと云はんより、之を以ては尙ほ報ゆるに足らずといふべし。蓋し彼は海上にて水先案内たりしのみならず、陸上に於ては、我等の爲めに仲買人の如く働き、夫の日本商人を紹介して、數千圓の金を我等に得せしめたり、故に我等は之に就て協議し、彼を満足せしむるは、正當の事と思ひ、且彼は萬事に必要の人物なれば、或等と共に伴ひ行かんと欲し、彼に千

七百五十圓許りの金貨を與へ、且彼の旅費と其駄馬一匹の費用とを辨ずることゝはなしぬ。

斯く協議整ひたれば、我々の決意の程を、彼に知らせんとて彼を呼び、我は彼に向ひていふやう、先きに只獨り歸らしめんかとして、彼は心配せしが、彼の元來りし途へ引還さざらんやう決せり、そは他にあらず、我等は隊商と共に、歐洲に行かんと、既に決心したれば、彼も我等と同行せんことを願はしければ、彼の意見を聞かんとて、呼びたるなりと語りしに、彼は頭を掉り、そは長き旅程にて、之に支拂ふべき金銭もなし、且は彼地に着くも、生活の道なしと言ひければ、我等も斯くあるべしとは、兼て期し居たれば、彼が我等の爲めに盡したる功勞を認め、且はよく我等の氣に適したる故、幾分の事を、彼の爲めに爲すべしと語り、かくて我等が彼に與へんと、既に決したる金額を告げ、さて其金は我等が自己のものを使用すると同じく、彼も之を自由に使用し得べし、又其旅費に就ては、若し我等と同行せんには、其貨物の運賃の外は、悉く我等これを負擔して、モスコウにせよ、英國にせよ、彼の望む處に、伴ひ行かんと語りたり。(但し生命及災難は別として)

彼はこれを聴き、欣喜雀躍し、直に此提言を承諾し、我等と共に何處迄も旅行するも苦しからずと言ひぬ。斯くて我等は、旅行の準備に取かかりしが、他の商人等も同じく準備に忙はしく、且その用事意外に多くして、五週間はあるか、諸般の準備を終るまでには、四個月餘を費した

北京を出立したるは、我等の曆法にて二月初旬なりしが、是れより先き我組合人と老水先案内とは、最初我等が入港せし地に残し置きたる貨物を處理せんため、其地に行きぬ、我も亦會て知人となれる一人の支那商人が、商用にて北京に來りしに邂逅し、此商人と共に南京に行き、美麗なる緞子九十反、絹布凡そ二百反を買ひたり、其絹布は數種あり、中には金線を交へたるものもあり、此等の品は、我組合人の歸らざる中に、悉く北京に運搬したり。此外に、多額の生糸と、その他の貨物を買ひたれば、此丈けにても、積荷は約三千五百封度に達しけるが、これと共に茶、金巾、肉豆蔻、丁子を十八頭の駱駝に負はせ、其他乗用の駱駝あり、二三頭の豫備馬あり、食料を積みたる二頭の馬あり、即ち合計二十六頭の駱駝と馬とが、我等の行列に加はりたり。同行者の數甚だ多く、我記憶する所に據れば、馬の數二三百頭、人員百三十人以上あり、孰れも武器を携へて、萬一に備へたり。そは東方の隊商が動もすれば、亞刺比亞人に襲はるゝ如く、此地の隊商は鞑靼人に襲はるゝとあればなり。されど鞑靼人は亞刺比亞人の如く恐るべき者にも非ず、又假令敵を克服したる場合にも、左程に野蠻の行爲もなかりき。さて我等が、既に一日程を旅したる時、五人の案内者等は、此一行に加はり居る紳士と商人、即ち從僕を除く外の旅客を、悉く一所に招集して、所謂大會議を開きけるが、此會議にて各自

金圓を融出して、これを共通資金とし、之を以て飼草を買ひ、案内者の爲めに便宜を計り、且馬を獲るの費用に充つると定め、所謂旅行隊なるものを組織し、一朝襲撃を受けたる際には、號令を發すべき隊長並に士官を設け、各自順番にその指揮を司るとなどを定めたり、これ途中にその必要ありと認めなければなり。

かくて我等は所謂萬里の長城を通過したり、此は鞑靼人を防がんとて、築きし非常の大築壁にて、山岳を踰え、谷に跨り、岩石の渉るべからざる所も、天嶮の攀づべからざる所も、或は敵兵にして、若し此峻岨を越えなば、城壁の之を防ぐと能はざる所も、蜿蜒として絶ゆる所なし。人々の語る所に據れば、其延長幾んど一千哩あり。迂餘曲折する所を除くも、此城壁を以て境する所は、實に直径五百哩に亘り、其高さは凡そ四尋にして、或る場所にては、厚さも亦之に等しと云ふ。

英國のノウサンバアランド縣に、ピクツの城壁と稱する、著名なる城壁あり、こはその昔イングラントが羅馬帝國の領地たりし頃、スコットランドなるピクツ人の侵入を防がんとて、羅馬人の築造したるものなるが、それと稍同様なる、此宏大にして無用なる城壁を通過せし後は、人煙次第に稀少となり、住民は鞑靼人の侵入掠奪を恐れ、城壁にて圍める都邑の内に籠居せり。蓋し鞑靼人は、大軍隊を編制して、所在を掠奪するが故、平地に住居して、武器なき人民は、之に抵

抗すると叶はざればなり。

茲に韃靼人が、隊を成して徘徊せるを、數回目撃せしかば、我は旅人が隊を組みて、互に團結しつゝ旅行する必要を悟りたり。されど彼等韃靼人を熟視するに及んで、我は更に驚きたり、そは支那帝國が、此る賤劣なる奴輩の爲めに蹂躪せらるゝ事なり、彼等は只野民の群集に過ぎず、秩序もなく、規律もなく、又戰術の何物たるを解せざるもの共なればなり。

彼等の馬は餓て瘦せ衰へ、毫も訓練なく、何の益にも立つべからず。我等が荒野に入りし後、初めて彼等を見て、何れも斯くは評し合ひぬ。さて其日の事なりき、我等の一行中十六人許の者共が、首領の許を得て、所謂狩獵をなせり、そは何ぞといふに、羊を狩るに外ならず、されど之を狩獵と稱するも可ならん、此等の羊は我が嘗て見たる羊の中最も荒くして、走すると飛ぶが如きも、遠く走らざれば、何人にもこれを射止むると難からず、此羊は概して三四四つ、一群を成し、その走るや、歐洲の羊の如く常に集合し、離散するとなければなり。

此く奇異なる遊獵を爲せる折柄、不意に四十人許の韃靼人に出會ひたり、彼等も我等と同じく羊を獵り居りしか、又は他の獲物を求め居りしか、我はこれを知らねど、我等を見るや否や、その一人が角笛の如きものを吹き鳴らせり、其音は高かりしかど、一種の聲調を帯び、我は未だ會て此る音調を聞きしとなく、又再び之を聽かんとをも願はず、我等はこれを聽き、こは同類を呼

集むる爲めならんと想像せしが、果してその如く、未だ時の十二三分も経ざる内に、四五十人許の一隊が、凡そ一哩を距つる地點に現はれ出てたり、されど此事の起りしとは、我等は既に狩獵を了はりたり。

此時偶スコットランドの出身にてモスコウ府に住せる一商人、我等の中に在りしが、此角笛を聴くやいなや、我等に向ひ、一刻も猶豫なく、直に彼等を攻撃するの外他に爲術なしと告げ、且つ我等を一行に並べて、決心の程を問ひたり、我等は之に對し、皆彼に従て進撃すべしと答へしかば、彼は直に馬を驅つて、韃靼人として進行せり。此時まで彼等は毫も秩序なく、雜然たる一群集の如く、我等を望見して、佇立し居りしが、我等の進行するを見るや否や、矢を放ちたれど、幸にして皆中らざりき、こは狙を誤りしには非ず、其距離遠かりし爲めなりと覺ゆ、蓋しその矢は皆少しく我等に達せざりしも、其狙ひ正確なりしを以て、若し更に六十間近くありたらんには、假令死者なくとも、必定數人の負傷者を出したるならん。

是に於て、我等は直に停まり、其距離尙ほ遙なりしも、敵に向て發砲し、木製の矢に報ゆるに、鉛製の彈丸を以てし、次て全速力にて馬を驅り、劍を掲げて猛進したり、こはかの大膽なるスコット人が、かくと揮揮せしに依るなり。實に此スコット人は、一商人に過ぎざれども、その行動勇猛剛氣にして、善く此機會に處し、而も沈勇にして、將帥の器量を具備すると、我の未だ會て

他にその比を見ざる所なり。かくて彼等に近づくや、我等は短銃を其面前に發射し、然る後拔劍しけるに、敵は甚く狼狽して遁走せり、只僅に踏留まりしは、我等の右側にありし三人の敵のみにして、手に劍を握り、背に弓を負ひつゝ、頻りに敗兵を呼戻さんとせしが、我剛勇なる指揮官は、單騎挺進して敵に迫り、小銃を以てその一人を馬より打落し、短銃にて第二の者を射殺しければ、第三の者は一散に逃げ去り、是にて争鬪は終りたり。されど一の不幸は、之に伴へり、即ち先きに捕獲せし羊が、これが爲め悉く逃げ失せたる是なり。さて此鬪争中、味方には死傷一人もなかりしが、鞑靼人には五人許りの死者あり、負傷者は幾人なりしか之を知らず、されど兎に角他の黨類は、我銃聲に恐れて逃去り、遂に少しも襲撃を加へざりき。



さて此襲撃に會ひしは、支那の領内なりければ、此等の鞑靼人は、其後に於けるが如く、兎もなきに、それより凡そ五日を経て、南大沙漠に入、之を通過するに、三日三夜を費しけるが、飲料水は、夫なる草囊に盛りて、之を携へ、終夜野營を張りたる、その趣きは、恰もアラビアの沙漠に於けるが如くなりけり。

此邊は、何國の領地なりやと問ひしに、人の語るやう、こは國境の如きものにて、無人の地と稱するも可なり、實は大鞑靼の一部なれど、支那領と見做さるゝとぞ、されど盜賊の侵入を防ぐべき設備なきを以て、假令我等の前程には、尙ほ二層大なる沙漠あるも、こは世界中の最悪の沙漠と謂ふべし。

此沙漠を通過する時、我に取りて先づ最も怖ろしかりしは、二三度鞑靼人の小團體に出會ひしとなり、されど彼等は自家の用事の爲めに、往來せるにて、我等を襲撃するの企圖はなかりしもの、如し、されば恰も悪魔に出會ひしが如く、彼等も此方に對して、何事も言はず、彼等も亦何事も言かけずして、打捨置きたり。

されど或時は彼等の一隊が、いたく接近して、此方を眺め居たり、果して何事を爲さんと欲せしにや、我等を攻撃せんとせしにや、又は否らざりしにや、不明なりしが、此方は少しく距離を

保ちて通過し、四十人の殿兵を設けて之に備へ、かくて隊商は凡そ半哩程も前進せしに、やゝ暫らくにして立去りしが、其去るに臨み、五矢を放ちて、我等に餓となしぬ、其一矢は一頭の馬を傷つけ、馬はこれがため終に用を爲さざることとなり、憫れにも翌日斃れたり、思ふに彼等は尙數多の矢を射かけしならんが、此方には達せざりき。

其より殆んど一ヶ月の間旅行せしが、尙ほ依然として支那皇帝の領土内なりしと雖も、道路は初の如く宜からず、又沿道の人家は、大概村落にして、鞑靼人の侵入を恐るゝにや、往々城壁を構へたるもありたり。

ナウム市は、支那帝國の邊境に在り、土人は之を呼んで城市と稱す、如何にも防備ある市には相違なし、されど數百萬もあらん鞑靼人が弓矢を以て、此城市を破壊し得ざりしにせよ、大砲の攻撃にも能く堪得べしと言はゞ、少しく事理を解する人は、誰とて失笑せざるものあらんや。

さる程に此市まで尙二日以上の旅程を距つるとき、沿道の各所に使者を送られ、此市を距る凡十そ三哩の地に、鞑靼人の尋常ならざる、一隊現はれその勢凡壹萬人あり、故に旅人と隊商は皆護衛兵の派遣せらるゝまで、宜しく停まるべしと告げ知らせたり。

こは旅行者にとりて、甚不吉なる報告なれど、知事の注意に出でしなり、兎に角護衛兵を送らるべしと聞きて、一行の者は皆大に喜びぬ、かくて二日の後、左方なる支那の一軍營より二百人ナウム市より三百人餘の兵士來りたれば、我等は之と共に大膽に進行せり。ナウムより來れる三百人は、先頭に進み、二百人は殿軍として其後を擁し、我等は荷物を負ひたる駱駝の側に附添ひ、隊商の全體はその中央に位し、此く隊伍を編制して、戰陣の準備を爲しければ、今は假令一萬の鞑靼人現はれ來るとも、恐るゝに足らざと思ひける、されど翌日彼等の現はるゝに及び、事實は全く案に相違したり。

さても詰旦に、その位置宜しきを得たる、チャングと種する一の町を経て、一河を涉りせざるを得ざりしが、鞑靼人にして、苟くも、才智ありなば、此時にこそ我等を襲撃せしならんに、遂に其事なかりしは、誠に幸なりき、蓋し隊商は既に河を渡りしも、殿軍は未だ此岸にありたればなり。それより三時間許りの後、廣袤凡そ十五六哩の沙漠に踏みこみしとき、遙かに沙塵の捲き揚るを見て、敵の近くにあるを知りしが、果して彼等は馬を驅つて近々と進み來りぬ。

敵の一隊は、其數算るべからず、幾何なりしか知らざれど、少くも一萬はありしと思はる。かくてその中の一隊は、最先に來り、此方の前面を横ぎりつゝ、我等の情勢を偵察せしかば、その彈着距離の内に來るや、我隊長は速に進んで敵の兩翼を銃撃すべしと號令しければ、その如く之に一齊射撃を浴せしに、敵は退却したり、これ思ふに此方に應戰の用意あるとを報告せん爲めなりしならんも、また大に恐怖せしと見え、暫時停りて考ふる所ありしが、遂に襲撃を見合せ、



左方に廻轉し去れり。此方とても、斯る大軍を相手に戦ふことを好まざれば、却て之を僥倖とは思ひたり。

その後二日を経て、我等は漸くナウン、或はナウムと稱する該市に到着し、知事に對し、その保護の厚きを謝し、一百「クラウン」評の金を贈出して、之を彼の護衛の兵士に贈り、此處に一日間休息したり。

其後數度大河を渡り、二個の荒涼たる沙漠を越えしが、此沙漠の一は、之を通過するに、十六日を費し、實に「無人の境」と稱すべきものなりき。かくて四月十三日に露西亞領の境に達せしが、此領内に入りて、第一に着したる所は、市と云はんか、町と云はんか、或は嶺と云はんか、そは兎もあれ角もあれ、露西亞皇帝の所領にして、アルガンと稱し、アルガン河の西側に位せり。我等は無事にシヤラウエナ市に達せしが、此處には露西亞兵の一屯營あり、隊商は前日の困難なる進行と、夜中休息せざりしとに依り、非常に疲勞したれば、五日間此處に休息したり。

此市より先に恐るべき一の沙漠あり、之を通過するに二十三日を要しければ、我等は夜間の便を許りて、天幕を用意し、又隊商の首長は、飲料と食料との運送に供する爲めに、土地の車十四輛を買入れぬ、此車は毎夜露營の周圍に並べて、防禦の用に供しける故、若し鞑靼人現はれ來るとも、極めて多勞ならざれば、我等を害するとは叶はざりしならん。

此長き旅行の後、復再び休息を要するとは、何人も想像するならんが、實に此沙漠には、家もなく、木もなく、灌木すら稀なり、只所謂貂鼠獵隊なるものを數多見しが、此等は皆蒙古鞑靼の鞑靼人にて、往々小隊商を攻撃する由なるも、曾てその木群集を見ざりき、此地方は即ち蒙古鞑靼の一部なり、我は彼等の捕獲せる貂鼠の皮を見んものと欲ししかど、その何人とも一回も言語を交ゆると叶はざりき、そは彼等は敢て我等に近寄らず、我等も亦列を離れて、敢て彼等に近寄らざりければなり。

此沙漠を過ぎし後、漸く人家多き地に來れり、此地には町もあり、城もあり、又鞑靼人の防禦と、隊商の保護との爲めに、駐在せる兵士の屯營もあり、露西亞皇帝は隊商と旅客を善く保護せんとて、此地方に嚴命を下し、若し國內に鞑靼人出沒するの噂あれば、分隊を派遣して、旅客を甲地より乙地まで護送するを常とせり、故にかのスコット商人の紹介によりて、我が一度訪問せしアヂインスコイの知事は、若し危険の虞あらば、五十人の衛兵をして、我等を次の驛まで護送せしめんと言ひたり。

此邊の地方に於ては、こは特異なりと思ふものをも見ざりしが、此地は前に述べたる沙漠と距つると少くも四百哩もあらん、其半は又他の沙漠にして、之を經過するに、十二日を費し、その行程甚難澁にして、家屋もなく、樹木もなく、また灌木もなく、止むを得ず復々各自その食

料と飲料とを運搬したり。さても此沙漠より出て、二日間旅行せし後、露西亞の一市エニセウス  
 列に着しぬ、此市は同名なる一大河の邊にあり、此河は歐亞兩洲を分界するものなりとぞ。但し  
 我が地圖の製作者は、此説に同意せざれども、古代西比利亞の東方の境界たるを疑ふべくもあら  
 ず、古代の西比利亞は、現今の露西亞帝國の一州に過ぎざれども、其大さは、實に日耳曼帝國  
 の全領土に等し。

されどその人民の狀態を察するに、露西亞の衛戍兵を除く外は、尙ほ蒙昧にして、蠻教を奉ぜ  
 り、オビ、エニセイ兩河の間に居る人民は、最も遠き地に住む韃靼人と等しく、全く野蠻にして、  
 蠻教を信ぜり、實に此憐れむべき異教徒は、露國政府の治下に在りたりとて、一段文化に浴せり  
 とも覺えず、又更に基督教に近づけりとも見えず、我は露國の知事等に會談する機會を得る毎に、  
 此事を告げしに、彼等も亦充分之を認めれども、そは彼等の務にはあらず、若し皇帝にして、そ  
 の臣民たる、西比利亞人、或はトングース人、若くは韃靼人を改宗せしめんと望み給はば、此所  
 に兵士を送らずして、僧侶を遣はし給はば、その事蓋し成就するならんと言へり、且我が豫期せ  
 しよりも一層誠實に、附言していふやう、陛下の御心を惱まし給ふ點は、人民を基督教徒と爲す  
 よりも、寧ろ之を臣下と爲さんとするに在りと。

此河よりオビの大河に至るまでは、莫々たる未墾の原野なれど、不毛の地とは云ふべからず、

只住民稀少にして、管治宜しきを得ざるのみ、左なくんば最も愉快にして、豊饒なる樂土となる  
 べし。我等の目に觸れし住民といふ住民は、露西亞より派遣せられし者の外、皆悉く異教徒なり、  
 蓋し此地はオビ河の兩側に在りて、露國の犯罪者中、死刑に處すべからざる者を追放する所にし  
 て、一度此所に讒せらるれば、再び脱出すること、殆んど叶ふまじとぞ。

それより西比利亞の首都、トボルクに達せしまでは、自家の用務に就き、一も語るべきもの  
 なけれども、此所に於て、左に掲ぐる事の爲めに、暫く滞在する事となりたり。

我等は既に殆んど七個月間旅行し、時季漸く冬に近づきければ、我組合人と我とは、自家の事  
 に就き相談を開きぬ、こは我等は英國に行かんとする者にて、モスコウに行くに非ざれば、此際  
 如何にすべきか、その方法を計ること適當なれと思ひしが故なり。士民等は冬期には雪の上を旅  
 行するため、橇車と馴鹿あるを話せり、如何にも此の如き物あり、其詳細を語れば、讀者は殆  
 んど信ぜざるならんが、此方法にて、露西亞人は夏よりも寧ろ冬に於て多く旅行せり、こは橇車  
 なれば、晝夜とも走るとを得ればなり。此邊は冬の間は、白雪皚々として、一面に銀世界となり、  
 丘陵も、溪谷も、河川も、湖水も皆悉く滑にして、石の如くに凝結し、假令何物あるも、毫もこ  
 れに拘はらず、その上を走るとを得べし。

されども我は、未だ曾て此る冬季の旅行を爲したるとなし、我の行くべき目的地は英國にて、

モスコウには非ず、而も執るべき道は二つあり、一はシエロスコウまで隊商と同行し、それより西の方ナリグアとラインランド灣に向て進み、海路又は陸路に由り、ダンチグに赴けば、此處にて我が携帶せる支那の貨物を高價に賣り捌き得るならん、一はドウイナ河上なる、一小邑にて隊商に別れ、それより水路僅か六日にて、アルカンゲルに達し、此所より更に英國か、和蘭か、或はハンブルグに別るを得べし。

さて此二途は執れに行くも、冬期には甚困難なり、ダンチグの方を取らんか、バルチック海氷結して渡る可らず、若し陸路よりせんか、沿道の危険は蒙古鞆紐の地方よりも太甚し、又アルカンゲルに出でんか、十月に至れば、船舶悉くこゝを去り、夏季に此地に住居する商人さへ、冬季には南の方モスコウに退きて、一人も留まる者なし、されば我は食料の缺之せる上に、嚴酷なる寒氣と戦ひつゝ、冬中無人の町に居らざる可らず、之を思へば、寧ろ隊商と別れ、緯度六十度の地なる此トボルスクに滞在して、冬季の準備を調ふることを、最も得策なれと考へたり、蓋し此處に居れば、嚴冬の寒氣を凌ぐに便なる三個の事項具はり居ればなり、三個の事項とは、即ち多量の食料と、五分薪材の時ある温暖な家屋と、良好伴侶具はれなり、尙ほ其詳細は次に之を述べん。

我は夫のいと愛なき島に居る頃は、瘧を病みし時の外は、決して寒氣を覺えしことなかりしが、今はその氣候全く相違せる所にあり、嚮きには戶外にあるときか、食物を調理する時の外は、骨

て火を要せざりしが、今は身に數多の衣服を纏ねざる可からざりし故、三枚の好き胴衣を作り、其上に大なる上衣を着し、これを足の邊まで垂らし、手首の所は鈕子にて緊と締め、其裏は柔毛を着けて、充分暖かになせり。

家を煖むる方法に就ては、英國に於ける如く、煙突の兩端を開け置き、各室にて火を焚くとは、我は甚だ之を好まず、何となれば一旦火の消ゆる時は、室内の溫度忽ち戶外の如く寒冷となればなり、故に此町にて一軒の喜々家を借り受くるや、六室の中央に、竈の如き一個の爐を設け、其煙をば一種の煙筒を通じて、一方より發散せしめ、以て各室を同等に煖め、而も火の見をざる様に装置せり。

此くして、室内は常に同等の溫度を保ちたれば、戶外は寒氣甚しきも、室内は常に溫暖にして、而も火を見ず、又煙のために若めらるゝともなかりけり。

### 第廿四段

僻地に名士と會談し義俠能く一子を助く  
途中危難に遇ひ九死に一生を得て英國に歸る

歐洲の最も北部に位して、氷海に接し、ノヴァゼムブラを距ること數度に過ぎざる、此蠻地に於て、貴顯紳士の方々に邂逅するを得んとは、誠と思ひ設けざることなり。此地は前にも言ひ

し如く、露國の國事犯者の追放せらるゝ所なるが故に、此市には、露國の貴族、紳士、軍人、朝官其他諸種の人士甚だ多く、其中に有名なるガリオゼン公、老大將ロボスチスキイ其他知名の人々と數名の貴女あり。

さて夫のスコット商人とは、此地に於て別れけるが、これより先き此人の紹介にて、此等の紳士並に第一流の人々と交際を結び、滞在在中、長き冬の夜に、此等の人々より訪問を受け、愉快に談笑したること數なりしが、一夜公爵某氏と會談せしとき、談次我が特別なる事情の物語に及びたり、此公爵は嘗て露國皇帝の國務大臣たりし人にて、此地に追放せられたる者なりしが、公爵は露國皇帝の權力の無限なること、版圖の廣大なること、さては宏壯雄大なる事物の夥多なることなどを語りしかば、我は其言を遮りて、我が版圖は左程大ならず、又人民も左程多からざれども、我は嘗て露國皇帝よりも一層偉大にして、且一層有力なる君主たりしことを語りしに、公爵は少しく驚き、我を凝視し、漸く我が言を怪みたり。

此に於て我は公爵に向ひ、一度我が身の經歷を説明せんには、怪訝の念も消失せらるべしと述べ、さて我は、所有臣民の生命と財産とを、絶對に處分するの主權を有せしことを首めとし、かく專制の權力を有するに拘はらず、我が版圖内の臣民は、我が施政に對し、又は我が人となりて對し、不滿を抱ける者一人もなかりし事など語りしに、公爵は首肯して、そは實に露國皇帝にも優

れりと言ひしかば、我は又語を繼いで、我國内の土地は、皆我が所有にして、臣下は皆我が借地人たるのみならず、我が任意の借地人なりし事、臣下は皆我が爲めには身命を惜まずして、飽までも奮戦すべき事を説き、且つ我が如き專制君主にして、我が如く臣下より一般に敬愛せられ、而もまた斯く畏怖せられし者、決してこれあらざりし事を語りたり。

暫時は此政治的謎を以て、人々を慰めし後、我は更に口を開きて、さて我が島に在りし時の生活の様と、今前に述べし如く、我が身の處世法並に配下なる人民の管治方法などを語りしに、人々は非常に我が物語に感激したり、殊に公爵は嗟嘆して、徐に言ひけるやう、凡そ人生の眞誠に偉大なるは、自主にあり、若し彼(公爵)にして我が如き境遇に在らんか、假令露國の皇帝たるを得べしとするも、此を以て彼と交換することなかるべし、曾て自ら露國皇帝の朝廷に立ちて、最高の權威を有せし時よりも、此處に追放せられて隱退する今日の方、却て一層幸福多きを覺ゆるなり。抑も人智の高き所以は、我等の性情をして、その境遇に適應せしめ、而して假令以外に如何なる輕侮を受るも、内に自ら平穩を保つに在り、己が初めて此處に來りしときは、悲憤の餘りに、恰も他人の爲し如く、或は頭髪を毫り、或は衣服を裂きしことありしが、少しく考一考して、周圍の事物を視察すると共に、自から己れを省みるに及び、かくて一旦人生の狀態に就て考慮し、此世の事物が、其真正の幸福に關係すること少き所以を悟るに至れば、人の心は此世よ

り殆んど補助を受けざるも、能く自から幸福を造り、充分之に満足して、自己の最善なる目的と希望とを達するを得べし。思ふに此世が吾人の爲めに爲し得る事は、呼吸する空氣、生命を支ふる食物、身體を温むる衣服、健康を保つ爲めに運動するの自由、これその全部なり、富貴、榮達、快樂の如きは、或人が此世に於て享有するものにして、我も亦嘗て其分配に與りしことあり、其中には吾人に愉快を感ぜしむるもの多しと雖も、此等は畢竟主として吾人の欲望、高慢、貪慾、虚榮、情慾といふが如き、人の性情の中、最も野卑なるものを満足せしむるに過ぎず、此等は實に人性の中、最も惡劣なるものの産物にして、そのものが既に罪惡なり、且その中に諸種の罪惡の種子を含めり、されば此等は吾人をして賢明ならしむる徳義、若くは吾人を基督教徒として、區別する恩恵と、何等相關する所あるなし。今や此等の不徳を行ふをもて樂みとせる夢幻の如き幸福は、既に己が身より奪ひ去られたるを以て、爰に其暗黒面を觀察するの餘裕を得て、初めて之が諸種の醜態を發見したり、而して人をして眞に賢明、富裕、偉大ならしむるものは、唯徳義にして、是れ即ち未來に於ける最上なる幸福に導くものなること、明確となれりと、諄々として説き、更に言葉を繼ぎ、己等の如き此地に追放せられし者は、之に代て富貴、權勢を恣にする、その仇敵よりも、一層幸福を享有せりと語りたり。

此偉人と、我が最も愉快に談話せし事項は、今詳しく之を述ぶるの餘地なければ、その言論に

敬すれば、其精神が崇高なる知識を感得し、之を扶助するに、宗教並に多大の智慧を以てし、此世を賤しむること、實に既に陳述したるが如くにして、而して終始その所信の變ぜざりしは、我が今特に語らんとする談話の中に明なり。

さて此地に八個月間滞在し、暗憊たる嚴冬を過しけるが、寒氣劇甚しく、毛皮の衣を纏ひ、毛皮の假面、いなどよ奪る頭巾にて、目と口とに穴を穿てるものを被らざれば、一切外出することも叶はず、凡そ三月の間と覺えたり、日光を見ること、一日に五時間、長くも六時間に過ぎず、雪の断えず地上に積れると、天氣の晴朗なりしとによりて、全く暗黒ならざりしのみ。我等の馬はこれを地下の室に飼置しが、殆んど飢餓せる状態なりき、又馬と我等との世話に任ずる爲め、此地にて三人の僕奴を雇ひしが、時々その手足を煖めしめたり、そは其指の凍りて、落ちんことを恐れたればなり。

家屋は密閉せられ、壁厚く、窓小さく、總て二重硝子なりしかば、室内は温暖なりき、食物は主に鹿の乾肉を用ひ、麵麩は味好く充分なりしも、「ビスケット」の如く焼らしものなり、其他數種の乾魚、羊肉並に水牛の肉あり、此肉は風味可なり良好なりき。冬季の食料は、總て夏季に好く乾して之を貯藏し、飲料は焼酎を混ぜたる水にして、客ある時は、葡萄酒の代りに糖蜜水を用ひたれど、その質精良なりき、獵師は寒暑風雪を問はず、獸を獵り、鹿鮮肉を携へ來り、時に或

は熊の肉を持ち来りしことあり、されど熊の肉は我等の口に適せざりき。茶は多量に蓄へたれば、之を以て屢友人を饗應したり。要するに萬事に就て、我等は甚だ愉快に耽慕したり。

既にして三月となり、日も著く延び、氣候も堪へ得べき程になりたれば、他の旅客は雪の上を越え行かんとて櫓を用意し、漸く出立の準備をなしたれど、既に述べし如く、我は白海の一港アルカンゲルに向ふことに定め、モスコウ又はバルチック海に赴くにあらねば、我は毫も出發の支度を爲さざりき、そは南方よりアルカンゲルに来る船は五、六月頃までは、未だ氷を解かざるを以て、八月初旬までに、其地に行かば、船の出帆の間に合ふべきことを知り居たれば、他人の如くに出發を急がざりき、要するに、多數の人々、いなとよ旅客は皆我に先ちて、此地を出發したり、彼等は毎年商賣のため、此處よりモスコウに行くが如し、即ち毛皮を携へ行きて、必要品と交換し、これを持歸りて、商店に供給するなり、又此他同一の目的にてアルカンゲルに行きしものありしが、此人々は再び八百哩以上歸り來らざる可らざるを以て、皆我に先だちて出發したり。

かくて五月の末となりければ、我は荷物を結束し、諸事出發の準備に取掛りしが、斯りける間に不圖胸に浮びし事あり、そは露國皇帝の爲めに此地に追放せられし人々を見るに、一旦此處に來るや、何處に行くも、各自の自由なるに、己が欲する所に行かざるは、何故なるかといふことこれなり、是に於て我は、此人々が斯る企圖を爲し得ざる、その理由を調査せんとぞ思ひ立ちける。

然るに、此事を夫の公爵に問ひて、其理由を聴き、我が怪訝の念は、忽ち消失せたり、その答に言へらく

「君先づ我等の居る場所を考へてみ給へ、次には我等の境遇を考へてみ給へ、殊に此處に追放された人々を概観してみ給へ、我等は關門よりも嚴しい物に、圍繞まれて居るではないか、北には氷海があつて、船舶の通航もならず、端艇も浮かないし、又假令は船舶か、端艇を得たとしても、これに乗つて何處に行くことが出来るか、其他何の道に向つても、皇帝の領土内を二千哩以上は通過しなければならぬ、而も政府の造つた道路を通り、且軍隊の屯營して居る町々を経なければ、全く通過することが出来ない、それ故道路を通過すれば、必ず發見されるし、其他には方法がないとすれば、所詮逃亡を企て、それは到底無益だよ。」と語りたり。我は之を聴きて、忽ち口をつぐみぬ、嗟呼彼等は實にモスコウの城中に禁個せられしと、毫も異なる所あるなし、されど如何にもして此偉人を逃出しむる手段なきか、如何なる危険を冒すも、試みに彼を脱出せしめんものと思ひ定めぬ、此に於て一夕好機會ありければ、我が思ふ所を彼に告げていふやう、此地には監視者なければ、彼を伴ひ去るは甚容易し、我はモスコ

ウに赴くは非ず、アルカシゲルに行くなり、且つ隊商として旅行する者なれば、沙漠の中の一定の町に宿泊するにも及ばず、毎夜己が欲する所に野營を張るも亦自由なり、斯くして難なくアルカシゲルに着し、直に彼を英船或は和蘭船に乗せて、安全に脱れしむるを得べし、又その生計の方法、其他の事に就ては、彼が自から支へ得るに至るまでは、我之を心得べしと。

我の斯く語りけるを、彼は深く留意して聴き、且つ熱心に我を熱視し居けるが、我が言によりて、その精神をいたく興奮せしめしと見え、顔色も風變じ、双眼は紅を呈し、心臓の鼓動せしは、その顔色に顯はれ、直には答ふることも叶はざりき。さて我は話し終りて、彼の答を待ちしに、彼は霎時躊躇せし後、我を擁して言ひけるは、

「嗟呼、我等は何といふ不幸だらう、こんなには保護ない人間であるから、友誼上から心ばかりに盡した欺待が、却て身を陥るゝ圈套となつて、お互に疑惑を抱かせる様になるのだ、君、君の言つた言葉を味つて見ると、その中に敵意と親切とが籠つて居て、少しも私心を揆ぜず、只管我輩の利益のみを計つて言はれたのである、若し之を聴いて驚嘆すると共に、之に對して感謝しないなら、それこそ我輩は此世の人情を少しも知らないものと言はれんければならない、しかし我輩が此世に重きを措かぬことに就ては、あれ程度々君に語つたが、それを我輩の真心から出たと君は信じて居られないのか。我輩は此所に來てから、此世に於て得

らるべき、最大の幸福を得たといふことを、君に語つたのは、我輩の肺腑から出たといふことを、君は信じて居られないのか。嘗て我輩は宮廷に居つた頃、君恩に浴したのと同様の待遇を受け得らるゝからといつて、今喚返されても、我輩は歸還することを好まない、君に語つたが、それは我輩の誠意であると、君は信じて居られないのか。君、我輩を正直物だと信ぜらるるか、或は虚言をいふ偽善者だと思はれるか。」

と述べ了はり、是に於て、公爵は我が言ふ所を聴かんとする者の如くに、話を中止しけるが、我は須臾にして知れり、實はその精神動亂し、心中煩悶せし爲め、言葉を續くること叶はて、中止したるなり。我は此偉人の人物に關する如く、また事態に就て、いたく驚きしが、如何にもして彼を勵まして、自ら自由の身とならしめんものと思ひ、論じて言ひけるは、是れ天が彼を救出せんとして門戸を開き給ひしなり、是れ此世に於て彼を有益、有利の者たらしめんとして、万能の神の召喚し給ふなれば、宜しく爾く考ふることを當然なれと述べたり。

彼は此時既に氣力を恢復しけるが、熱心に言ひけるやう、

「それは天からの召喚てはなくして、或は他からの誘惑かも知れないではないか、救助といふ幸福の形態を示して、我輩を惑はんとするけれども、其實は我輩を捕へんとする圈套であつて、直に我輩を滅亡に誘ふものかも知れない、此所に居れば、以前の様な憐じべき、頭榮

の位地に戻りたいといふ誘惑をば免れて居られるが、若し一朝舊の境遇に復歸れば、我輩の天性に残存て居る、傲慢、野心、貪慾、奢侈といふやうな、種々な分子が、悉く再び蘇生つて来て、終にはそれが成長して、要するに再び我輩を覆すだらう、さうすれば今精神の自由を全うして居る、此幸福な囚人は、身體の自由を得ると共に、自己の情慾の奴隸となるだらう。君、我輩が理性の自由を抛つた上に、今眼前に認めて居る、未來の幸福を捨て、自由の幻影を買はうとするよりも、寧ろ我輩は人生の罪惡を脱離して居る、此幸福な牢獄に留つて居たいのだ、何故といふに、我輩は肉に過ぎない一個の人間だ、只一個の人間たるばかりだ、我輩を左右したり、または覆没したりする感情や、慾念のあることは、毫も他人と異ふ所はないよ。どうか君、我輩のために、友誼を盡してやらうと思ひ給ふな、又我輩を誘惑し給ふな。」

と。我は前にも喫驚さしが、今は全く口を緘し、默然として彼を凝視しつゝ佇立し、只管その態度に感嘆しつゝ、僅に一、二言を述べて、彼に熟考を求め、再會を約して、我が自室にぞ退ぞきける。

それより凡そ二時間を経て、何者か我が室の戸口に來りければ、我は戸を開けんとせしに、公爵ははや戸を開けて入り來り、言ひけるは

「我輩の親愛する友、君は殆んど我輩を轉覆せんとしたが、我輩は回復したよ、我輩が君の言葉に従はないのを惡く思つて呉れ給ふな、是れは決して君の親切を無にするのではない、君の好意は十分に領承して居るが、我輩は幸に己れに打克たんことを望むのである。」

と。我は  
「閣下、閣下は天の招きを拒み給ふことは萬々あるまいと望みます。」

と言ひしに、彼は  
「君、若し天からの招きであるなら、それ相應の力を以て、我輩にそれを拜承せしむることに

なるだらうが、我輩は却て之を拒むのが、天の命する所であると十分に信じて居るよ、我輩を自由の人としないでも、責めては正直の人とならせるなら、これが分袂に臨んで、何よりの満足です。」

と言ひたり。是に於てか我は、かく説きしは、只管誠意を以て彼の爲めに計らんとする外、何の目的もなかりしことを公爵に告げて、此事を中止するの外なかりしが、彼はいと熱心に我が手を握りて、私の親切を深く感じ、終生之を忘るべからずと言ひ、かくて極めて美麗なる貂皮若干を我に贈れり、斯る境遇にある人よりして之を受るは、實に過分なりと思ひ、之を辭せんとせしかど、そは遂に肯かれざらざり。



翌朝に至り、我は僕を遣はし、茶若干、支那緞子二反、日本金貨四個を輕微ながら公爵に贈れり。日本金貨は總て六「オンス」位に過ぎざれば、公爵の贈れる貂皮の價に比すれば、遙に少額なり。此貂皮は後に英國に持歸りしに、殆んど二百磅の價值ありたり。彼は茶と緞子一反、其表面に美麗なる刻印ある日本金貨一個を受納めしが、其他は取らざりき。日本金貨を納めしは、珍らしかりしためなり、かくて公爵は僕に托して、我に會談したき旨を言ひ來りたり。

故に我はこれを訪ひしに、彼は我に向ひ、曠昔の事柄は、我の既に知る如くなれば、此上更に彼を勵かざらんことこそ望ましけれ、されど彼に對して、既に斯る寛大の好意を表したるなれば、それと同様の好意を、他の人に對しても示さるべきか如何にぞや、幸に此の親切を垂れらるるならば、其人の姓名を告ぐべし、そは彼に大なる關係ある者なりと言ひたり。我は之に對し、我は特に公爵を尊敬すればこそ、悦んで救出さんとはするなれ、されば彼自身の外に何人にも此程までに親切を盡すべしとは、今言ふこと能はざれど、若し其の人の姓名を告げられれば、何分の答をなすべし。されど假令我が答を悦ばれずとも、我に對して不快を感ぜざらんことこそ望ましけれと言ひしに、彼はそは別人にあらず、彼の子息なり、我とは未だ會見せざりしかども、公爵と同一の境遇に在りて、此所より二百哩以上を距て、オビ河の彼岸に住居せり、若し我にして承諾せば、彼を呼び迎ふべしと語りたり。

我はかくと聞き、些も躊躇せず、力を致すべしと告げ、是れ全く公爵の爲めになすなり、我は公爵を説伏すること叶はざりしがば、その子息の爲めに計り、以て公爵に敬意を表せんとするなりとて、彼れ此れ辭令を盡して挨拶せしが、それ等の事は煩はしければ茲には言はず。かくて翌日彼は人を其子息の許に遣はしけるに、二十日許りを経て、子息は六七頭の馬に、「いと高價なる數多の毛皮を積みて、使者と共に歸り來れり。その従僕等は、馬は直に町に入れ、若主人をば遠方に待たせ置きしが、夜に入りて、此貴公子は密かに我等の室に來り、その父なる公爵より我に紹介せられたり、要するに我等は、旅行の方法並に之に必要な事共に就き、種々相談をぞなしける。

是れより先き、我は貂皮、黒狐皮、黃鼬の皮其他甚美麗なる毛皮を多分に買入れけるが、こは支那より持來りし貨物と當市にて交換したるなり、殊に丁子、肉豆蔻の大半は、此處にて賣り、その餘は後にアルカンゲルにて賣りけるが、倫敦に於けるよりも、高價に賣れたり、又我が組合人は利益に鋭敏にして、我よりも特に商賣を業とせる人なれば、此所に於て幾多の取引を爲し得たりとて、此地に滞在せることを大に喜びけり。

さる程に、世界に其名も殆んど聞えざる此僻地を出立せしは、六月の初旬なりしが、此地は商業の通路より隔離せること如何にも遙なりしがば、多く語るべきことなし。さても我等一行の隊

商は、前に比してその規模甚だ小さく、馬と駱駝とは通算して、僅かに三十二頭にて、其中十一頭は、我が新客の所有なりしが、總て之を我が物と稱して通行したり。又從僕は以前よりも多數伴ひしが、これ自然の勢にして、貴公子は私の執事と稱しおきたり。かゝりければ、我は自から如何なる大人物として通行せしか、我之を知らず、又之を問ふの要なしと雖も、こゝに困難なりしは、我一行の通過せし沙漠が最も悪しく、且つ最も大なりしことなり、之を最も悪しかりしと稱する所以は、其道路或は甚だ窪める所あり、或は甚だ凹凸せる所あればなり、されど只その最も都合宜しかりしと謂ふべきは、此邊には鞆鞆人と盜賊の虞なかりし事にて、オビ河の此方には、彼等の出沒すること決してなかりき、或は少くも甚だ稀なりき、されど後に至りて、其然らざることをぞ知りける。

貴公子はシベリア生れの忠義なる僕一名を召連れけるが、此僕は此邊の地理に詳しかりければ、その嚮道により、我等は間道を辿り、本道に沿へるチヌメン、ソーライ、カムスコイその他の都市をば避けて通過せざりき、そは此等の地には、露兵の屯營あり、旅人の監視いと嚴重にて、殊に著名なる追放人の、此地方より脱出せざるやう、詮議怠りなかりければなり。されど我等はかくして都市を避け、間道を取りたれば、勢常に沙漠を旅行し、都市に宿泊するの便宜を捨て、餘議なく天幕を張り、その内に横臥しけるが、貴公子は極めて常識に富める人なりければ、我等の

野外に宿泊するを、いと氣の毒に思ひ、途中往々都市の邊を通過せるときは、己のみその僕と共に森の中に露宿し、翌日指定の地に於て、我等と落合ひしこともありたり。

さて我等はカマ河を過ぎて、歐洲に入りけるが、此河は此邊に於て歐亞兩洲の境界を爲し、歐洲側に在る最初の市は、ソーライ、カムスコイと稱し、實にカマ河畔の大都市なり。此地に來れば、住民の風俗、習慣、宗教、職業など、著く變化するならんと思ひしに、そは誤りなりき、尙ほ前途に通過すべし一大沙漠あり、人の談に據れば、或る所にては、長さ殆んど七百哩に達する所あり、されど我等の通過せし所は、二百哩には出てざりき、此る形勢なりければ、此恐るべき地方を通過せしめては、土地の模様、蒙古鞆鞆と殆んど異なる所なく、人民は大概異教徒にして、米國の蠻人に異ならず、其町と家には、數多の偶像を安置し、其生活の狀態、全く蠻風を脱せず、但し上に掲げたる都市と、其附近の村落には、希臘教會の基督教徒と稱する者あれども、其宗教には、多く迷信の遺物を混じ、巫術、妖法と區別すること能はざる場所少からず。

豫ねて想像せし危難は、既に述べたる如く、皆之を免れしも、今や此森林を通過するに際し、はしなくも盜賊の一群に遇うて、我等は奪掠の災害にかゝるのみならず、恐らく身命も危からんかと思ひたり。彼等は何國の輩なるか、或はオビ河畔の鞆鞆人か、或は野民の一種なるオムチアチの漂泊隊の、かゝる遂に來りしなるか、或は西比利亞の貂皮獵隊なるか、我は未だにこれを

知らざれども、彼等は皆馬に跨り、弓矢を佩き、初めは其數四十五人許にて、凡そ二彈着距離の内まで我等に近づき來り、一言の間をも發せずして、我等を圍み、いと熱心に注視すること二回に及べるが、竟に我等の前途を遮りぬ、是に於て我等一行は僅かに十六人に過ぎざれば、駝の前に一列に並立し、此くて貴公子に伴へる夫の西比利亞人を遣はして、その何者なるかを視察せしめたり、此は貴公子が、或は彼を追ひ來りし西比利亞軍隊ならずやと氣遣ひ、殊更其僕を遣はさんと望みたればなり、さても此僕は休戦旗を携へて、彼等に近づき、種々の方言を用ひて話し掛けしも、全くその言葉を解する能はざりき、されどこれに近づくと危険なりとの合圖ありしかば、若し進まば射殺する意ならんと解し、空しく歸り來りしが、其服裝にて察するに、カマツクの鞆組人か、又はサーカシヤンの漂流民にして、此大沙漠中には、必定尙ほ多數徘徊し居るものらん、但し彼等が、斯く北方まで現はれしことは、未だ嘗て聞きたることなしと語りたり。

此にて少しく安心したれど、未だ避難の策なかりしが、左の方凡そ四分一哩を距て、一の小林あり、樹木密接して、道路に接近したれば、我は直に此林の方に進みて、成るべく防禦の手段を爲さんと決心しける、そは此林中に入らば、一つには樹木の爲めに大抵は彼等の矢を凌ぐを得るならん、二つには彼等は隊を成して、一度に攻め來ること叶はざるべしと思ひければなり、此策は、實は夫の老齡なる葡萄牙の水先案内者の獻せしものにて、此者はその性慧敏にして、危険

に際しては、最も善く我等を指導獎勵せること度々なりき、是に於て我等は、直に疾驅して、かの小林に達しけるが、鞆組人、或は盜賊(何と呼ぶべきかを知らず)は、依然として其位地に立ち、我等を妨げんとせざりしが、さて此處に來りて、大に満足せしは他にあらず、此林は沼澤にて、一方にいと大なる泉あり、其水小河となりて流れ出て、漸くにしてこれと粗同じき他の小河と相合して流る、此れどかのサイントスカと稱する、一大河の源なりける。此泉の邊に生茂れる樹木は、其數二百本を超えざれど、甚だ太くして、且つ稠密なれば、敵が馬を下り、徒歩にて攻撃せざれば、我等は全く安全なりき。然るに一層敵の攻撃を困難ならしめんとて、葡萄牙人は非常に努力して樹木の太枝を伐截し、而も之を全く切斷せずして、樹より樹に垂下せしめ、此くして連續せる柵を以て、我一行の周圍を取圍みたり。

かくて我等は此に停まりて、敵の動靜を窺ひしに、敵は暫時何等行動する様子も認めざりしが、日暮前凡そ二時間に至り、驀然として進み來れり、此方は心付かざりしが、何時の間にか、その同勢増して殆んど八十騎許りとなり、その中には、婦人も混じ居たりし様子なり、やがて彼等の漸く林に近づき彈着距離の半に達せし時、此方より空銃一發を放ち、露西亞語にて、彼等は何を求むるか、此方に近寄るべからずと呼はりしに、彼等は毫も之を知らざるもの、如く、一層猛烈に突進し來り、此方の防備堅固なりとは思はざる如くなりしが、此方に於ては、かの老水先

案内は、これ迄工兵として防備に力を盡せし如く、今は隊長として我等一同に向ひ、敵が拳銃の弾着距離以内に攻寄せ来りて、最早狙を過たず、必ず命中すべき地點に達するまでは、決して銃を發つべからずと請ひければ、彼をして發射の號令を爲さしむることとせしに、彼は容易にこれを發せず、遂に發射せし時には、敵兵の中最早眼前に迫れるもありき。

我等の狙正確なりしか、天の冥助によりて、我等の彈丸を正しく向けられしか、賊兵十四人を斃し、數人を傷つけ、又其馬數頭をも傷けたり、そは此方は皆少くも二三彈づゝ装填し置きたればなり。

さて彼等は此方の射撃にいたく打驚き、直に百歩許り引退きたれば、我等は再び装填せしに、敵は尙その位置を去らざりしかば、此方より突出して敵の馬四五頭を奪ひたり、其騎手等は多分戦死せしならんが、その死體の側に來り見て、容易にその縫組人なることを知りたれど、抑も彼等は何處より來りしか、將如何なれば斯く遠方まで出征したりしか、其理由は之を知るに由なかりき。さる程に凡そ一時間を経て、彼等は再び此方を攻撃せんとて、森の周圍を駆け廻り、何處にか攻入るべき空所やあらんと視察したれど、防戦の用意怠りなきを見て、再び引返したれば、我等も其夜は斷然林より出てざりき。

讀者もさこそと察すらん、其夜我等は殆んど眠らて、大半は之を防備のために費し、切に警戒

を嚴にしつゝ、夜の明るを待ちしに、天明に至りて甚憂ふべき事實をぞ發見しける、即ち敵は既に遭遇せし此方の對戦に避易したらんと思ひさや、其數は増して今や三百餘に下らず、且つ既に十一、二の天幕を張り、恰も我等を圍まんと決心せしもの、如く、此所より凡そ一哩の四分の三も距れる平原に、その陣をぞ布きたりける。我等は此事を發見するや、實に驚愕したり、噫我は幾多の艱難と危険とを経て、今や安全に脱れ出らるべき港さへ、最早程遠からぬ所に來りて、斯る蠻人の手中に落ちんかと思へば、無念遣る方なし、我が生命も、我が貨物(夥多なりしも)、これ迄なりと斷念したり。又我が組合人も悲憤に得堪へぬもの、如く、その貨物を失ふは、これ彼が滅亡ならん、餓えんよりは、寧ろ死するに若かずと呼はり、最後まで戦はんとぞ決心しける。

勇敢無双なるかの貴公子も、亦最後まで戦はんと主張し、又我老水先案内も、此地點に於て防戦せば、敵の全軍に抵抗するを得べしと言へり、斯くて其日は、徒に此等の討論に費しけるが、日暮に至り敵の數は尙ほ増加し來れり、思ふに彼等は恐らくは數隊に分れて、所在に獲物を漁りつつありけるに、我等と邂逅せる此第一隊より、使者を他の隊に遣はして、援助を求め、且好さ獲物此所に在りと報知したりしなり、されば翌朝までに、敵勢尙愈増加すべしと推断するの外なかりき、此に於て我は、トポルスクより伴ひ來りし人々に就き、夜中に敵を避けて、或都市に退くか、又は此沙漠を渉るための援助を何處にか得んため、脱れ出づべき他の間道なきかと問質

「貴公子の僕なる、かの西亜利亞人は、我等に語りて言へるやう、若し戦はずして、彼等避けんと欲するならば、北の方へチヨラ河に到る間道まで、夜に乗じて我等を嚮道し参らすべし、此道に由れば、逃れ得べきこと萬疑なし、鞑靼人も決してこれには氣付くことあるまじ、されど主人は先きに彼に語りて退くまじ、寧ろ戦ふことを望ましけれと言へりといへり。是に於て我は此僕に向ひ、そは主人の趣旨を誤解し居るならん、主人は頗る賢明なれば、戦のために戦を好む者には非ず、其勇敢なることは、既に示せる舉動によりて十分これを知れども、避くべからざる必要に迫られずば、十七八人を以て五百人と戦ふが如き、無謀の人にはあらじ、若し彼(僕)にして夜中に脱るゝことを得べしと思はば、我等は之を決行するの外なしと語りけるに、彼は若し主人がかく命ずるならんには、身命を賭して、之を果さんと答へければ、速に主人を連れ來り、彼をして私に命令を與へしめ、かくて我等一同は直に之を實行するの準備にぞ取かゝりける。

かくて先づ日暮れて漸く暗黒となるや、我が小かなる陣營に火を燃し、終宵火の消えざる様に設備し、以て鞑靼人等をして、我等が猶ほ此所にありと思はしめんと計りぬ、かくて日全く暮れて、星の輝く頃(案内者はそれより前に出發するを好まざりければ)となるやいなや、是れより先きに馬と駱駝に荷を積み載せおきたれば、我等は此新なる案内者に從つて出立ちけるが、彼は

北斗星を指針として進行したり、蓋し此地方は四方茫々として平坦なりしが故なり。

それより二時の間最も烈しく旅行しける後月漸く昇り、我等の願はざる程明るき夜とはなれり、かくて翌朝六時までに、殆んど四十哩を馳せけるが、そがため馬は皆殆んど疲れはてたり。茲にケルマジンスケイと稱する露西亞の一村落ありて、此村に休息せしが、其日はカルマツクの鞑靼人に就ては、何事をも聞かざりき、日暮より凡そ二時間前に再び出立し、翌朝八時まで進行し、以前ほどには急がざりしも、七時頃キルトザアと稱する小河を渡り、オゾモイスと稱して、露西亞人の多く住居せる一の大邑に着しぬ、此地にてカルマツク人の數隊が、先きに出て、沙漠に在りとの噂を聞きたれど、今は全くその危難を脱したれば、我等の満足一方ならざりしは、讀者のさこそと思ふ所ならん。さて此町にて、新に馬を購ひ、且つ十分に休息せんとて、五日の間こゝに滞在したり、此際我は組合人と相談し、此處まで我等を導きくれたる、此正直なる西比利亞人に案内料として、金十「ピストール」(西班牙金貨の名にて一「ピストール」は凡そ我三圓六十錢に當る)を與へたり。

それより五日の後、我等はウイトゾグダ河畔のベウスリマに達しけるが、此河はかの大河ドウイナに注ぐを以て、舟行七日にして、アルカンゲルに達すべければ、幸にも陸上旅行の終局に近づけり、それより七月三日に、ロウレンスコイに到着し、二隻の荷物船と、我等の乗るべき端艇

一雙とを準備し、七日に乗船して、十八日に無事アルカンゲルに着せり。旅行日数は、トボルスクの八ヶ月餘の滞在を合算して、一年五個月と三日なりき。

さて我等は、船の到着を待つため、止むを得ず六週間此地に滞在せしが、若しハムブルグの船にして、英國船より早く來らざれば、尙ほ一ヶ月餘も空しく滞在せしならん。さて獨逸のハムブルグ市は、倫敦市の如く、我等の貨物を賣り捌くに、或は好市場なるべければ、稍考慮の後、貨物を此船に積み込みしが、我が執事を船に遣して、貨物を監督せしむるは、最も自然の事なれば、かくなしけるに、之によりて貴公子は、其身を隠すべき好機會を得たれば、我等が此市に滞在せし間、彼は嘗て上陸せざりき、そは若し上陸せばモスコウ商人の目に觸れて、發見せらるゝ虞ありたればなり。

かくて同年八月二十日を以て、アルカンゲルを出帆し、航路格別の難事なく、九月十三日にエルベ河口に到着せり、此地にて我も我が組合人も、支那の貨物並に西比利亞の貂皮等を頗る高價に賣り拂ひ、其實上金を分配せしに、我が受けたる配當は、ベンゴールにて購ひたる金剛石の價格六百磅を合はせ、途中に蒙れる幾多の損失並に費用一切を差引きて、總計三千四百七十五磅十七志三片なりき(第一地圖参照)

此處にて貴公子は我等と別れて、エルベ河を遡り、澳國の首府グイエンナの宮廷に赴かぬ、そは其所に到りて保護を求め、且其父の朋友にて、生存せる人々と通信するを得ればなり。彼は別るゝに臨み、我がこれまで彼のためにせる盡力と、彼の父なる公爵に盡せる親切とに對し、深く感謝の意を表し、その注意至らぬ所ぞなかりける。

さて我はハムブルグに殆んど四ヶ月滞在し、それより陸路和蘭陀國のハーグに到り、茲に飛脚船に投じて、千七百五十年一月十日といふに、倫敦にぞ歸着しける、是れ我が英國を出立してより實に十年九個月の後なりき。

さて我はかく變化極りなき七十二年の生涯を送り、退隱の趣味と平和に餘年を終るの幸福とを十分に覺りたれば、茲に我は此上更に危険を冒すまじと決心し、今は一層悠遠なる旅路に上るの準備をぞ爲し居るなれ。

奮闘 美談  
ろびんそんくるそう 大尾

明治四十三年十二月廿九日印刷  
明治四十四年一月一日發行

ろびんそん奥付  
實價金壹圓五拾錢

翻譯者 學窓餘談社

右代表者 松島剛

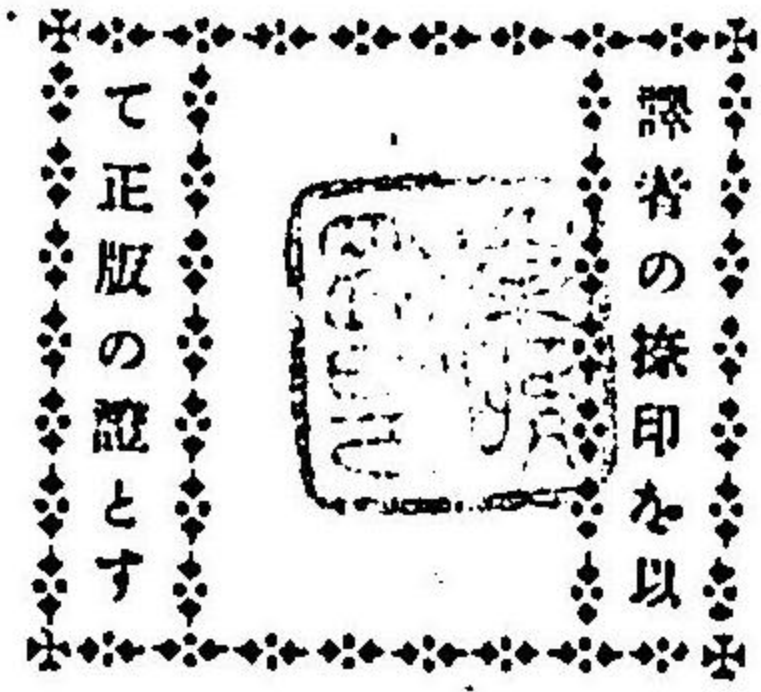
發行者 和田靜子

印刷者 小松操

印刷所 東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ十二  
株式會社 秀英舎第一工場

發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地  
春陽堂

電話本局五一七番  
振替口座一六一七番



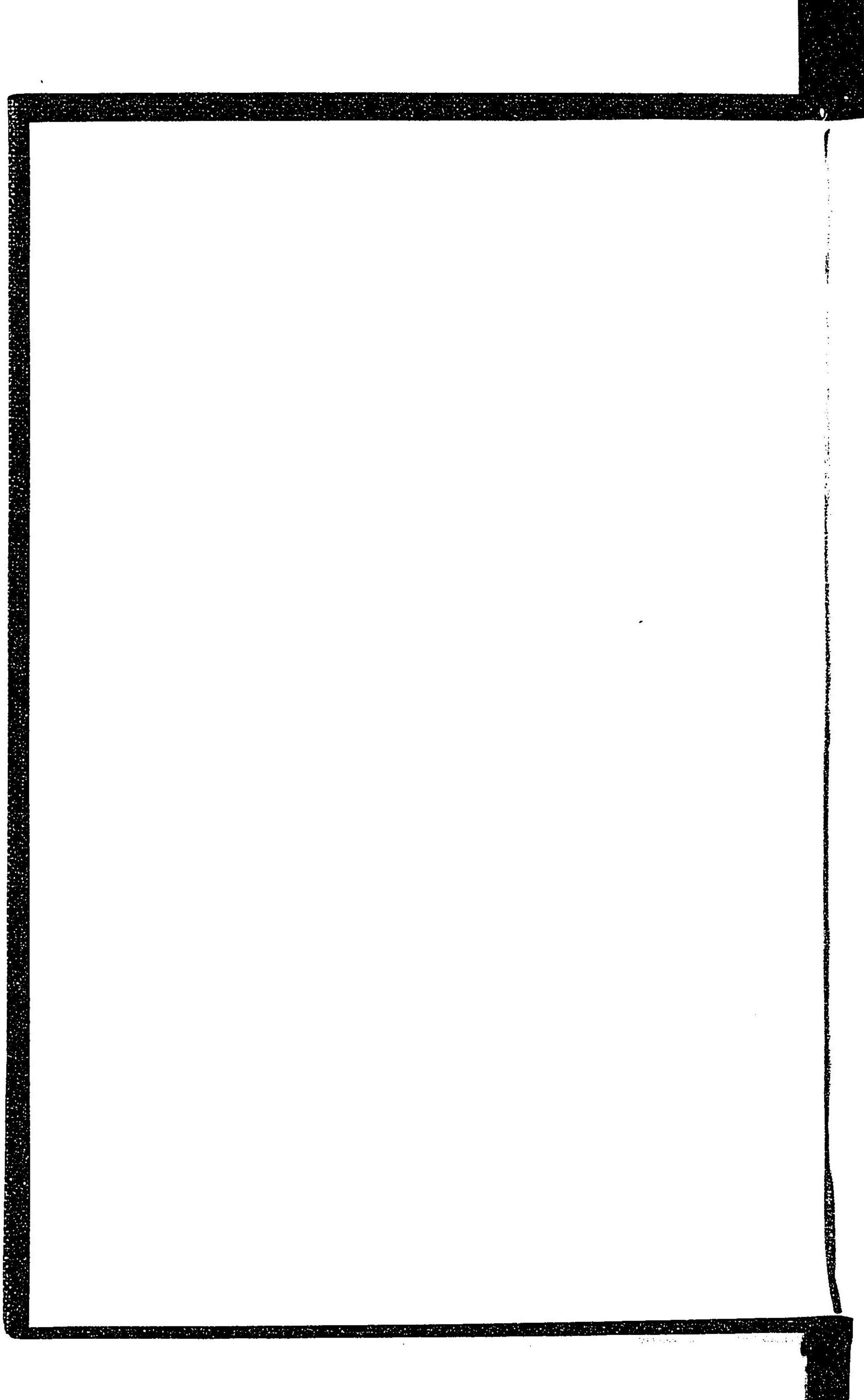
斗4R92

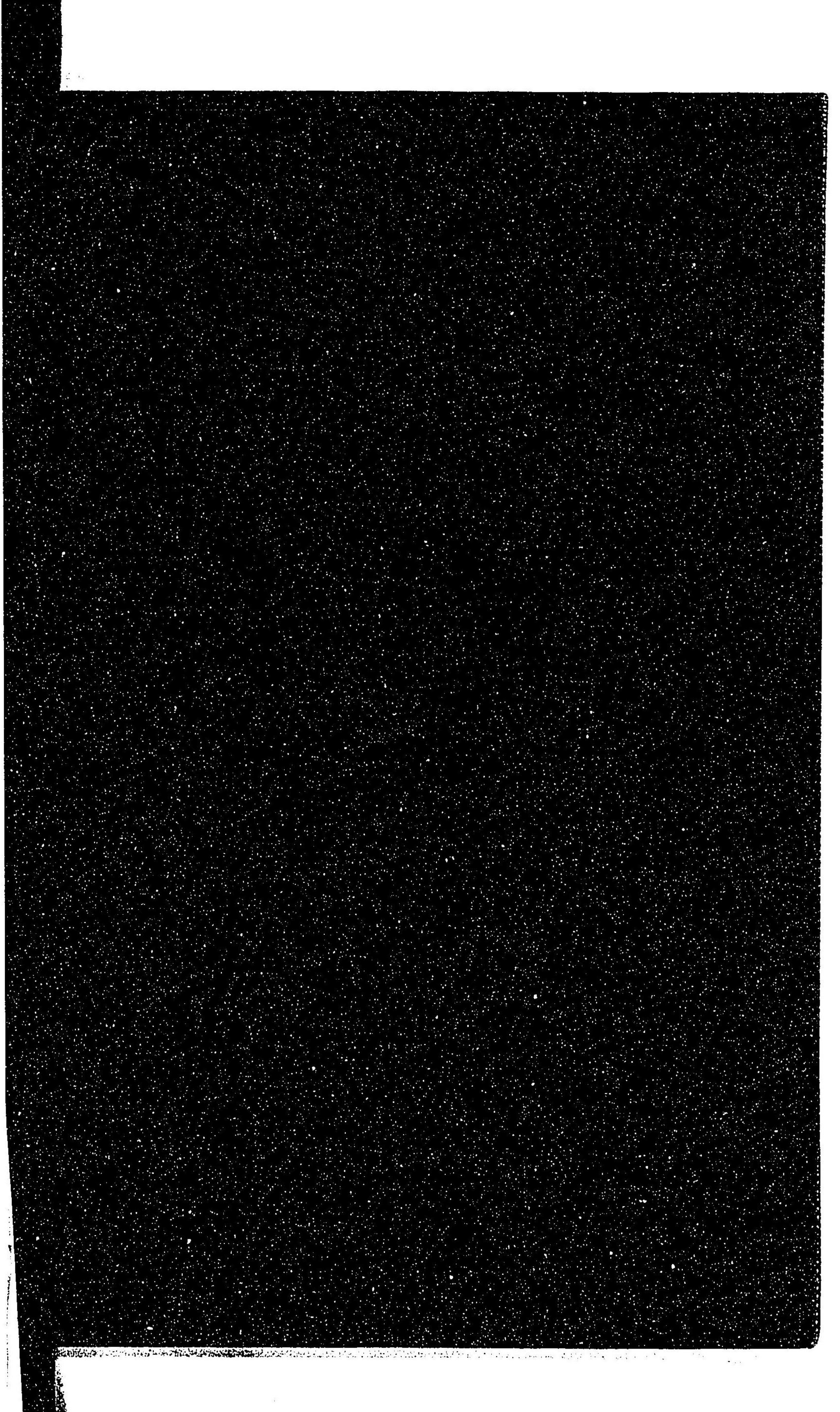
松島氏著譯圖書藏版

中外地理學	新地理學	近世地理學	近世地理學	近世地理學	臺灣事情	日清文明論	萬國史要	教育史	心理全書	社會平權論
全二冊	全二冊	全二冊	全一冊	全四冊	全七冊	全六冊	全八冊	全九冊	全九冊	全七冊
				日本の部全二冊	七百廿頁	四百一十頁	六百一十頁	八百五十八頁	九百九十四頁	七百九十六頁

亞細亞全圖	日本全圖	大日本全圖	世界全圖	府縣明細地圖	地方分轄地圖	地圖集覽	英和實用會話集	英和尺牘五百題	英語學大全	新撰英文讀本	英文讀本	英語新讀本	中外地理學
全一冊	全一冊	全一冊	全二冊	全一冊	全一冊	全二冊	全一冊	全一冊	全一冊	全三冊	全五冊	全五冊	全二冊
幅	幅	幅	幅	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊	冊







329

81



事故本

口絵不宛

S.59.7.2

101438-000-8

329-81

ろびんそんくるそう

学窓余談社/訳

M44

DBY-0776

